文部科学省
地(知)の拠点

地(知)の拠点整備事業　平成27年度実績報告書

新座市をキャンパスに！
＋(プラス)となる人づくり、街づくり

十文字学園女子大学
JUMONJI UNIVERSITY

地(知)の拠点整備事業　平成27年度実績報告書
新座市をキャンパスに！ ＋(プラス)となる人づくり、街づくり
十文字学園女子大学

十文字学園女子大学
JUMONJI UNIVERSITY

［目　　次］

はじめに ……………………………………………………………2
自治体からのメッセージ

1 十文字学園女子大学　地（知）の拠点整備事業の概要 ………………3
2 推進体制 ……………………………………………………………6
3 平成27年度事業報告
（1）活動記録
①会議等 ……………………………………………………………7
②地域貢献活動の事例
1）研究による地域貢献活動 ………………………………………9
2）学生による地域貢献活動 ………………………………………13
③地域志向教育 ……………………………………………………15
（2）情報発信（COC見える化） ……………………………………17
（3）COC事業シンポジウム …………………………………………19
（4）地域志向教育研究費
①採択経過・研究成果 ……………………………………………29
②平成27年度採択研究一覧 ………………………………………30
③平成27年度実績報告 ……………………………………………31
（5）地域連携共同研究所
①平成27年度研究課題一覧 ………………………………………71
②平成27年度実績報告 ……………………………………………71
4 事業評価
（1）評価体制 …………………………………………………………74
（2）平成27年度COC事業の評価結果 ………………………………74
①自己点検・評価委員会による評価結果
②外部評価委員会による評価結果
5 平成28年度事業計画
（1）スケジュール ……………………………………………………77
（2）平成28年度地域志向教育研究費 ………………………………78
（3）地域連携共同研究所の平成28年度研究課題 …………………79
6　資　料
（1）COC事業に係る文部科学省のアンケート結果 …………………81
（2）COCニュースレター ……………………………………………84
（3）COCセンターニュース …………………………………………90
（4）COC事業のチラシ等 ……………………………………………101
（5）新聞掲載記事 ……………………………………………………109

はじめに

十文字学園女子大学　学長　横須賀　薫

「新座市を（第二の）キャンパスに」を合言葉に「地（知）の拠点整備事業（COC事業）」が始まって今年度は3年目になります。何よりも学生たちが変わりました。成長しました。一人ひとりの学生が変わり、成長し、したがって層としての学生が変わり、成長しました。地域のみなさんにお会いすると「いい学生さんたちです」「学生が元気で気持ち良いです」と声をかけられます。本当にうれしいことです。

でも学生を育てていただいたのは地域のみなさんであり、地域のおかげだと、わたくしは心底そう思って、感謝しています。もともと地味で、目立たないが、芯に強いものを秘め、体力と活力がある学生たちです。大学で十分に引き出せなかったものを地域の力で表に引っ張り出してもらえたのだと思っています。

これに応えて、大学全体がさらに本格的に地域に貢献する道を進むことで恩返しをしたいと期しています。

自治体からのメッセージ

新座市長　須田　健治

十文字学園女子大学と本市が連携して取り組む「地（知）の拠点整備事業」（COC事業）も3年目を迎え、貴大学には本市をフィールドとした多分野にわたる研究を推進していただき、市の実施する事業にも多大なる御協力を頂いておりますことに心から感謝申し上げます。

平成27年度は「地域連絡協議会」や「＋（プラス）キャンパス連絡会議」を始めとする地域連携に関する意見交換の場を数多く設けていただき、また、本年2月にはCOC事業シンポジウムが開催され、「超高齢社会に向けた健康長寿のまちづくり」をテーマにしたパネルディスカッションに私も参加させていただきました。その中では、本市が直面している少子高齢化の現状とそれに対する取組である「健康長寿のまちにいざ」推進事業について御説明させていただき、参加された有識者の皆様からも大変貴重な御意見を頂きました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

各連携事業におきましては、新たな取組として、大学内に子どもたちの外遊びの場を設ける「プレプラ」事業や「ふるさとにいざ✤オータムコンサート」を実施するなど、あらゆる形での地域参画を進めていただいております。

さて、本市では、平成27年度に「にぎわいと活力のある　緑豊かなふるさと新座～新座らしい魅力が光る、選ばれるまちを創生します～」をスローガンに掲げた「地方創生総合戦略」を策定いたしました。その中では、貴大学を始め市内に三つの大学が在り、市政の様々な場面で御協力いただいていることを本市の強みとして挙げ、こうした強みを最大限いかしながら、定住人口及び交流人口の増加や地域経済の活性化に取り組んでいくこととしております。

市の総力を結集したオール新座体制で地方創生を進めていくためにも、貴大学との連携の輪がますます広がっていくことを御祈念申し上げ、平成27年度COC事業実績報告書発行に当たっての御挨拶とさせていただきます。

1　十文字学園女子大学　地（知）の拠点整備事業の概要

本学は、平成26年度に「新座市をキャンパスに！＋（プラス）となる人づくり、街づくり」というテーマで、文部科学省の地（知）の拠点整備事業（COC事業）に採択されました。

本事業は、本学の立地する埼玉県新座市と全面的に連携協力し、新座市内を「＋（プラス）キャンパス」と位置づけ、下図のとおり、初年次から段階に応じて、学生、教職員ともに新座市と関わりながら教育と研究を往還させ、学生の社会人力の育成（pro-act型の学生育成）と、活力ある地域社会づくりに貢献するものです。

本学が目指す学生の育成方針を提示し、教育体制の改革と並行しながら、全学的な体制整備と実学に重きを置いた教育カリキュラムの再構築を進めています。併せて、地域の声、ニーズ、課題を的確に把握し、調査、研究へと還元させながら、本事業で得られた成果や教訓を人口減少、少子高齢化、財政難といった共通の課題を持つ近隣自治体にも応用していくことで、本学の地域志向をさらに一層深化、発展させていきます。

◆目指す人材育成

十文字学園女子大学 学生育成方針 －J モデル・プラス－
「〝地的好奇心〟に満ちた、活力・実践力のある pro-act 型の学生」を育てます

地域課題解決を担う学生を育成するため、地域志向科目の拡充など、地域社会への関心と理解を深める取組みを全学的に実施します。具体的には、「地域を学ぶ」「地域で学ぶ」「地域に活かす」の領域で教育課程を構築し、さらに地域貢献活動の一層の強化に取り組み、「学びのPDCA」による自立型学習の確立を目指します。

地域を学ぶ

地域の自然環境や産業、子育てや市民活動等の特徴や課題を理解し、課題解決を通して、社会人としての基礎力を養成します。

〔カリキュラム例〕
- 入門ゼミナール
- 総合科目
- 埼玉の地理・歴史・文化
- 現代社会と教育
- キャリアサポート
- 現代社会と福祉
- 現代社会とグローバリゼーション
- くらしの中の日本国憲法
- 情報とネットワーク社会
- 社会人入門

地域で学ぶ

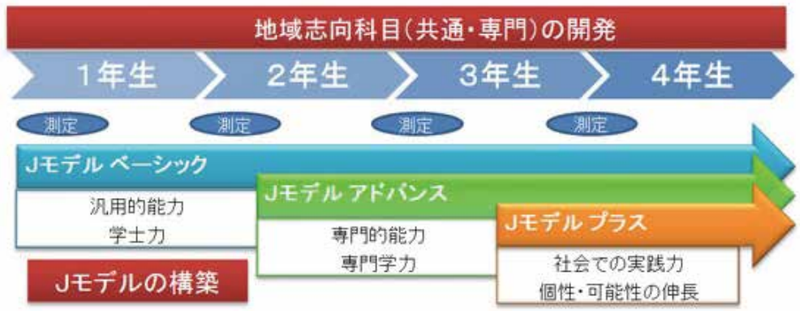
地域とのふれ合いや地域活動の経験を通して、コミュニケーション能力にすぐれた学生を育てます。

〔カリキュラム例〕
- 地域で学ぶ
- インターンシップ
- 自主社会活動
- キャリア基礎力入門
- キャリア基礎力応用
- 各種実習科目

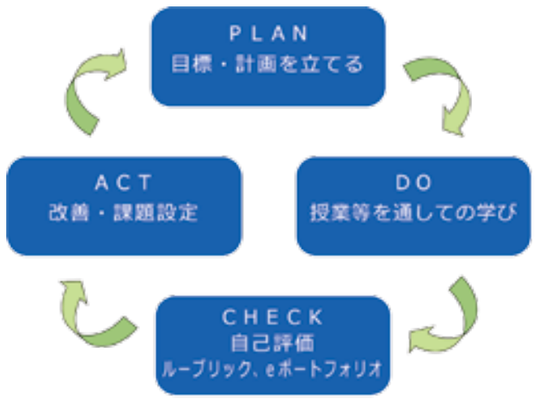
地域に活かす

自らの「可能性＝伸びしろ」に気づき、積極的に地域課題の解決や地域貢献へ取り組む意欲を育てます。

〔カリキュラム例〕
- ゼミ・サークル・ボランティアを通じた取り組み



◆主体的な学びの実現（学びのPDCAサイクルの確立）



＊ ルーブリック（学修の評価指標）…身につけるべき知識や技能に関して、数段階の到達レベルを設定し、達成度を判断する基準を示す。
＊ eポートフォリオ（学修成果の記録：見える化）…学習成果をWeb上に保存しまとめたもので、テスト結果やレポートのみならず、課外活動の記録も含まれる。丁寧に記録し、自らの学びを振り返るツールとする。

「学びのナビゲーター」を作成し学生に配布

◆新座市での成果等を近隣市に展開

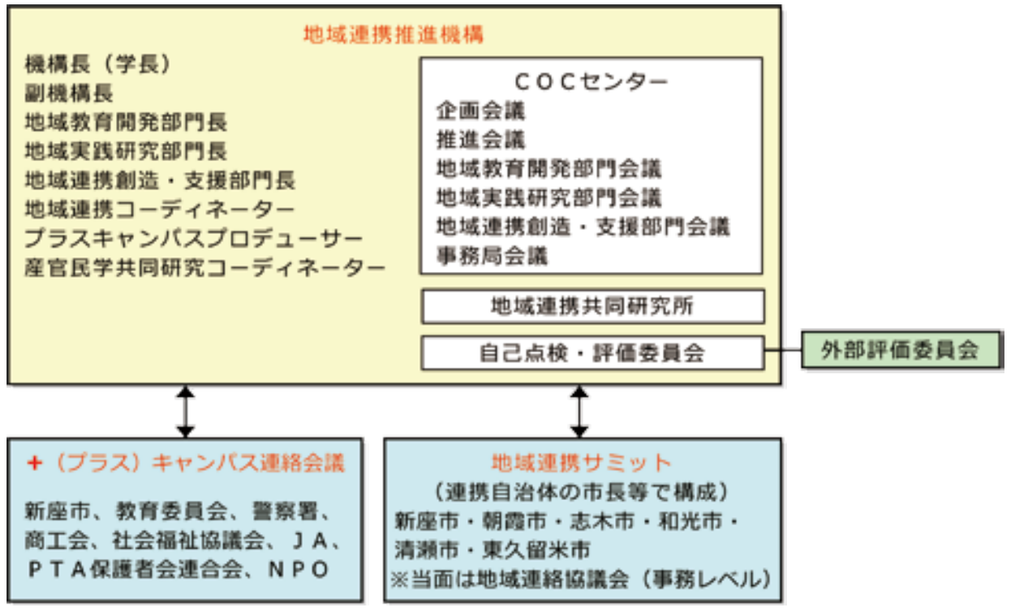
COC事業は、主に新座市で事業を展開し、その成果を共通した課題を持つ近隣市（朝霞市、志木市、和光市、清瀬市、東久留米市）に応用していくことで、本学の地域志向を更に深化させていきます。

◆十文字学園女子大学 COC事業のイメージ

2 推進体制

現有の教育研究組織や大学開放・地域連携推進センター、学科、個々の教員が取り組んできた地域貢献の実績を集約し、学長のリーダーシップに基づいた全学的な取組として再構築するために、平成26年1月に地域連携推進機構を設置しました。機構は学長をトップとし、地域連携活動の実績を有する教員、事務職員並びに専従職員とした地域連携コーディネーター等から構成しています。

（地域連携推進機構の組織）



地域連携共同研究所	研究分野、組織を超えた連携により、本学及び地域社会の発展に貢献する地域志向研究を深化させる新たな研究組織（所長:学長、平成27年4月1日付で設置）
＋（プラス） キャンパス連絡会議	本事業は新座市を「キャンパス」（通称:＋（プラス）キャンパス）に見立て、教育・研究・社会貢献活動を展開していくが、地域の声やニーズを的確に把握するために設置（市・教育委員会・警察署・商工会・JA・社会福祉協議会・PTA保護者会連合会・NPO代表で構成）
地域連携サミット（地域連絡協議会）	本事業の発展形態は、新座市での成果を近隣地域に応用していくことを考えているため、連携協力に関する包括協定を締結している5市（新座、朝霞、志木、和光、清瀬）及び東久留米市の市長、6市の教育長で構成する「地域連携サミット」を設置し、各市の現状、課題、本学への要望等について定期的に意見交換を行う。当面は、事務レベルの職員で構成する地域連絡協議会がその役割を担う。
地域連携 コーディネーター	地域からの要望（ニーズ）と本学の資源（シーズ）のマッチング活動を行う。
プラスキャンパス プロデューサー	＋（プラス）キャンパスで行う学外での教育研究活動や地域貢献事業等の企画・実施の役割を担うとともに、学内外の調整役も果たす。

3 平成27年度事業報告

（1）活動記録

① 会議等

会議等	概　要
地域連携共同研究所の設置 4月1日	○研究分野、組織を超えた連携により、本学及び地域社会の発展に貢献する地域志向研究を深化させる新たな研究組織として設置 ・所長:学長、副所長:幼児教育学科山田陽子教授
FD・SD研修会 5月21日（木）16:00～17:30 本学431教室 出席者:教職員180名 （新座市職員含む）	○COC事業FD・SD研修会 ・演題:地域と大学のパートナーシップを考える ・講師:松本大学　住吉 廣行 学長 ・講演概要:松本大学の地域連携教育の起源、“B”ポリシーと地域づくり考房『ゆめ』、松本大学のCOC
外部評価委員会 6月10日（水）15:00～17:00 本学7号館6階会議室 出席者:本学50名	○平成26年度COC事業の自己点検・評価について、外部評価委員会委員による評価を実施
平成26年度地域志向 教育研究費採択課題成果報告会 7月29日（水）13:00～15:00 学生ホール	○平成26年度地域志向教育研究費に採択されたCOC課題の取組成果の報告会をポスターセッション形式で実施 ・掲示したポスターや資料の前で、担当の教員や学生が参加者に説明、質問に受け答え
第1回地域連絡協議会・ ＋（プラス）キャンパス連絡会議合同会議 7月29日（水）14:30～16:00 本学7号館6階会議室 出席者:関係機関17名、本学15名	○COC事業の概要と取組状況の報告 ○活動事例報告（野火止用水保全推進プロジェクト、冒険遊び場ソトプレ、地域志向科目と学生の地域活動） ○意見交換 ※本学出席者:地域連携推進機構構成員、増田副学長
第2回＋（プラス）キャンパス連絡会議 9月30日（水）13:30～15:30 本学7号館6階会議室 出席者:関係機関等9名、本学16名	○学生のボランティア活動に対する支援について ・基調提起「学ぶ力と働く力を高めるボランティア体験の意義」 （本学 人間福祉学科佐藤陽教授） ・意見交換 ※本学出席者:地域連携推進機構構成員、志村副学長、学生支援部長

会議等	概　要
第2回地域連絡協議会 （新座市との意見交換会） 10月29日（木） 13:30～15:30 本学7号館6階会議室 出席者:新座市9名 本学17名	○COC事業に係る情報交換 ・本学における取組状況（COC事業見える化、学生の地域連携活動の事例） ・COC事業マッチングファンド ・新座市における取り組み（本学との新たな連携事業） ・全体協議 （新座市） 新座市長、教育長、企画財政部長、健康増進部長、教育総務部長、学校教育部長、企画課職員3名 （本　学） 地域連携推進機構構成員、増田副学長、志村副学長、岡本法人本部長特別補佐
第3回＋（プラス）キャンパス連絡会議 1月14日（木） 15:00～17:00 本学7号館6階会議室 出席者:関係機関12名 本学19名	○超高齢社会に向けた健康長寿のまちづくりについて ・基調提起「新座市の健康づくり」 （新座市健康増進部保健センター所長、長寿支援課長） ・意見交換 ※本学出席者:地域連携推進機構構成員、志村副学長、増田副学長、地域連携共同研究所（野島、長澤、飯田）
COC事業シンポジウム 2月27日（土） 13:30～16:00 ふるさと新座館ホール 参加者:172名	○テーマ:超高齢社会に向けた健康長寿のまちづくり ○基調講演 「健康長寿社会を実現するSmart Wellness City」 筑波大学大学院人間総合科学研究科教授 久野譜也氏 ○エクササイズタイム 「ダンスムーブメント」 飯田路佳健康栄養学科教授 ○パネルディスカッション ・パネリスト:須田健治新座市長、久野譜也筑波大学大学院教授、伊藤延世前新座市教育委員会委員長、長澤伸江食物栄養学科教授 ・コーディネーター:星野敦子地域連携推進機構 副機構長

②　地域貢献活動の事例

1）　研究による地域貢献活動

主な事業	概　要
ふるさとの緑と野火止用水を育む会 （HUGネット） 【地域志向教育研究費】	○新座市の歴史的文化資産である野火止用水の維持・保全、雑木林の保全 ・市関係課やボランティア団体が各々独自に活動 ⇒HUGネット（市内の12のボランティア活動団体＋新座市関係6課＋本学）の立ち上げ（H27.3発足）→大学がプラットフォームの役割 ・課題の共有と大学の知見を加えた協働による保全活動（研修事業、木のネームプレート・リーフレットの作成等） ・H27.11.4野火止用水沿いの樹木へのネームプレートの取り付け（野火止小学校の児童と本学児童教育学科の学生も参加）
プレプラ@十文字の森 【地域志向教育研究費】	○子どもの外遊びを促し、自主性や判断力、コミュニケーション能力などを育む効果が認められる冒険遊び場（市の児童センターでソトプレプロジェクトとして展開中）の普及拡大が課題 ⇒本学内フィールドアスレチック跡地を活用して、冒険遊び場事業を展開 ・プレイワーカーの研修を経てプレプラを実施（12月に4回）、フォーラムの開催等
ふるさとにいざ✤オータムコンサート 【地域志向教育研究費】	○スタインウェイピアノによる「ふるさと新座館」ホール活性化事業 ⇒大学発のイベント ・市教育委員会との共催でH27.10.3にピアノ・バイオリンコンサートを開催（来場者166名） ・企画段階から8名の学生が参加（手話ソングに出演、リーフレット作成）

主な事業	概　要
新座市女性職員と女子学生の Win－Winキャリア支援 【地域志向教育研究費】	○新座市職員の約54%を占める女性職員の登用促進が課題 ⇒女性職員の人材育成や意識改革等、女性職員の活躍推進に向けた取組の一環として、学生と女性職員のキャリアアップ支援事業を新座市と連携して実施 ・H27.7.29本学キャリアサポート授業の「キャリアしゃべり場」に3名（課長、係長、主事）の女性職員が参加し、キャリア履歴（民間から入庁等）を発表 ・H27.11.9、11.17本学で女性職員のキャリアアップ研修（イノベーション・ファシリテーター〈本学文芸文化学科松永教授〉によるワークショップ形式）を実施（新座市女性職員39名が参加） ・H28.2.8働く女性のキャリアアップを考えるワークセッション（前記研修等に参加した4名の女性職員をパネリストとして、有識者2名をコメンテーターとして迎えた「フィッシュ・ボール」形式のワークセッション）を実施（学生12名が参加）
新座市「フシギマップ」 プロジェクト 【地域志向教育研究費】 	○人間発達心理学科東畑ゼミ（3年、8名）による「～女子大生と行く～新座ふしぎマップ」の制作、魅力発信の一助として新座市への寄贈 ・新座市内に古くから伝わる民話や伝説に登場する13か所の神様や妖怪などを訪ね歩いて紹介文を作成し、メディアコミュニケーション学科の学生が「女子大生らしい華やかなイメージ」をデザイン ・市内の公共施設（観光プラザ、公民館等）、小中学校に配布 ・報道各社が取材（テレビ埼玉ニュース放映、朝日新聞・東京新聞・埼玉新聞掲載）→市内外から反響多数

主な事業	概　要
埼玉クイズ王予選会場を 誘致し地域を大いに学ぶ 【地域志向教育研究費】	○「第4回埼玉クイズ王決定戦」予選会場の誘致・開催 （H27.12.20本学記念ホール） ・200人を超える参加者と応援の合わせて300人が来場 ・クイズを通して埼玉の魅力を知り、郷土埼玉への愛着度と関心を高めることを目的として埼玉クイズ王決定戦実行委員会が主催 ・予選会場の誘致・開催活動を通して、新座市をはじめとした地域との結びつきを強め、学生がクイズに参加することで、郷土・地域への関心を深める。 ・本学からは教職員や学生による12チーム（3人1組）が参加 ・ライターデザイン同好会（指導:石野榮一教授）の学生11人が「過去問解説」を制作
さくらまつり 黒目川ウォーキング	○商店会の活性化と新座市東部地域の観光資源の開発を目的に、栄四丁目商店会と連携して実施 ⇒大学発のイベント ・埼玉県の「黒目川まるごと再生プロジェクト」による黒目川沿い遊歩道整備事業の完成イベントも兼ねて実施 ・スタート（朝霞台駅北口）→4つのチェックポイント（ひざおり水車広場、畑中黒目川公園、妙音沢のハタザクラ、栄集会所）→ゴール（栄四丁目商店会主催の「さくらまつり」会場） ・協力団体:埼玉県朝霞土整備事務所、朝霞市、新座市、埼玉南部漁業協同組合朝霞支部、黒目川に親しむ会、ミョウオンサワハタザクラを守る会、新座葉っぱの杜美術館、畑中ホタル愛好会 ・参加者:120名 ※ボランティアサークル“ゾウキリンくらぶ”、“プラスちゃんくらぶ”の学生がスタッフとして参加

主な事業	概　要
健康長寿のまちづくり事業 【地域連携共同研究所】	○超高齢社会の到来 ・2025年に団塊の世代が75歳以上の後期高齢者となり（2025年問題）、人口の約2割に達するような超高齢社会の到来 ・国民医療費の増大（2013年度40兆円超→2025年度推計54兆円）　⇒ 医療費の伸びの抑制が重要課題 ○超高齢社会に対応した健康長寿のまちづくりに貢献するため、大学の専門的知見を活かして、市民の健康の維持増進に向けた身体運動や食育などの取組を市と連携して実施（研究分野・組織を超えた連携による研究プロジェクト） ○平成27年度採択研究 ①食育で育む管理栄養士の専門性 ②新座市内介護・福祉・医療の資質向上と連携強化への取り組み ③十文字学園女子大学シニア健康教室

◆食育で育む管理栄養士の専門性

○H27.10.18「新座市健康まつり」（新座市保健センターで開催）に食物栄養学科3年20名がボランティア参加

・会場の設営等の補助
・骨密度測定コーナーの開設:160人の市民の骨密度を測定し、学生が測定の結果とリーフレットを使って骨強度を保つための食事や運動について説明
・食育推進ポスターの制作・展示（新座市からの依頼）:地産地消による食育、便秘の2つのテーマでポスターを制作

○H27.11.14「親子DEミニウォーキング&スタンプラリー」イベント（新座市保健センター主催）に健康栄養学科1年10人がボランティア参加

・学生が参加賞の新座オリジナルゾウキリンキーストラップを手作り、スタンプラリーのクイズを担当し、大活躍

○「和食文化と日本の心を知ろう!プロの調理人によるセミナーと調理実習」に食物栄養学科の4年生がアシスタントに入り、セミナーおよび調理実習を体験
・平成27年度農林水産省「消費者ニーズ対応型食育活動モデル事業」の一環として、一般社団法人「すこやか食育エコワーク」の主催（本学共催）により本学調理室で開催（H27.9.5、11.8、12.12）

主な事業	概　要
健康長寿のまちづくり事業 【地域連携共同研究所】	**◆十文字学園女子大学シニア健康教室** ○地域のシニア層の食と運動への意識を高め、健康長寿のまちづくりに資するため、本学記念ホールで開催（4回:H27.11.23、12.14、1.18、2.8） ・健康栄養学科では栄養士の資格をもとに、健康・運動・教育のそれぞれの分野で活躍できる人材育成に取り組んでいるが、この特性を活かし、学生が学びの実践の場として、補助スタッフとして活躍 ・体脂肪率測定などの健康チェックの後、食・運動への理解を深めて健康への意識を高めるためのミニ講義、チェアエクササイズ・ダンスムーブメントの指導

2）　学生による地域貢献活動

主な事業	概　要
プラスちゃんを活用した 地域イベントの活性化	○本学マスコットキャラクターのプラスちゃんが各種イベントに参加 ・H27.7.18大江戸新座祭り ・10.11新座市民まつり産業フェスティバル ・11.1志木駅南口すきっぷたうん商店会青年部「チャリティー屋台村」 ・12.20野火止用水ご当地グルメ・ゆるキャラ®フェスティバル ・H28.2.6ふるさと新座商店会「チャリティーもちつき大会」 ・3.26栄四丁目商店会「さくらまつり」 ※「プラスちゃんくらぶ」の教員、学生がアテンドとして参加
学生ボランティア団体による 地域イベントの活性化	○さつまいもプロジェクト:チャリティ出店（サツマイモを使った手作りお菓子の販売・収益を東日本大震災義援金に寄付） ・10.10～11新座市民まつり産業フェスティバル、11.1志木駅南口すきっぷたうん商店会青年部「チャリティー屋台村」、11.8新座市民まつり収穫祭、11.22・29新座市オープンカフェ、12.20野火止用水ご当地グルメ・ゆるキャラ®フェスティバル ○ゾウキリンくらぶ:イベントへの参加、ネパール地震被災地募金 ・H27.6.27西分夏まつり・ホタル観賞会・灯明まつり、6.28野火止用水ホタルの夕べ、10.10～11新座市民まつり産業フェスティバル（商工会青年部✤十文字コラボ“新座クイズ王決定戦”）、H28.2.6ふるさと新座商店会「チャリティーもちつき大会」

主な事業	概　要
授業（地域志向科目）を通じた 地域イベントの活性化	○授業「入門ゼミナール」を通じて延28名、授業「埼玉の地理・歴史・文化」を通じて24名の学生が町内会・市イベントに参加 ・H27.6.27西分夏まつり・ホタル観賞会・灯明まつり（西分町内会） ・6.28野火止用水ホタルの夕べ（新座市主催）
学生の自主社会活動を通じた 地域イベントの活性化	○健康栄養学科のダンスパフォーマンスチーム（自主社会活動） ・H27.10.4新座市民体育祭（学生17名） ・10.11新座市民まつり産業フェスティバル（学生15名） ・11.1志木駅南口すきっぷたうん商店会青年部「チャリティ屋台村」（学生5名）
学生の自主社会活動による 地域貢献	○新座市子どもの放課後居場所づくり事業（ココフレンド）、中学校部活動・小学校クラブ活動のスタッフ不足が課題 ⇒ココフレンドのスタッフ補助 ・H27.7.28～夏季休暇期間:東北小6名、東野小7名、新堀小1名、野寺小1名の計15名の学生が参加 ・後期授業期間:東北小4～5名、東野小2～4名 ⇒中学校の部活動支援 ・H27.7.30～夏季休暇期間／第二中学校の女子バスケットボール部5名、女子バレーボール部4名の計9名の学生が参加
第9回大学人サミット“信州まつもとカレッジ2015”の「大学自慢コンテスト」に参加	○H27.11.8大学人サミット（国公私立の枠を越えて個性あふれる大学づくりを語り合う参加型シンポジウム）の大学自慢コンテスト（自由なテーマや方法で自分の大学を“自慢”するイベント）に本学が初参加（9大学がエントリー） ・学生と教員が「プラスとなる人づくり街づくり」のテーマで、学生とプラスちゃんによる地域活性化や学生育成の取組を紹介（学生がプレゼンテーション資料を作成、発表） ・コメンテーター評「地域イベントへの学生の参加は、大学と地域を結び付ける大きな要素となる。プラスちゃんを活用した取り組みの紹介は非常によかった。」 私の大学 自慢はここ 2015.11.10 信濃毎日新聞

③　地域志向教育

「地域を学ぶ」「地域で学ぶ」「地域に活かす」の領域で教育課程を構築し、さらに地域貢献活動の一層の強化に取り組み、「学びのPDCA」による自立型学習の確立を目指します。

1）地域を学ぶ

○授業科目「埼玉の地理・歴史・文化」
　地域の方々に講師を依頼し、授業で埼玉についての学びを深める。
　（平成27年度招聘実績）

地域志向科目	月　日	講　師
埼玉の地理・歴史・文化	4/27、5/11	チーム・キャロット 高畑 正 氏
	6/8	武州里神楽保存会 石山 大隅 氏
	6/15	いいことクリエイション 一ノ瀬 要 氏
	6/22	雑木の会 谷合 宜明 氏
	7/13	川爺 佐藤 弘信 氏
	10/1	雑木の会 谷合 宜明 氏
	10/8	オギハラ酒店 荻原 耕之進 氏
	10/19	プレイワーカー 関戸 博樹 氏
	11/2	環境保全協力員の会エコライフ部会 道具 まゆみ 氏
	11/16	いいことクリエイション 一ノ瀬 要 氏
	11/30	NPO法人成果物健康推進協会 近藤 卓 氏
	12/14	武州里神楽保存会 石山 大隅 氏
	12/21	有限会社アムアーツ 奥山 緑 氏
地域で学ぶ	10/22	地域と笑顔の親の会・絆 小宮 光絵 氏
	11/5	新座栄四丁目商店会 甲田 成広 氏
	12/17	朝霞丸沼芸術の森 須崎 勝茂 氏

○授業科目「入門ゼミナール」
　地域学習テキスト「いいね！にいざ」を作成し、平成27年度の授業から活用

地域学習テキスト

2）地域で学ぶ

○各種イベントへの参加
　・西分町内会夏祭り、野火止用水ホタルの夕べ
　　延28名が授業「入門ゼミナール」を通じて参加
　・野火止用水灯明まつり　24名が授業「埼玉の地理・歴史・文化」を通じて参加
　・里神楽をたのしむ会　2名が授業「埼玉の地理・歴史・文化」を通じて参加
○地域のボランティア活動への参加
　・森の子くらぶ（新座っ子ぱわーあっぷくらぶ:市立新開小学校）2名が授業「埼玉の地理・歴史・文化」を通じて参加
○地域貢献活動の研修会・勉強会への参加
　・HUGネット勉強会、研修会
　・プレプラ研修
○自主社会活動
　・新座市放課後居場所づくり事業（ココフレンド）のスタッフ補助
　・中学校の部活動支援
　・ダンスパフォーマンスで市・地域のイベントに参加

3）地域に活かす

○学生ボランティアサークル等の各種イベントへの参加
- ・プラスちゃんくらぶ
- ・ゾウキリンくらぶ
- ・さつまいもプロジェクト

○プレプラ@十文字の森の実践活動
○HUGネットによる木のネームプレートの樹木の取り付けに参加
○ボランティア活動
- ・野火止用水クリーンキャンペーン
- ・ひまわりプロジェクト
  （新座市総合運動公園内のひまわりの種を収穫し、食用油を製造している福島県のNPO団体に送る活動）
- ・新座警察署による「110番の日」キャンペーン　等

◇自主社会活動

様々なボランティア等の活動を単位化し、学生の積極的な社会参加を促し、経験を通した自己成長の機会を提供している。この授業は35時間以上のボランティア活動に加え、レポート提出と発表会参加を単位認定要件としている。

◇平成27年度前期 自主社会活動報告会（平成27年10月19日）

自主社会活動　頑張っています。　No.2
平成27年10月22日

（健康栄養学科 高橋京子 教授/発行より抜粋）

平成27年前期 自主社会活動の報告会

前期自主社会活動の報告会が開かれました。健康栄養学科からは6名が参加し、自主社会活動での学びを報告しました。この6名は、新座市が取り組んでいる子どもの放課後居場所づくり（ココフレンド）事業にボランティアとして参加しました。新座市では、放課後の小学校施設（教室、校庭、体育館など）を活用し、学習や遊び、体験・交流活動などの機会を提供し、子どもたちが安全・安心に集える居場所をつくろうとしています。夏季休暇中を中心に活動に参加し、体験したことを、報告しました。一夏の努力は、人を大きく成長させるものだと感心しました。このような機会を提供いただいたことを感謝せずにはいられませんでした。

（学生の感想）
- 子どもたちの行動には、必ず理由があり、その理由をしっかり聞いて指導に当たることが大事だと学んだ。（東野ココフレンド:笠原菜那さん）
- 人数の多さはたくさんの大変さにつながっていると感じた。それをコントロールする力をつけていきたい。（東野ココフレンド:渋谷優菜）
- 事前の準備の大切さを実感した。個性豊かな子どもたち、一人一人の気持ちを理解していける人になりたい。（新堀ココフレンド:高橋聖乃さん）
- 子どもたちから学ぶことがたくさんあった。平等に接することの難しさを感じた。力をつけていきたい。（東北ココフレンド:高橋ななみさん）
- 本当に子どもたちは元気だった。子どもたちの関係を広げる努力が大切だと感じ、頑張ってきた。（東野ココフレンド:本田晴香さん）
- 事前の確認が大切であることを学んだ。一人一人の話をしっかり聞いてあげることも大切だと分かった。（東野ココフレンド:松本悠さん）

▼「東北ココフレンドだより№25（平成27年9月3日）」より

夏休みココフレンド/今年のココフレンドは、28日開室しました。十文字学園女子大学からボランティアのお手伝いもあったり、ラケットテニスを入れたり、少し様変わりがありました。〈ボランティアとして参加して:十文字学園女子大学1年　女性〉たくさんの子ども達と一緒に過ごし、とても充実した毎日でした。先生方や子ども達に教えていただいたことを将来に生かしていきたいと思います。短い間でしたが、本当にありがとうございました。

（2）　情報発信（COC見える化）

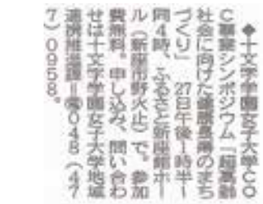
①　ホームページ

②　COCニュースレター

③　COCセンター掲示板

学生の地域貢献活動等を紹介するCOCセンターニュースや地域のイベント情報を掲示

④　プレスリリース



◆十文字学園女子大学COC事業シンポジウム―超高齢社会に向けた健康長寿のまちづくり」　27日午後1時半―同4時、ふるさと新座館ホール（新座市野火止）で。参加費無料。申し込み、問い合わせは十文字学園女子大学地域連携推進課＝☎048（477）0958。

2016.2.8 東京新聞

◆十文字学園女子大　シンポジウム
――超高齢社会に向けた
健康長寿のまちづくり

27日(日)、午後1時半～4時、ふるさと新座館(新座駅)。筑波大大学院の久野譜也教授が「健康長寿社会を実現するSmart Wellness City」と題し話す。エクササイズやパネルディスカッションも。無料。要予約。☎十文字学園女子大地域連携推進課（048・477・0958）。

2016.2.23 朝日新聞

(3)　COC事業シンポジウム

日時	平成28年2月27日(土)13:30～16:00
場所	ふるさと新座館ホール
テーマ	超高齢社会に向けた健康長寿のまちづくり
概要	1　開会 2　基調講演 「健康長寿社会を実現するSmart Wellness City」 筑波大学大学院人間総合科学研究科教授 久野 譜也氏 3　エクササイズタイム 「ダンスムーブメント」　飯田路佳健康栄養学科教授 4　パネルディスカッション 「超高齢社会に向けた健康長寿のまちづくりについて」 ・パネリスト　久野 譜也 氏(再掲) 須田 健治 氏(新座市長) 伊藤 延世 氏(前新座市教育委員会委員長) 長澤 伸江(本学 食物栄養学科教授) ・コーディネーター　星野 敦子(本学 地域連携推進機構 副機構長) 5　閉会
参加人数	172名

〔要　約〕

●開会挨拶

十文字学園女子大学学長（地域連携推進機構長）
横須賀　薫

本学は、文部科学省のCOC事業に平成26年度に採択され、本年度が2年目です。この補助事業は、大学のキャンパスだけではなく、新座市や周辺市をキャンパスに、「＋（プラス）となる、人づくり、街づくり」というテーマで展開しています。

2年目の活動は、地域の皆さんの指導をいただき、学生が大変元気に活躍してくれましたが、これは私どもとしては予想を超えるものがあり、大変うれしく思っているところです。

今回は2年目の総括という形で、「超高齢社会に向けた健康長寿のまちづくり」という課題でシンポジウムを開催させていただきます。

最近の国勢調査の発表を見ますと、日本の人口が100万人くらい減っていて、日本の歴史の中で人口が減ったというのは初めてのことで、これは大変なことだと思います。しかし高齢者が生き残って、若い人が増えないで減るというのは、これは頭が痛い。単純に人口が急速に増えないでいることがいいとは言い切れないのだなと思って心配もしたりしています。と同時に、自分自身、高齢社会の一員で、なかなか体を動かすこともやらないでいる人間としては、今日の課題は切実であるとともに、大変苦痛な課題だと感じたりしているところです。

今回、久野譜也先生をお招きしての基調講演、また、パネルディスカッションでは須田新座市長、伊藤先生、久野先生、長澤先生に、そういったまちづくりの課題を議論いただくということで大変楽しみにしているところであります。

開催に当たりまして、新座市、朝霞市、和光市、志木市、東京都清瀬市、東久留米市の皆さんにご協力をいただき、どうもありがとうございます。

●基調講演

「健康長寿社会を実現するSmart Wellness City」
筑波大学大学院人間総合科学研究科教授
久野 譜也氏

「Smart Wellness City」は私がつくった言葉で、「Smart」は英語本来の意味は賢いという意味です。つまり、自然と健康になれるまちをつくるという発想を6、7年ぐらい前から持っていて、そのためには何が必要なのか。そういう面では、新座市に住むと自然と健康になれる“まち”なのか、それとも自然と生活習慣病になってしまう“まち”なのか、そういうことを含めて今日はお話しできればと思います。

「Smart Wellness City」、このまちに住むと自然と元気になる。その基本は、「歩いて暮らせるまちづくり」という発想です。WHO（世界保健機構）が初めて「早く死ねるベスト20」を発表しました。第1位が、高血圧、第2位がたばこ、第3位が脂質異常症、血糖です。糖尿病もここに入ります。何と第4位に運動不足が入り、第5位が肥満です。そうすると、運動不足の解消は、たばこ以外に全て効くということがわかっています。肥満の解消は食事と合わせ技でなければ効果が出ませんので、もちろん食事は大事です。加えて、地域で一番つらいのは認知症の問題で、ここをどう改善するのか、実は運動不足の人は認知症になりやすいということまで最近わかってきました。

我々が「Smart Wellness City」で、基本的に「歩いて暮らすまち」といっているのは、エビデンスから見て、歩くことが運動不足の解消に非常に意味があるだろう。別にジョギングでもテニスでもいいのですが、基本は歩くことだろうと考えています。もう

一つ、ラッキーなエビデンスがあります。歩く効果というのは、毎日続けて30分歩く分と、もう一つは朝、昼、晩と1日3回、10分ずつに分けて歩く。トータルは30分です。続けて30分、分けて10分ずつ30分、3カ月やった結果、効果は同じだったということです。つまり歩くということは、足し算であると、小まめにやればいいということです。

実は、「Smart Wellness City」のもう一つの考え方は、例えば公共交通政策でさえ健康づくり政策になるということなのです。今、どこの家庭も普通に車で移動して郊外のショッピングセンターに買いに行けるという“まち”を、特に地方ほど、つくってしまいました。日本の場合、そこが大きな課題になってくるわけです。

駅前の商店街がシャッター街になっている“まち”が日本中にいっぱいあるわけです。こういう中心市街地の再活性というのは、地域経済の面からこれまで取り組んできましたが、健康な人を増やすためにも、実は町中が元気でないとだめということが科学的に言えるわけです。そういう面で、単に運動や食事をどうやってやるかも非常に大事なのですが、そこだけでは健康は守れないのです。自分の“まち”をどうしていくのか、どういうまちにすれば健康になれるかという観点も、これから高齢化が非常に進む我が国のまちづくりで大切です。

そんな自然と健康になれる“まち”の海外の事例として、ドイツのフライブルク市をいつも紹介しています。フライブルク市は、中心市街地に車を入れない政策を45年前にやっていて、これは健康のためでなく、環境対策なのです。この結果、最近出てきたデータで、フライブルク市がドイツの中で医療費が2番目に低いレベルであるとの間接証拠も出ています。これを英語でウォーカブルシティと言います。今、世界のトレンドとしては、高齢化をしている先進国で基本的にウォーカブルシティが、一つのこれからの方向性、都市の価値として高いというのが世界的に一般的になりつつあり、いかにこれから公共交通を用意していくのかが、高齢化社会の中で大事なポイントだと思います。

最後に、健康長寿社会の中で重要なキーワードをお話します。本日、市民の皆さんも多くいらっしゃるので、3つ必要だということを覚えて帰ってください。1つ目は、お話ししてきた運動、2番目は、食事です。そして3番目が、社会的役割を持ち続けるということです。これが、実は健康長寿の秘訣の一つです。ソーシャルキャピタルという言葉をご存じの方が多いと思いますが、コミュニティ、人とつながり力も健康度に影響することが、この10年ではっきりとわかりました。では、これをどうしたら伸ばせるか、今、多くの社会学者がジェイコブというアメリカの新聞記者が書いたエッセイの中にその秘訣があると認識しています。それは、ソーシャルキャピタルを上げていくということは、町中で知っている人との偶然の出会いがいかに多発するかということです。知っている人に偶然会った時に挨拶をする。あるいは、ちょっと立ちどまって話し込む。そういうものの積み重ねが、ソーシャルキャピタルを高めていくということを彼女は書いています。そう考えていくと、やっぱり車は非常に便利で、ドア・ツー・ドアで行けますが、残念ながら行った先でしか偶然の出会いがありません。出会いが町中で多発する、そういう“まち”が多分これからの健康長寿を可能とする「自然と健康になるまち」の一つの姿なのだろうと思います。

「Smart Wellness City」では、我々は健康の「康」に「幸せ」という言葉を使っています。健やかな幸せで「健幸（けんこう）」と読んでいますが、このためには、市民の皆さんに受け身ではなくて、皆さんが自ら健幸になれる“まち”は、どういう姿かを考えていただきたいです。余りにも便利さだけを求め過ぎたこの社会が、一方で生活習慣病、寝たきり期間を長くしているという問題があるので、皆さんがまず理解をしていただくことです。そして、これからどういう社会が起こるのか、その中でどういうまちづくりを選択していくのか、ぜひ興味を持っていただければと思います。

●エクササイズタイム

「ダンスブームメント」本学健康栄養学科 教授

飯田 路佳

●パネルディスカッション

・テーマ	超高齢社会に向けた健康長寿のまちづくりについて
・パネリスト	久野 譜也 氏（再掲）
	須田 健治 氏（新座市長）
	伊藤 延世 氏（前新座市教育委員会委員長）
	長澤 伸江（本学 食物栄養学科教授）
・コーディネーター	星野 敦子（本学 地域連携推進機構 副機構長）

▶パネリストによる報告・説明

◎星野コーディネーター

今日は、久野先生をお迎えして健康長寿のまちづくりに非常にいろいろとためになる、また、新しい発見のあるお話をいただけたと思います。新座市は、皆さんよく歩いているのではないかなと思っていましたが、よく考えてみたら、何かいつも歩いている人は似たような人ばかりです。もっとたくさんの人に歩いてもらうようにしなければいけないのかなと思いました。パネルディスカッションのパネリストとして、久野先生、須田市長、前新座市教育委員会委員長の伊藤延世先生、食育関係で地域に密着した活動を継続されている長澤伸江教授に参加いただきます。それでは最初に須田市長にお伺いしたいと思います。

○須田氏

今日は市の健康長寿へ向けたまちづくりについてお話をさせていただきます。

平成15年、小泉政権のときに、観光立国日本を目指して「ビジット・ジャパン構想」がだされ、新座市も観光都市づくりに取り組もう。ただ、観光といってもテーマパークをつくるとかではなく、野火止用水や平林寺、さらには農家600軒、武蔵野の雑木林や畑などまだ色濃く残っていますので、これを活用したウォーキングを中心とするまちづくりをやっていこうと考え、「住んでよし、訪れてよし」のまちづくりを国に提案して、「ビジット・ジャパン構想」の認定を受け、平成16年、17年に、ビジョン、アクションプランをつくり、平成18年を観光都市づくり元年と位置付け、「観光都市にいざづくりアクションプラン」を進めてきて、この3月でちょうど10年経過したところです。

新座市の人口も、このまま推移すると、少子化でどんどん減少し、このままいけば高齢者の人口割合はどんどん増えていくことになります。市長になった平成4年の頃は高齢化率が7%位でしたが、現在は25%近くになってきています。4人に1人は65歳以上、あと10年たつと、おそらく4人に1人は75歳以上と、高齢化がどんどん進んでいくということです。

そんな中で、新座市では、国からの指示で、この3月までに、一億総活躍社会の実現に向けた地方創生の総合戦略の策定を進め、今、その案がまとまりました。それは、今から45年先の2060年を想定して、人口を増やす手だてを考えたまちづくり、地方創生の柱として、土地区画整理事業の推進や地下鉄の延伸に取り組み、良好な街並みをつくり、多くの方々に住んでいただける選ばれる都市をつくっていくという内容となっています。ただ人口を増やすだけではだめで、新座の特性である、武蔵野の雑木林がたくさんある豊かな緑を何とか残しながら、豊かなふるさとづくりを進めるということです。つまり、子育て支援、観光に力を入れながら、緑を残して、住みよい地域をつくっていき、もって、少子高齢化に歯止めをかけて、人口増を図っていくということで、今人口は16万4,000人ですが、2060年には18万4,000人位まで増やしていく計画になっています。

新座市には、県内には類を見ない640もの市民のボランティアサークルがあり、今まさにスローガンである「できる人が、できることを、できるときに、できる範囲で協力をするまちづくり」が進められています。町内会の加入率も近隣市は30%台が多い中で、70%です。新座市では、何かの縁あって新座に住んでいるのだから、「町内会に入りましょう運動」も徹底して進めており、この4月からは市職員が町内会に出向き、いろいろな連携を図ることも予定しています。

また、市では、ウォーキングロードの整備も行い、市内をたくさん歩いていただくまちづくりを進めています。と同時に、健康寿命を延ばすことも大事ですから、「元気アップ広場」を市立集会所などに43か所開設し、みんなで健康体操や市の保健師による血圧測定、骨密度測定など、いろんなことをやっています。

新座市は、ウォーキングを中心として、そして地域に集って、「集いの広場」、「元気アップ広場」等をどんどん開催し、ボランティア活動で市政の一翼を担っていただく、そういうまちづくりを進めているということです。

◎星野コーディネーター

それでは、引き続き市民の立場からということで伊藤延世先生から「市民による市民のための健康づくりの取り組み」についてお話をしていただきます。

○伊藤氏

私は、新座市の教育委員会にかかわる時期があり、特に、市民の立場から市民の健康づくり、それから生涯スポーツを中心に教育委員会の仕事も少しお手伝いをさせていただきました。市民の健康づくりにはどんなことが必要か、できるだけ誰でも参

加できるようなスポーツ、体づくりができ、そして誰でも参加できる場所をたくさん増やしていきたいなということをいつも感じていました。

そういう時に、市長から、「第2次いきいき新座21プラン」の中で、市民の健康体操をつくってほしいという話がありました。市民の健康体操ができ上がったのが平成21年です。「新座市民の歌」の中には、新座市の四季折々のことや、新座市の文化・歴史が歌い込まれていて、ちょうど体を動かすのに本当に楽なテンポで、とてもいい曲だなと感じました。体操は、体幹を動かすことを一番大事にして、体幹には、体を横に曲げる運動、ねじる運動、前後に曲げる運動の3つの運動があり、取り入れてでき上がったのが、この健康体操です。今、「元気アップ広場」や各小学校などでも広めていっていただいています。

健康長寿のまちの推進事業として、各地域の集会所を利用して「元気アップ」の広場を開設し、昨年と今年の2年間取り組んできました。1年目から反響が大きく、2年目には1年目の2倍の人たちが参加するようになりました。

このように市がつくってくれたチャンスをうまく利用して、自主的なサークルとして活動していけるグループが市内にたくさんあり、今後、増やしていく必要もあるのではないかなと思っています。ただ、参加する方たちの年齢が高くなっています。今日は、十文字学園女子大学と連携することも一つのテーマになっていますので、若い方たちの力をこれからどんどん利用しながら、もっと活発化して発展していってもらえればいいなと希望を持っているところです。

今、子供から高齢者まで全ての市民の健康づくりの事業を展開していきたいという市の計画を受け、実際に活動して感じることは、まだまだ事業のことを知らない方が多いので、もう少し市民に、活動内容や活動場所を周知してほしいなと感じています。

もう一つは、一番参加してほしい人である一人暮らしで、家で悶々として、なかなか外に出られない方をどうやったら参加させることができるかなと悩んでいるところです。

それから、もう私も70歳を過ぎました。70歳くらいの指導者の方もたくさんいらっしゃいますが、そういう中で、今、市が推進委員を育成するための教室が開催されいますので、そういうところへ若い方たちにもどんどん参加していただき、若い方たちの指導者が増えていってくれることが私の願いです。

最後は期待ですが、今後さらに各方面と横のつながりを持ちながら、地域社会と大学が課題を共有する中で、それぞれの大学のいいところと、それから私たちのずっと経験してきたことも出し合いながら、それを生かした事業を展開していってもらいたいなということが私の望みです。

◎星野コーディネーター

それでは、最後に、長澤先生のほうから食育の取り組みについてご発表いただきたいと思います。よろしくお願いします。

○長澤氏

今日は、私が新座の市民の方とかかわるきっかけになりました野火止公民館主催の「地域で進める介護予防講座」との出会い、平成27年度COC事業で「食育で育む管理栄養士の専門性」というプロジェクトを立ち上げ、保健センターと連携したこと、そして最後に、墨田区の食育がめざす人づくりまちづくりについて紹介します。

「地域で進める介護予防講座」は、介護予防につながる食、運動、コミュニケーションについてを楽しく学ぶことを基本に数回の講義と調理実習で構成されています。講義のテーマは、毎回市民から、自分たちが知りたい、学びたいという内容を提案いただいています。1年目の講義のテーマは「生活習慣病にならないために～健康は栄養バランスがとれた食事から～」、調理実習のテーマは「旬の野菜、新座の野菜を使ったバランスメニュー」でした。2年目の講義テーマは「食事を通してできる内部被ばく対策」、2011年3月11日の東日本大震災による福島の原発事故により、放射性物質を含む食品への不安が高まっていたため、タイムリーな講義となりました。調理実習のテーマは「健康で、安全な食生活を送るために～おいしく食べよう!料理いろいろアレンジ術～」です。3年目、講座の名前を「素敵なシルバーライフ術～元気で楽しい老後のために～」と変更しました。講義のテーマは、「冷えは万病のもと、冷えない体をつくるために」と、そのとき高齢者の身体測定をしている結果を踏まえて、「気をつけよう!骨粗しょう症とサルコペニア」の2本立てにしました。実習テーマは「冷えない身体づくりのための薬膳料理」です。

次に、平成27年度COC事業「食育で育む管理栄養士の専門性」というプロジェクトを立ち上げ、新座市保健センターと学生が連携した報告を行いました。テーマは、地産地消と絡めた新座市の特産品の紹介です。平成20年からは毎年、健康まつりで長澤ゼミが骨密度測定コーナーを担当しています。2時間で約180人の市民の骨密度を測定しましたが、市民は意欲的で、いつも熱心に学生の話を聞いてくださいます。今年はCOC事業ということで、20名のボランティア学生が健康まつりに参加しました。保健センター主催の「親子DEミニウォーキング&スタンプラリー」のイベントでは、健康栄養学科の1年生が、参加賞のゾウキリンキーストラップを手づくりし、また、スタンプラリーのクイズを担当したりと大活躍でした。

最後に、食育を通した人づくり、まちづくりについて紹介します。食育基本法が制定されて10年の節目の年に、内閣府の指名を受けて、墨田区で第10回食育推進全国大会が開催されました。墨田区の食育活動は、内閣府から他の自治体の模範となる素晴らしい取り組みと高く評価を受け、食育白書や食育推進の実践事例報告書等で紹介されてきました。評価のポイントは、住民主導、行政支援、そして協働体制ができているというところです。そのほかにも食育のネットワークができている、中核となる人材が育っている、食育の理念があるという点でした。地域のネットワークとしてボランティア団体「すみだ食育Goodネット」を立ち上げ、同団体が中心になって「すみだらしい食育文化」を育むまちづくりを目指し、食育活動を展開しています。「すみだ食育Goodネット」は、毎年6月に開催されるイベントを通して、つながった区民と、それから地域団体、NPO、事業者、企業、大学などの関係者が集まり、平成22年に設立され、現在、70団体と個人が参加しています。食育を推進する環境づくりは、庁内の連携・協働の体制と、「すみだ食育Goodネット」を中心とする地域の連携・協働が実現して、住民主導、行政支援の協働体制による食育の取り組みが次々と生まれています。墨田区が目指す食育は「みんなが健康でたのしい食環境を通じて豊かな人生をおくる」で、理念は「食で人を育む、食でまちを育む」ことであり、食を育むのが目的ではなくて、食は人を育む手段であるというふうに捉えています。

まとめですが、「地域で進める介護予防講座」との出会いから、住民参画、行政支援の環境づくりの可能性を、COC連携から学生と市民がともに学ぶ健康づくりを、墨田の食育の取り組みから食育を通しての人づくり、まちづくりをご紹介しました。「健康長寿のまちづくり」を目指す新座市民のニーズに、大学のシーズをどのように生かせるのか、本日のシンポジウムの成果とCOC事業の連携を糸口に探っていきたいと思っています。

▶ディスカッション・質疑応答

◎星野コーディネーター

今の3名のパネリストのお話、久野先生の基調講演を通して、やはり住民参加、住民主体というのが一つの大きなキーワードになってくるのかと思いますが、会場の皆様からも少しご意見、ご質問などをいただきたいと思います。

○参加者

須田市長に質問ですが、新座市環境保全協力員の会を2000年に市民総合大学の講座にセッティングされ、現在まで続いています。私たちは、現在、環境の関係でボランティア活動を進めていますが、いつの間にか、去年も今年もどうも環境を受け付けるというような表札が見当たらなくなったのですが、これ本当でしょうか。

◎星野コーディネーター

須田市長から一言いただきたいと思います。よろしくお願いします。

○須田氏

新座市には3つの大学がありますので、それぞれの大学に市民総合大学の1学部1学科ずつを担当していただいています。

文学、観光、それから健康増進の3つの学部を開設していますので、今、環境のほうはお休みをいただいている状況です。環境保全協力員も含め、観光のサポーターやグリーンサポーター、雑木林の維持管理をお願いする方々など、いろいろな場面で活動されていますので、観光学部にも、環境や雑木林の維持管理なども盛り込んだ幅の広い観光、環境、雑木林の維持保全などの勉強もできるような事業の内容にしたらどうかという意見もいただいていますので、来年度からは増やしていく予定です。

▶まとめ

◎星野コーディネーター

地方創生の総合戦略の中でも、「生涯現役、市民が主役の健康長寿のまちづくり」をうたっていますので、ぜひ市民の皆さんのご意見を伺いながら、まちづくりを進めていただきたいと思います。この地域の皆さんが少しでも健康で長生きをするには市としてどういうふうに進めていったらいいのかと、私たちはどういう取り組みをしていったらいいのかというようなお話を中心に、最後のまとめを久野先生からいただきたいと思います。よろしくお願いします。

○久野氏

まず、市長のお話をお聞きして、新座市がこんなに素晴らしい取り組みをしているのだということを感じました。伊藤先生のお話の中で、今、実は健康という名前が厚労省だけではなく、初めてスポーツ健康課という部署が文科省のほうに入る。これは霞ヶ関的には画期的なことが実は世の中起こり出していまして、このスポーツ推進員というのもスポーツ健康課の管轄で、いわゆるスポーツの実施者を増やすだけではなくて、スポーツの力で健康長寿社会に貢献することにスポーツ推進委員に貢献していただこうという方向性なのです。ただ現実的には、まだそういうことをなかなかご理解いただけないスポーツ推進員が全国的には多い中で、多分、伊藤先生は昔からそういう活動をされていたのだなと、お聞きしながら非常に敬服の気持ちでいっぱいになりました。

それから、最後の長澤教授のお話は、大学の役割として、学生の段階で市民の方と出会う場というのは非常に重要で、大学のキャンパス内というのは治外法権みたいな場所で、実は非常に偏った年代しかいない。そこで4年間なり、あるいは大学院を出て社会に出るというのは、本当にギャップがあるのです。そういう中で、こういう地道な活動を進められていたということをお聞きして、いい活動をされているということに改めて感激しました。

最後に若干アドバイスとしては、非常に素晴らしい政策でも政策効果は、100点というのはあり得ない中で、どこがうまくいっていて、どこに課題があるのか。その課題を明らかにする。そういう政策効果のところを大学がある程度担うべきだろうと思っています。

あとは、やはりこんなにうまくいっていないことを逆にアピールをし、新座市がそこに打ち勝っていくというのは、客観的に例えば健康長寿の人がこんなにいますとか、それはこの政策があるのだとか、そのあたりが具体化すると、もっと新座市がよくなるのではないかなという気がしていまして、そこに十文字学園女子大学があるというのは、新座市にとってはすごいアドバンテージだろうと思いますので、今後の連携を期待したいと思います。

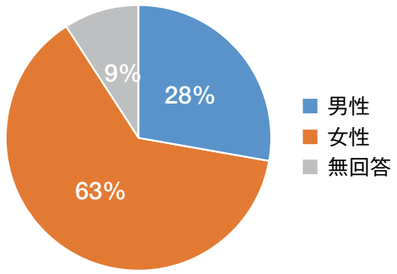
◎星野コーディネーター

久野先生、ありがとうございました。大変いいアドバイスを最後いただきまして、私どももそういった形で一翼を担っていけるように努力を続けたいと思います。

▶COC事業シンポジウムのアンケート結果

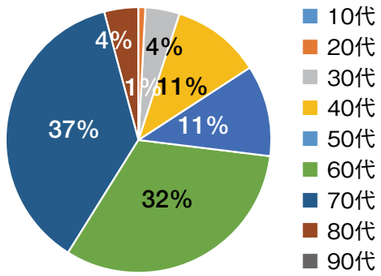
アンケート回答数:117

Q1.性　別



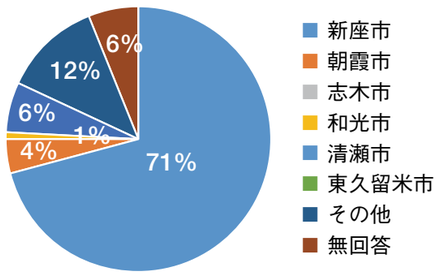
男性	33
女性	74
無回答	10

Q2. 年　代



10代	0
20代	1
30代	5
40代	13
50代	13
60代	37
70代	43
80代	5
90代	0

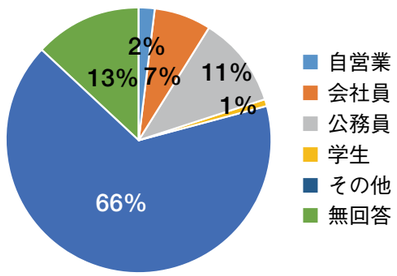
Q3.居住地



新座市	83
朝霞市	5
志木市	0
和光市	1
清瀬市	7
東久留米市	0
その他	14
無回答	7

【その他内訳】
さいたま市、所沢市、川崎市、
練馬区、羽村市

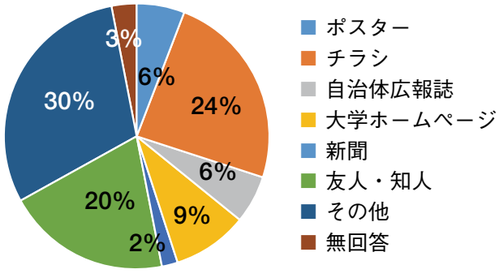
Q4.職　業



自営業	2
会社員	9
公務員	13
学生	1
その他	77
無回答	15

【その他内訳】
主婦(多数)、無職(多数)、
年金生活者、社会福祉法人

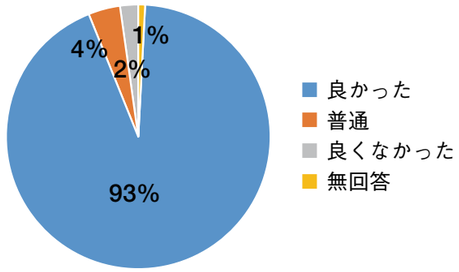
Q5. 今回のキックオフシンポジウムを何で知りましたか?



ポスター	7
チラシ	30
自治体広報誌	8
ホームページ	11
新聞	3
友人知人	26
その他	38
無回答	4

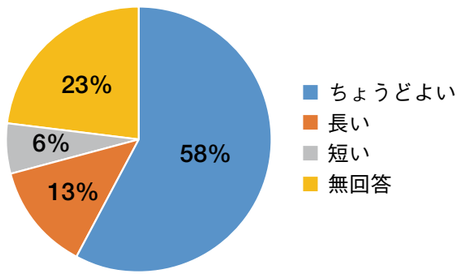
【その他内訳】
DM(多数)、HUGネット、新座市(長寿支援課も含む)、PTA、庁内広報、市の老人会、職場、元気アップ広場、久野先生、伊藤氏、星野先生、本学講演会

Q6. シンポジウムの内容はどうでしたか?



良かった	109
普通	5
良くなかった	2
無回答	1

Q7. パネルディスカッションの長さはどうでしたか?



ちょうどよい	68
長い	15
短い	7
無回答	27

(4) 地域志向教育研究費

教員の地域を志向した教育・研究等を推進するため、文部科学省の大学改革推進等補助金を活用して「地域志向教育研究費」700万円を計上し、公募のうえ、応募のあった申請から40件を採択しました。

① 採択経過・研究成果

1)地域志向教育研究費の採択区分

研究助成種目	細　目	支給限度額(採択件数)
地域志向教育推進	【目的】授業を契機として学生による自主的な学びを支援し、活動を活性化する。 【概要】全学的、組織的な取り組みを推進するため、教員の創意工夫と自主性、自立性、及び参画意識を醸成する教育研究を支援する。	20万円 (10件)
地域課題解決型研究 (学科横断プロジェクト)	【目的】地域課題を解決するために、自治体等の担当者、複数学科の教職員を構成員として、実効性のあるプロジェクト研究を推進する。 【概要】地域における活動実績がある、もしくは研究実績のある教員がリーダーとなって地域課題解決に取り組む。	20万円 (10件)
地域課題解決型研究 (若手スタートアップ支援)	【目的】新たに地域連携活動及び地域に関わる教育・研究活動を目指す教員の研究活動を支援する。 【概要】地域自治体等と協力し勉強会、ワークショップ等の開催による地域課題解決型の研究活動に取り組む。	10万円 (10件)
地域連携創造・支援事業	【目的】学生が地域自治体等とともに地域課題解決に取り組むことを支援する。 【概要】新座市、市内NPO、ボランティアグループ等との連携による地域課題解決型教育・研究活動に取り組む。	20万円 (10件)

2)経　過

平成27年4月～5月	「地域志向教育研究費」の公募要領に基づく学内公募、選考、採択の実施
5月～3月	「地域志向教育研究費」採択事業の実施
平成28年5月	「地域志向教育研究費」採択事業実績報告書の提出

3)研究の成果

研究助成費目	研究の成果
地域志向教育推進	事業推進により地域貢献だけでなく研究者の研究意欲の向上にも繋がった。この研究成果を教育面に還元・反映し地域志向型の学生の育成に繋げていく。
地域課題解決型研究 (学科横断プロジェクト) (若手スタートアップ支援)	「学科横断プロジェクト型」は、地域との共同研究で地域課題解決に資する研究に留まらず、学科固有の研究領域や教員個人の専門を超えた研究領域の拡大・深化を図り、研究や教育水準を大いに高めることができた。 「若手スタートアップ支援型」は、地域課題の解決だけでなく、若手研究者の研究意欲が向上し、その成果を教育に還元・反映することで学生の学習意欲が高まった。
地域連携創造・支援事業	まちおこし、子育て、地産地消、地域資源保護、キャリア開発など地域に密着した多様な研究が展開され、成果を得ることができた。

② 平成27年度採択研究一覧

区分	分野	No.	研究課題名
地域志向教育推進 【配分金額20万円】	教育	1	自主社会活動の開発 （ワークショップを用いた地域の課題解決と人材育成の手法に関する研究）
	健康・福祉	2	新座市「を／で」心理学する―地域に展開する コミュニティ心理学研究の基礎づくり
	歴史・文化	3	新座歴史探訪Ⅱ
	健康・福祉	4	佐藤ゼミ地域福祉活動（知的障害者余暇活動支援ボランティア）体験学習
	教育	5	新座市内の介護保険施設の利用者への傾聴ボランティア体験学習
	子育て	6	志木市おやこ支援プロジェクト（通称:ビタミン愛プロジェクト）
	教育	7	小学校現職教員における授業力向上研修プログラムの確立と 教員養成カリキュラムの融合
	教育	8	地域と連携した実践の教育的効果を高めるための方策の検証
	授業	9	地域志向教育での教育課程・教育内容・教育方法開発の研究
	授業	10	地域志向教育実施のためのプログラム開発
地域課題解決型研究 （学科横断プロジェクト） 【配分金額20万円】	健康・福祉	11	新座市地域住民の全身持久力の測定と運動指導と食事指導
	授業	12	人材育成方針「Jモデル」開発及び実施のための基礎的研究
	健康と環境	13	新座市とその周辺地域における農産物の栄養学的側面からの課題解決
	子育て	14	学童保育における子どもの安全安心の確保と 健全な育成を図るための取り組み
	子育て	15	乳幼児を子育て中の保育者が行うピア・サポートとしての子育て支援事業 「＋（プラス）ママの子育てサロン」開催と有効性の検討
	教育	16	プレプラ@十文字の森
	授業	17	恋する大学改革partⅡ～地域貢献＋（プラス）教育改革～
	健康・福祉	18	地域患者の治療における有用なレシピ開発と食生活調査
	健康・福祉	19	地域アミロイドーシス患者におけるカテキンの治療および予後に対する効果
	子育て	20	子ども元気プロジェクト2015
地域課題解決型研究 （若手スタートアップ） 【配分金額10万円】	健康・福祉	21	新座市の児童生徒の喫煙開始防止に向けた指導者養成
	歴史・文化	22	新座市における地域文化アーカイブズの創造
	広報	23	埼玉クイズ王予選会場を誘致し地域を大いに学ぶ
	広報	24	各種団体の広報誌とのコラボレーション
	健康・福祉	25	「健康と運動」から新座市民ロードレースへ
	歴史・文化	26	新座市「フシギマップ」プロジェクト
	地域産業	27	地域連携による地域産業情報の発信プロジェクト
	教育	28	新座市内の公立保育園と協働した実習体験を基盤に置く 保育者養成初期段階のカリキュラム検討（2）
	芸術・文化	29	ピアノによる「ふるさと新座館」ホール活性化事業
	まちづくり	30	新座駅前における「ふるさと」創生の試み
地域連携創造・ 支援事業 【配分金額20万円】	子育て	31	子育て・子育ち支援におけるリスク支援の在り方の検討 ～先駆的取り組みをしている団体との情報交流その2～
	健康・福祉	32	「NPO法人暮らしネット・えん　えん食卓」食事サービスの改善への取り組み
	地域情報支援	33	地域密着型メディアによる情報発信
	地域産業	34	地域との連携活動を通した地場野菜の有効活用
	キャリア支援 男女共同参画	35	新座市女性職員と女子学生のWin-Winキャリア支援
	教育	36	産学官連携による地域の食材を使った商品の開発
	地域づくり、中山間部と都市部との交流	37	中山間地域の豊かな自然と都市部における人的物的資源との融合による 新たな人材育成プランの創造
	まちづくり	38	学生と共に考える大学キャラクターの活用とその展開 ―街に飛び出せ!プラスちゃん―
	自然・環境	39	ふるさとの緑を育むプロジェクト
	自然・環境	40	野火止用水保全プロジェクト

③ 平成27年度実績報告

（研究代表者・共同研究者の肩書:平成27年度）

地域志向教育推進　No.1

研究課題名	自主社会活動の開発（ワークショップを用いた地域の課題解決と人材育成の手法に関する研究）
分野	教育
研究代表者	松永 修一（文芸文化学科 教授）
共同研究者	宮川 保之（21世紀教育創生部 教授） 松本 晃子（生活情報学科 教授） 加藤 順弘（生活情報学科 教授） 藤本 正徳（生活情報学科 教授） 石野 榮一（メディアコミュニケーション学科 教授） 長澤 伸江（食物栄養学科 教授） 潮谷 恵美（幼児教育学科 准教授） 福島 聡（プラスキャンパスプロデューサー） 名塚 清（地域連携コーディネーター） 柳澤 貞夫（総務部長） 樫本 圭司（会計課長）

1.概要

社会に出て活躍するための多方面にわたる能力（いわゆる「社会人基礎力」）の育成が、ますます求められるようになっている。しかしながら、そうした社会からの要求に応えて、大学での学びを生かした社会貢献の実践機会を学生に提供する窓口は本学にはまだなかった。この機能を作ることにより、学生たちが集って立ち上げる自主的・創造的な活動である「プロジェクト型自主活動」を支援し、さらに、その活動を学内のみに留めずに地域社会と連携させていくことが可能になる。そのためには学生が実施するプロジェクトを支援し、新企画立ち上げの手助けをするメンターも必要だろう。本プロジェクトは当初、地域連携を核として学生が楽しみながら自主活動をつくっていくための情報とリソースを提供し、自由にミーティングや相談ができる「プラットフォーム的な場」を作るための実験的研究を目指した。また、地域の方々と学生、教員とでワークショップを行い、地域にある社会的問題解決のためのプロジェクトを立ち上げ実践の機会を創造しようというものであった。

2.取り組み

本学のキャリア科目である「自主社会活動」を、プロジェクト型自主活動が学外に展開していくサポートをするための組織作りと、他大学や県レベルでの事例を調査し、十文字で必要とされるモデルの構築を目指し、まずは事例研究を中心に進めた。宮城女子学院大学のリエゾンセンター、東北福祉大学などに訪問し、活動の実際をインタビューを通して教えていただいた。本学と同じ女子大である点、教育など文系学科を中心とした教育課程の類似点また、大学のサイズが近い点などから宮城女子学院大学の組織作りまた、運営方法など参考にできる点を多数見つけることが出来た。これらの調査結果は、就職支援関連委員、就職支援課の職員へ報告するとともに意見交換をおこなった。また、ワークショップの運営については、ファシリテーションの仕方、グラフィックレコーディングという記録手法の講習会を、「社会人入門」「キャリアデザイン」というキャリア系授業の中で行い、体験を通してスキルを身につけてもらうよう進めた。ワークショップについてはCOCの他の研究課題の中でも積極的に協力し、市民とのワークショップも3回実践活動として行った。

3.成果

事例研究の結果に関しては、本学のキャリア科目である「自主社会活動」を、プロジェクト型自主活動が学外に展開していくことを目指し、キャリアセンター職員と意見交換する機会をつくることにより、共通のモデルをイメージできるようになった。組織の在り方や、必要な機能についてもある程度共通認識を持つことが出来るようになった。具体的な自主社会活動のプロジェクトは学生のモチベーションを維持することの困難さ、実施時期、評価日程などの問題でこの年度では成果を出すことはできなかったが、28年度にはいくつかのプロジェクトを立ち上げ学生の参加を促すことが出来るようになった。また、目的や性質に応じて、様々な外部団体（自治体、NPO、教育機関、地域の産業など）を連携先も作ることが出来るようになった。中途からボランティアセンターの構想がうまれることで本研究は一応終了させた。合意形成によるワークショップの手法は新座市役所の女性職員の研修会、3回。LGBTとダイバーシティーを考えるワークショップ。自分の発想をグラフィックとしてまとめていくワークショップ。イノベーションファシリテータの養成講座3回など学生のワークショップに関するスキルをアップさせ、自分たちでも運営体験をしてもらう事もおこなった。

また、三重大学と尾鷲市のCOCの取り組みを尾鷲市市長や担当職員から行政側の立場からみたCOCについて聞き取りすることが出来た。また、ソウル・釜山におけるまちづくり活動の最前線と大学やそのOB会との関わりなど、ケーススタディーとして大変興味深い領域に接することが出来た。今後の、まちづくりワークショップの運営や、関わる方々へのサポートに活かしていければと考えている。

地域志向教育推進　№2

研究課題名	新座市「を／で」心理学する―地域に展開するコミュニティ心理学研究の基礎づくり
分野	健康・福祉
研究代表者	風間 文明（人間発達心理学科 准教授）
共同研究者	東畑 開人（人間発達心理学科 講師） 伊藤 佳史（新座市企画課長）

1.概要

本プロジェクトは地域において心理学研究を行い、そのことで学生の教育と地域貢献を行おうとするもので、昨年度からの継続課題であった。1年目は土台固めとして、研究課題と調査計画の策定を行い、それを可能にするための調査先について、市役所や商工会議所、NPOなどと話し合いを重ねてきた。その上で二年目は実際に現場で交渉を行いながら調査を行い、研究を遂行した。

具体的には地域企業や市役所等の自治体、あるいはNPOに調査を協力していただいた。その結果、学生は研究を通して、社会人としての能力と、心理学的な研究技能を習得し、地域との交流も深まった。

2.取り組み

今年度は学生が実際に研究を遂行し、それを卒業論文としてまとめあげる作業を行った。4人の学生が積極的にプロジェクトに参加して、本人が自ら現場に赴き、地域の人々と交渉を行い、それを心理学的な成果として発表するということが可能になった。行われたのは以下の研究である。

①精神的理由による若者の休職とその支援について
働く人のメンタルヘルスケアをテーマとして、市役所等の自治体の人事課に協力を願い、学生がインタビューを行った。

②夢とストレスの関連性－夢を用いたストレスコーピング法－
働く人の見る夜の夢と職場でのストレスのかかわりをテーマとして、新座市内の複数企業、および商店街に調査協力の依頼をした。この際、学生自らいくつかの企業を訪問して、交渉を行いながら、調査を進めた。

③キラキラネームの世代間別判断基準と若者における受容について
昨今の名前の印象について、高齢者と若者の差異を調べるために、新座市老人福祉センター等の高齢者施設で調査を行った。

④ペットの手放しはなぜ起こるのか―オウム・インコレスキュー団体の目線から考えること
ペットの手放しをテーマとして、新座市内のNPO法人にインタビューを行い、その後調査者であった学生はNPOでボランティア活動を行うなどして、問題の認識を深めた。

3.成果

本プロジェクトの主眼は、従来大学の中に閉じこもりがちであった心理学研究を社会や地域の中でアクティブに行うことによって、心理学教育が社会人教育と深く関わるモデルを示し、そして心理学によって地域課題を浮き彫りにし、解決のための一助とすることであった。本年度、4つの研究を成果として発表し、地域連携による心理学研究のひとつの実践モデルを呈示できたことは大きな成果だと言える。研究成果自体は以下の図を参照。

加えて、今後の地域連携による心理学研究の手続きについて、今年度を通して確立したことは重要である。誰を窓口とし、学生がどのようにそこに参加し、どのような手続きで研究を行えばいいのかについて、メソッドを蓄積できたことは極めて重要である。それは今後の汎用性の基礎を獲得したことを意味している。

今後の課題としては、得られた研究成果を地域に還元していくメソッドや手続きの開発と、そのようなプロセス全体をモデル化して全国的に発信していくことが目指される。それは心理学研究と地域連携という未知の分野の融合を可能にする斬新な試みとなると考えられる。

図:「ペットの手放しはなぜ起こるのか―オウム・インコレスキュー団体の目線から考えること」の研究成果

地域志向教育推進　№3

研究課題名	新座歴史探訪Ⅱ
分野	歴史・文化
研究代表者	池間 里代子（21世紀教育創生部 教授）
共同研究者	吉田 紀生（新座市文化協会理事） 並木 利志和（新座市文化協会評議員）

1.概要

本研究は新座の歴史を発掘し、新座に代々居住する人・最近転入した人に幅広く知って頂くために新座の歴史をひもとき、必要に応じて取材で得た情報を加えたパンフレット作成を目標とした。

今回取り上げたのは、松永安左エ門（耳庵）である。耳庵は近代三茶人の一人として著名であり、新座のサンケン電気をおこし、所沢の境に柳瀬荘を建て居住した。また、平林寺前の睡足軒を別荘とし、茶道三昧の生活を送った。奇しくも平成27年は耳庵の生誕140年であり、終焉の地である小田原では講演会や展示会などが多く企画された。新座では耳庵についてあまり知られていない事から、この取組が啓蒙となればと思い企画した。

2.取り組み

松永耳庵の足跡を調べ、関係する論文や書籍を収集するとともに、下記日程で取材を行なった。

6月11日　所沢の柳瀬荘（東京国立博物館分館）へ取材
6月21日　横浜の三渓園へ取材、資料を購入
7月11日　箱根の強羅公園へ取材
9月19日　小田原の松永記念館にて講演会参加
11月15日　東京国立博物館へ取材、茶室の見学及び撮影
11月29日　新座睡足軒取材、茶道部主催の茶会に参加

また、4月に二葉流南宗盛物東京支部研修会において招待講演を行ない、7月に日本大学レディス桜門会総会において招待講演を行ない、松永耳庵の足跡と日本の茶道会へ与えた影響について広く伝えることができた。

所沢「柳瀬荘」

小田原「老欅荘」

強羅「白雲洞」

3.成果

松永耳庵の生涯と関連する茶室を中心に、彼の言行録をパンフレットにまとめ3000部作成した。（歴史民俗資料館へ200部、睡足軒へ500部、観光プラザへ500部、生涯学習センターへ200部、市政情報課へ100部、生涯学習スポーツ課へ500部、学内へ500部を平成28年7月に予定している耳庵についての講演会案内状とともに配布予定）

また、7月9日には本学において「荒ぶる侘び－松永耳庵の生涯と新座―（仮題）」を公開講演する予定である。これら成果物と講演により、耳庵の新座時代が補完され次の研究への助けになった。

さらに、新座在住の人々に新座にまつわる著名な人物の足跡を知らせ、帰属意識を高めることを促進することができたと思う。実際に、睡足軒で行われた本学茶道部の呈茶会で、新座市民の方と耳庵について意見交換をすることができた。

地域志向教育推進　№4

研究課題名	地域福祉活動（知的障害者余暇活動支援ボランティア）体験学習
分野	健康・福祉
研究代表者	佐藤 陽（人間福祉学科 教授）
共同研究者	

1.概要

我が国の障害福祉施策は地域移行に主軸をおいているが、地域で支援を要する障害児者が生活しやすい物理的環境と、その人たちを受けとめる地域住民の精神的環境醸成が整っているとは言い難い。和光市及び川越市で障害福祉施策に関わる佐藤の知見に基づき、学生が障害福祉の現状を理解し、地域住民が障害児者と共に地域で暮らすことが当たり前の社会になるようソーシャルインクルージョンとノーマライゼーションを根幹とする地域福祉の推進の一端を体験的に学ぶ。ボランティアグループあひると共に、地域社会の中で障害児者の余暇活動支援に関わり、その活動を通して、個別支援と地域支援のあり方を学び、地域福祉活動の必要性を理解する。

2.取り組み

平成27年度は、低学年の障害児の余暇活動支援の要望が高いことを受けとめ、ゼミ生の主体的姿勢も高まり、NPO法人「みんなのて」理事長の協力を得て、利用者の小学4年から6年を対象に活動参加を呼びかけ、新たな仲間の参加が実現した。また、平成26年度に関わった障害児者の在宅生活に着目し、彼らや家族の要望（若い人たちと一緒に遊ぶ、食事やショッピングをする）に応え、以下の活動を実施した。

①6月14日志木カミヤボウルでボーリングとマルイで食事とショッピング

（障害児者14名、地域ボランティア7名、3,4年ゼミ生13名、2年生3名、教員1名　合計38名）

• スポーツを通じて関わる経験から障害理解を促進し、マンツーマンの対応により個別支援を学ぶ。

②10月18日大宮鉄道博物館見学

（障害児者14名、地域ボランティア7名、卒業生3名、3,4年ゼミ生11名、教員1名　合計36名）

• 障害児者の希望の交通機関を多用し、遊びを通じて相互に楽しめるよう個別とグループ支援を学ぶ。

③12月23日十文字学園女子大学　交流した障害児者とクリスマス会

（障害児者12名、地域ボランティア8名、3,4年ゼミ生12名、教員1名　合計34名）

• 共にクリスマス会の準備をした上で互いに楽しめるよう工夫して関わることを学び、その後本人と保護者とボランティアと共に話し合いを実施し、本年度の交流について振り返り分かち合う。

↑あひるとの話し合い

↑保護者との話し合い

↑ボランティアとゼミ生の振り返り

3.成果

①体験学習枠組みを活用して福祉理解と実践方法について理解を促進できた。

佐藤（2002）の福祉体験学習評価視点により、学習者の基本姿勢を4年ゼミ生が3年ゼミ生に伝え、ボランティアグループ「あひる」メンバーから活動の発足経緯と取り組む視点を学び、事前学習として「認知」する。その後、活動に向けた下見を実施し、プログラムをつくり、ペア対応で家族や障害児者本人と様子確認をして、実践準備を行い、活動に向けて「意識」した。ゼミ生と「あひる」メンバーにより実施前の確認をして、当日の具体的体験を行い、障害福祉と支援方法について体験的に「認識」した。活動後、ボランティアとゼミ生で振り返りを実施し、後日ゼミにおいて更に省察を行い、地域福祉の意義について理解を促進した。

②マンツーマンで一日接する実践により個別支援方法と地域支援の意義について体験的に学んだ。

地域福祉活動の実際に主体的に関わり、施設や福祉サービスだけでは支えきれない障害児者の余暇活動の重要性と、家族や福祉関係者ではない人と交流することの必要性を学んだ。また、地域ボランティアの必要性と障害児者の理解と支援方法を体験的に理解した。

地域志向教育推進　№5

研究課題名	新座市内の介護保険施設の利用者への傾聴ボランティア体験学習
分野	教育
研究代表者	大山 博幸（人間福祉学科 准教授）
共同研究者	福田 智雄（人間福祉学科 教授）

1.概要

社会福祉士指定科目における相談援助系の授業で、傾聴技術やコミュニケーション技術を学習した学生が、実際に福祉施設や事業所に訪問し、傾聴ボランティアを体験する。介護保険施設（特別養護老人ホーム）の利用者を対象とした傾聴活動を学生に課し、その結果から、傾聴やコミュニケーション技術習得の方法やその成果について検討する。

2.取り組み

1）傾聴ボランティア活動と事前事後評価

①演習（大山ゼミ）内にて、3コマほど、傾聴技術を使用したトレーニングを実施。

②傾聴ボランティア活動実施前に傾聴技術に関する質問項目およびKISS18（対人スキル尺度）によって作成した質問紙調査を記名式にて対象学生に実施。

③平成27年11月10日より、新座市内特別養護老人ホーム「そらーれ新座」内で、対象学生9名により1回90分を週1回で計4回実施。なお、ボランティア初日には施設職員よりボランティアにおけるガイダンスを受講。

④活動事後に②で実施した質問紙調査を実施。後日結果を解析考察。

2）関西国際大学視察:2学年次にサービスラーニングの授業（臨床心理学科横川教授担当）内において、大学近隣のグループホームの利用者を対象に、回想法を用いたグループ形態による傾聴活動を実施している。活動にはグループホーム職員と学生が共同で取り組んでおり、事前打ち合わせ及び事後の振り返りも共同でなされており、学生が現場専門職によって学びを支援されている姿があった。

3）傾聴ボランティア団体「ちょうちょ」とのミーティング

新座市内で活動する傾聴ボランティア団体「ちょうちょ」の代表3名の方と活動した学生とでミーティングを行った。

3.成果

1）認知症高齢者への傾聴の難しさや傾聴技法の意識的な使用とその機能について学生は学ぶことができた。また、傾聴技術に関するチェックリストの一部の項目において、事後の平均得点が事前に比べ上昇しており、継続した傾聴ボランティア活動により学生の傾聴技術が向上したことが示唆された。しかしながら、社会的スキル尺度の得点には変化が見られなかった。

2）関西国際大学でのサービスラーニング事業においては、当該傾聴活動による成果を学生職員相互に実感しており、まさに地域の中で「知」が生成されている様子が示唆され、本学COCの取り組みにおいても大いに参考になる実践であった。

3）「ちょうちょ」とのミーティングでは、「傾聴」とは何かといったことについての議論となった。「傾聴」の意義等その内実については、活動する者によって主観的にさまざまに意味づけられる傾向があるようであった。

地域志向教育推進　№6

研究課題名	志木市おや子支援プロジェクト
分野	子育て
研究代表者	山口 由美（人間福祉学科准教授）
共同研究者	小笠原 順子（NPO法人志木子育てネットワークひろがる輪代表） 塩沢 夕起子（NPO法人志木子育てネットワークひろがる輪） 畠中 由美子（NPO法人志木子育てネットワークひろがる輪） 北澤 恭子（NPO法人志木子育てネットワークひろがる輪） 橘 郁子（NPO法人志木子育てネットワークひろがる輪） 平光 里恵（NPO法人志木子育てネットワークひろがる輪） 小林 美里（NPO法人志木子育てネットワークひろがる輪） 山下 美香（志木市子育て支援センター） 金子 里佳（志木市子育て支援センター）

1.概要

NPO法人志木子育てネットワークひろがる輪は平成18年に地域の子育てネットワーク作りを目的として結成された特定非営利活動法人で、子育て交流事業、地域交流事業、社会全体で支え合うネットワーク作りに関する事業、子育て支援に関する事業等様々な事業を行っている。

ひろがる輪のスタッフや、子育て支援センターのスタッフと子育てに関する課題を考えた際に、父親たちがなかなか子どもたちと遊びなれないことや、未就園児の母親たちの育児中の孤立しやすいことがあげられた。また、解決のため様々な講座に取り組みたいと考えているが、講座中の保育を担うことが難しい現状があった。

保育士を目指している学生は、1年次に実習がないこともあり、ボランティア以外で保育を経験したいという希望があった。そこでひろがる輪と本大学の学生が協力することにより課題を解決できるのではないかと考え、本事業を行うこととした。

2.取り組み

上記の課題を具体的に解決する取り組みとして二つの取り組みを行うことにした。

①父親が参加しやすいカプラブロックを活用した親子ワークショップを開催し、学生が参加する。

カプラブロックで遊ぼう&専門相談　　平成27年10月4日　志木ふれあいプラザにおいてKAPLAブロックを用いた親子ワークショップ及び専門相談を行った。父親と未就学児が遊べるように開催日を日曜日の午後にしたこともあり、参加者は207名（子ども96人、保護者91人、関係者20人）であった。

②子育て支援講座を開催し、学生は講座時の保育に参加する。

子育て支援講座（ママサプリ）を3回行った（平成28年2月2日・2月26日・3月1日）。

2月～3月に志木市いろは遊学館において子育て支援講座を開催した。子育て支援センターを利用している母親たちなどを中心にチラシを配布し、12名の母親が子育て支援講座に参加した。母親たちに講座に集中していただくため講座は研修室で、講座中の保育は保育室で行った。保育は子育てネットワークの会員や学生たちが担当した。子育て支援講座は「フォーカシング」的要素を用いて行った。

3.成果

カプラブロックで遊ぼう&専門相談においては、父親、母親、子どもだけでなく、祖父母の参加もあり、子どもとおとなが楽しく作品を作ることができた。また、インストラクターのリードのもと、「かまくら」を作った。特に父親が大がかりな作品を作り、最後に作った作品をつなげ、一体感を味わった。子どもはカプラで遊び、母親は専門相談を利用された方もいた。志木市内在住の方は児童発達相談センターの発達相談につなぐことができた。学生たちも主体的に参加者と関わったり、作品作りに加わったりした。

子育て支援講座は3回の講座を「フォーカシング的要素」用いて行った。話し合いやロールプレイを通して、母親たちが様々な気持ちを共有し整理することができていた。講座を通して、一人だけが大変なのではないこと、同じ立場にある母親同士で認め合うことでほっとできる時間をもつことができていた。

最初は保育を依頼することにためらいがちだった母親たちも、3回目には安心した様子で子どもを預けていかれるようになり、学生たちも責任をもって保育に携わっていた。

地域志向教育推進　№7

研究課題名	小学校現職教員における授業力向上研修プログラムの確立と教員養成カリキュラムの融合
分野	教育
研究代表者	山本 悟（児童教育学科 教授）
共同研究者	日出間 均（児童教育学科 教授）、弘中 幸伸（新座市立野寺小学校 校長） 狩野 浩二（児童教育学科 教授:研究協力員）

1.概要

新座市の公立小学校教育現場では、団塊世代教員退職に伴う校内研修活動の充実に向けた実践的な試行と指針を具体化することが極めて緊急かつ重要性の高い問題となっている。その一方、校内研修活動と称して小学校教育現場で展開される提案性の高い研究授業を参観する体験は、教員志望の学生への教育的価値と効果を有し、教員養成カリキュラムの有益な学びの場を提供する可能性がある。そこで、この両者を融合させた本事業を展開して本学教員養成課程の学びと現職教員を教育するプログラムの接点について具現化を図ることにした。

2.取り組み

①算数科研究授業と協議会（平成27年6月24日、平成27年10月29日、平成28年1月25日）

野寺小学校が新座市より委嘱された3カ年の算数科授業研究推進事業と連動させ、若手教員による3回の研究授業及び協議会を実施する。日出間教授が研究授業を参観し、授業協議会で授業講評と指導助言を行う。

②体育科研究授業と協議会（平成27年10月29日）

6年生のボール運動「ティーボール」を題材にした体育科研究授業を実施する。授業の指導講評は研究代表者が担当し、若手教員の指導力向上への助言を行う。教員志望の学生に現職教員のキャリア形成の実態を体験させる機会とする（児童教育学科3年生7名、4年生10名参加:研究者代表者、ゼミ学生）。

③私的研究会（小学校授業研究会・研修会）への参加活動

筑波学校体育夏期研修会（3名）、全国算数授業研究大会（3名）、つくばICT教育研究会（5名）、学習公開・初等教育研修会（3名）に若手教員を参加させ、算数科と体育科を中心に授業力向上を支援する。

④教育講演会の実施（平成28年1月7日:野寺小学校）

野寺小学校校内研究会において、伊藤説朗氏（東京学芸大学名誉教授）に講師を依頼し「これからの算数教育に期待すること」と題した教育講演会を開催し、児童教育学科4年生にも学びの場を提供する。

⑤座談会の実施（平成28年2月19日:野寺小学校～研究代表者、構成員、現職教員、教員志望学生が参加）

「現職教育のあり方～大学で学んだことは教育現場で生かせるか?」をテーマにした座談会を設定し、自由な討論や対話をもとに研究課題の具体に迫る契機とする。

3.成果

予算を柔軟に活用できる利点を生かし、小学校算数科及び体育科教育に関する新しく有益な情報と知識を提供する場を設定して現職教員の実践的な授業力向上に寄与し、現職教員研修プログラムの有効的な基礎資料が得られた。また、これらの取組に参加した小学校教員志望の学生（14名）は、現職教員のキャリアアップの実態を体験し、大学の学びの重要性を再認識した感想や意見を述べていた。次の4点が成果である。

①教職経験の浅い教員が実践した研究授業を通じて、実践的な授業力向上を導く研修システムの要点や効果的な協議会の進め方が明確になり、教員志望の学生を参加させる教育的な意味や価値も示唆された。

②先進的な授業実践に取り組む研究団体が主催する研究会（研修会）に若手教員を派遣し、授業研究や教材研究の多様な考え方や教員仲間のネットワークの構築等、教育に関する視野の拡大を支援した。

③予算の活用により、教具や授業研究に関する資料が充実し実践的な授業力を向上させる教育環境が整った。

④研究課題に関する教育講演会及び座談会の実施は、現職教員が実践的授業力向上への新たな知識・考え方を学び直すとともに、教育や授　業づくりに関する考えを整理し自分の言葉で表現（発言）する能力を高める機会となった。

教育講演会（算数）の様子

座談会の様子

（成果物:小学校現職教員における授業力向上研修プログラムの確立と教員養成課程カリキュラムの融合 ～報告書）

地域志向教育推進　№8

研究課題名	地域と連携した実践の教育的効果を高めるための方策の検証
分野	教育
研究代表者	綿井 雅康（人間発達心理学科 教授）
共同研究者	宮川 保之（21世紀教育創生部 教授） 高橋 京子（健康栄養学科 教授） 青木 己奈（児童教育学科 有期助手） 小林 直美（生活情報学科 有期助手）

1.概要

教職基礎演習では、キャリア教育としてさつまいもプロジェクトに取り組み、新座市内の様々なイベントにおいて社会貢献活動を展開してきた。このような活動の教育効果を検証し、特にリーダーの育成という視点でとらえ直してみるため、平成26年度は、株式会社「総合教育研究所」の開発した「CUBIC」と「AWAKE」を使用した分析を試みた。リーダーとしての経験が少ない学生たちが、リーダーとして活動に取り組む場合、「計画組織力」「説得／対話力」の領域において、それぞれの特性に対応したメニューを作成することで、リーダーとして育成していくことができ、これが、活動全体の活性化にもつながっていくことが分析された。平成27年度は、教職基礎演習にかかわる児童教育学科の学生と、健康栄養学科の有志からリーダーが14名立候補した。このリーダーの特性を分析し、育成の計画を立て、「CUBIC」「AWAKE」により結果を検証することにより、成長の機会を保障できる計画となっていたかを分析する。また、「YGPIコンピュータ判定」も併せて実施し、指導者の認識との比較、「AWAKE」による分析との比較を行う。

2.取り組み

8月　リーダーの育成計画の作成
9月～12月　さつまいもプロジェクト実施、育成計画に基づいたリーダーの育成
10月　新座市産業フェスティバル
11月　新座市収穫祭・新座市オープンカフェ
12月　新座市グルメ・ゆるキャラフェスティバル
12月　学内販売
1月　「CUBIC」「AWAKE」実施・結果分析

「CUBIC」による個人特性分析、「AWAKE」による個人の適性や、コンピテンシー（行動特性）の評価診断を14名のリーダーを対象に平成27年1月下旬に実施した。「さつまいもプロジェクト」の指導にあたった、高橋・青木が14名を評価し、指導者の評価も合わせて、個人分析を行った。「YGPIコンピュータ判定」のタイプ判定を手掛かりに、指導者の認識との比較、「AWAKE」による分析との比較を行った。

3.成果

「さつまいもプロジェクト」には、児童教育学科の1年生61名と健康栄養学科の1年生35名が参加した。児童教育学科8名、健康栄養学科6名のリーダーが中心となり、活動をリードした。バター不足、高騰の影響から、バターを使用しない「タルト」「カップケーキ」を商品に加え、9月に試作を行い、10月から12月まで、イベントに参加し、販売してきた。1年生にとって、この活動は簡単なことではない。調理での失敗もあった。責任をもって仕事をすることの大切さを、活動を通し、身をもって学びとっていった。2つの学科をまとめて活動をリードするリーダーたちの負担はこれまで以上であった。それぞれの学科の特性を生かし、チームワークがとれ始めてきたのは、11月以降であった。収益はすべて義援金として双葉町教育委員会に寄付した。1月末、加須市にある双葉町支所に、双葉町の伊澤史朗町長が来てくださり、学生の代表から義援金を受け取ってくださった。2月、双葉町の半谷淳教育長よりお礼のお手紙が届いた。学生たちは自分たちの活動の意味を再確認した。

中心となって活動したリーダー、副リーダーを「CUBIC」「AWAKE」を合わせて分析してみると、自己評価も高く、指導者の評価ともほぼ一致していた。適切な活動の場が確保され、活動を通して成長し、高い満足度で活動を終えることができたと思われる。課題は、自己評価は高いが指導者の評価とは一致しない群と、自己評価を上げきれなかった群である。リーダーとして置かれていた状態が個人の特性を十分に発揮できる状態になかった学生たちである。「YGPIコンピュータ判定」のタイプ判定を合わせて分析してみると、検査結果としてされているタイプと指導者側の認識とのずれが大きいことが明らかになった。リーダーとしての育成計画は、指導に当たる担当者が日常の行動観察をもとに、本人の希望を確認して作成した。これに加え、「YGPIコンピュータ判定」などの情報があれば、学生に負担の少ない状態でより学びのある経験を積ませることができる。「YGPI検査」は、「CUBIC」「AWAKE」などと比べ、経費がさほど掛からず、短時間で実施できる検査であり、このような検査結果を生かした学生の育成は、積極的に検討される価値ある取り組みであると考える。

地域志向教育推進　№9

研究課題名	地域志向教育での教育課程・教育内容・教育方法開発の研究
分野	授業
研究代表者	安達 一寿（副学長・メディアコミュニケーション学科 教授）
共同研究者	狩野 浩二（児童教育学科 教授） 佐藤 陽（人間福祉学科 教授） 赤間 恵都子（文芸文化学科 教授） 大宮 明子（幼児教育学科 准教授） 星野 祐子（文芸文化学科 准教授） 北原 俊一（メディアコミュニケーション学科 教授） 大山 博幸（人間福祉学科 准教授）

1.概要

地域教育開発部門では、地域志向教育実施に向けての教育課程開発、教育内容・教育方法に関する取組をおこなった。本取組では、下記の事項について、調査・分析・検討をおこない、本学での教育課程実施に必要な事項を整理した。

① 共通教育での地域志向科目の枠組検討、教材開発等
② 学科専門科目での地域志向科目の枠組検討、教材開発等
③ 学生育成モデルと教育指標、評価ツールの基礎開発
④ 学生成果測定に関する調査研究

2.取り組み

① 共通教育での地域志向科目の枠組検討、教材開発等
- ガイドラインを配布し、シラバスに反映させた。
- 必要な教材資料（図書等）を整備し、図書館の「地の拠点」の図書コーナーを拡充した。
- 地域志向教育用のテキストを開発し、学生に配布した。

② 学科専門科目での地域志向科目の枠組検討、教材開発等
- 各学科へ地域志向科目の登録を依頼し、科目一覧を学生に周知する準備を行った。

③ 学生育成モデルと教育指標、評価ツールの基礎開発
- 学生向けのガイドブックを作成・配布した。

④ 学生成果測定に関する調査研究
- ポートフォリオに関して、一部学科での試行を行った。

3.成果

学生向けテキスト「学びのナビゲーターeポートフォリオを活用した学びのPDCA－」（一部）

eポートフォリオの概要、使い方の説明

ルーブリックの内容、使い方の説明

地域志向教育推進　№10

研究課題名	地域志向教育実施のためのプログラム開発
分野	授業
研究代表者	安達 一寿（副学長・メディアコミュニケーション学科 教授）
共同研究者	狩野 浩二（児童教育学科 教授） 佐藤 陽（人間福祉学科 教授） 赤間 恵都子（文芸文化学科 教授） 大宮 明子（幼児教育学科 准教授） 星野 祐子（文芸文化学科 准教授） 北原 俊一（メディアコミュニケーション学科 教授） 大山 博幸（人間福祉学科 准教授）

1.概要

共通科目の地域志向科目「地域で学ぶ」「埼玉の地理・歴史・文化」の内容や方法の充実のため、ゲスト講師の招聘を行った。成果として、「大学人サミット」（松本大学開催）に参加し、本学のCOC事業に関しての発表を行った。

2.取り組み

（講師招聘実績）

地域志向科目	月　日	講　師
埼玉の地理・歴史・文化	4/27、5/11	チーム・キャロット 高畑 正 氏
	6/8	武州里神楽保存会 石山 大隅 氏
	6/15	いいことクリエイション 一ノ瀬 要 氏
	6/22	雑木の会 谷合 宜明 氏
	7/13	川爺 佐藤 弘信 氏
	10/1	雑木の会 谷合 宜明 氏
	10/8	オギハラ酒店 荻原 耕之進 氏
	10/19	プレイワーカー 関戸 博樹 氏
	11/2	環境保全協力員の会エコライフ部会 道具 まゆみ 氏
	11/16	いいことクリエイション 一ノ瀬 要 氏
	11/30	NPO法人成果物健康推進協会 近藤 卓 氏
	12/14	武州里神楽保存会 石山 大隅 氏
	12/21	有限会社アムアーツ 奥山 緑 氏
地域で学ぶ	10/22	地域と笑顔の親の会・絆 小宮 光絵 氏
	11/5	新座栄四丁目商店会 甲田 成広 氏
	12/17	朝霞丸沼芸術の森 須崎 勝茂 氏

3.成果

大学人サミットでの発表の様子（2015.11.8）

地域課題解決型研究（学科横断プロジェクト）　№11

研究課題名	新座市地域住民の全身持久力の測定と運動指導と食事指導
分野	健康・福祉
研究代表者	池川 繁樹（健康栄養学科 教授）
共同研究者	長澤 伸江（食物栄養学科 教授） 松本 晃裕（食物栄養学科 教授） 岡本 節子（食物栄養学科 准教授） 福田 平 （食・健康・栄養研究所非常勤研究員）

1.概要

①運動器の機能向上を目的とする介護予防教室で健康体操・ダンスなどを行っている参加者と、デイサービス利用をしている要介護認定高齢者を対象に、体組成、身体機能（握力、普通歩行速度、Timed up & Go）、健康総合調査アンケート、食事調査などを行った。

②昨年度に引き続き、地域住民の方や十文字フットボールクラブの選手を対象に、運動中の酸素摂取量、心電図、血圧測定を行うことにより、住民の方が健康増進のために運動をする場合に、運動が問題ないかどうかのメディカルチェックを行い、また最大酸素摂取量測定により全身持久力を評価した。

2.取り組み

新座市との連携事業には、「にいざ元気マップ広場」での健康体操や栄養講話、介護予防事業における健康測定などの事業がある。我々のグループでは 今年度は以下の2つの研究を行った。

①運動器の機能向上を目的とする新座市内の介護予防教室で健康体操・ダンスなどを行っている参加者11名と、デイサービス利用をしている要介護認定高齢者7名を対象に、体組成、身体機能（握力、普通歩行速度、Timed up & Go）、健康総合調査アンケート、食事調査などを行った。

②新座市の地域住民の方と十文字フットボールクラブの選手を対象に、全身持久力の測定と運動指導を行った。特に十文字フットボールクラブに所属する大学生9名と高校生10名の全身持久力、体組成などの測定をし、また本学の女子大学生10名との比較を行なった。

平成28年度も①と②の研究を継続する予定だが、さらに症例を集めたり、詳細に検討を行うことによって継続する。その特色としては、インピーダンス法やエコー法による全身の筋肉量、筋肉厚、骨密度、呼吸機能検査、起立時の床反力の測定などを行ない、より詳細な体組成や身体機能の検討を行う予定である。またフットボール部選手では全身持久力などの測定に加えて食事調査も行い、選手の食事指導も行う予定である。

3.成果

①介護予防教室の参加者もすでに握力、大腿部前面筋厚が低下しており、予防群で大腿部site-specificサルコペニアが進行していることなどが明らかとなった。

（成果物;研究報告「介護予防教室参加者の身体機能の検討—要介護移行防止の視点から要介護認定者との比較」、長澤伸江、他、十文字女子大学紀要、46巻、p117-126、2015）

②地域住民の方と十文字フットボールクラブの選手を対象に、最大酸素摂取量、運動時の心拍出量などを測定した（写真参照）。フットボール選手では、高校生の方が大学生よりも最大酸素摂取量が高値をとり、全身持久力が高いことがわかった。またフットボールクラブに所属する大学生の選手の方が、一般の女子大学生より最大酸素摂取量が高値をとった。

これらのデータを利用して健康増進のための運動指導や食事指導を行うことにより、地域住民の健康への関心がさらに高まり、この地域住民全体のヘルスプロモーションを推進させることが可能となると考えられた。また、十文字スポーツクラブの選手には、本事業で測定した最大酸素摂取量、体組成などのデータからトレーニングの質や量の調整を行い、競技力の向上などに役立った。

謝辞:本研究は本学教員である石山隆之准教授（健康栄養学科）、佐々木亮太助手、人間生活学研究科大学院生の古田なつみさん、食物栄養学科池川研究室、長澤研究室、松本研究室の学生に多大な協力を頂きましたので、感謝いたします。

地域志向教育研究地域課題解決型研究（学科横断プロジェクト）　No.12

研究課題名	人材育成方針「Jモデル」開発及び実施のための基礎的研究
分野	授業
研究代表者	大宮 明子（幼児教育学科 准教授）
共同研究者	安達 一寿（メディアコミュニケーション学科 教授） 星野 祐子（文芸文化学科 准教授） 戸塚 勝美（情報企画課）

1.概要

平成27年度は、前年度の成果を本学の実情にあったシステムへと構築することと、その実施のための準備に関する基礎的な研究を行った。

①4月のオリエンテーションで「学びのナビゲーター」を配布・使用

②eポートフォリオを導入済み大学への活用方法の視察

③27年度後期における一部学科での試験運用と生じる問題点の改善方法の検討

④28年度に向けた“地的好奇心”に満ちた学びを行うための「学びのナビゲーター」改訂

2.取り組み

地的好奇心をもった学びを説明するための教材・資料として、12頁にわたる「学びのナビゲーター」を印刷し学生に配布して、4月のオリエンテーションや入門ゼミナールで使用した。使用方法については、各学科に一任した。

平成28年度本学全学科で導入予定のeポートフォリオを既に運用している兵庫教育大学において、その活用事例を教示していただくとともに、導入への工夫や問題点などについての意見交換を行った。

平成27年度後期一部学科での試験運用で生じる問題点等については、キャリア運営委員会での意見も取り入れて検討した。

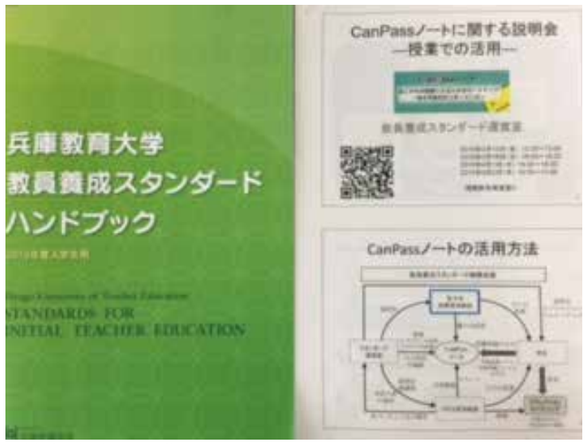
平成28年4月のオリエンテーションでの配布活用をめざし、27年4月に配布した「学びのナビゲーター」の内容について、導入されるeポートフォリオの意義及び使用方法を詳細に説明するものへ改訂した。

3.成果

「学びのナビゲーター」を学生に配布し、オリエンテーションや入門ゼミで使用したことにより、学生にCOC事業を理解させること、および“地的好奇心”をもった学びについて教員が丁寧に説明することができた。さらに、学生の理解や教員の説明しやすさなどを踏まえて、内容を修正することにより、平成28年度のオリエンテーション等の使用に役立ち、学生がeポートフォリオの使用イメージを描きやすくなった。

eポートフォリオの先駆的事例である兵庫教育大学において、学生および教員への説明資料の作成をはじめとして、実際の活用事例を詳細に教示していただくことにより、導入における問題点や実施上のさまざまな工夫を知ることができ、本学での導入に大きな示唆を得、それを踏まえて27年度後期一部学科での試験運用と生じる問題点の改善方法を検討することができた。

改訂した「学びのナビゲーター」はH28年度オリエンテーション時に学内で配布済みである。



兵庫教育大学で教示された学生への説明資料

地域課題解決型研究（学科横断プロジェクト）　No.13

研究課題名	新座市とその周辺地域における農産物の栄養学的側面からの課題解決
分野	その他（健康と環境）
研究代表者	徳野 裕子（健康栄養学科 准教授）
共同研究者	長尾 昭彦（健康栄養学科 教授） 宮川 保之（21世紀教育創生部 教授） 牛山 明　（国立保健医療科学院生活環境衛生部 上席主任研究官）

1.概要

平成26年度、新座市内の農家の方々に農産物の栄養的側面への意識調査を行った。7件の内、重複回答結果として、「作物を生産する上で何を重視しますか。」という質問に、「味　3件、見た目　5件、安全性　3件」とあった。「農産物の硝酸体窒素量については、7件中4件は知らなかった」とあった。農林水産省および環境省は、近年硝酸体窒素の農地・環境中の低減方法の研究を進めている。平成27年度は、硝酸体窒素を正確に測定できる環境を整備した。そして、硝酸体窒素を低減努力されている農家の野菜サンプルを利用し、栽培方法と硝酸態窒素の関係性、および硝酸体窒素が少ない野菜には、抗酸化性、もしくは糖分が高いといった栄養素的要因との関係を検証することを目的とした。

2.取り組み

① 硝酸態窒素を高速液体クロマトグラフィーで測定する。

- 高速液体クロマトグラフィー（日立ELITE LaChrom）を利用し、日本食品標準成分表の硝酸体窒素分析手順に準じ、以下の項目の測定を行った。
- ほうれん草（9月・10月購入）6試料、小松菜（9月購入）　4試料市販されている野菜ジュース　14種類野菜試料溶液の調整方法：野菜試料の可食部をミキサーにかけ5gを量りとり、イオン交換水を加え振り混ぜ抽出を1時間行った後、遠心分離機にかけ、上澄み液を濾過フィルターに通し試料溶液とした。
- 野菜ジュース:野菜ジュース試料を約10mLを量りとり、遠心分離機にかけ、上澄み液を10倍希釈した後、濾過フィルターに通し試料溶液とした。

② ORAC法による抗酸化性の測定を行う。

- 市販のほうれん草・小松菜、直売店のほうれん草・小松菜、窒素肥料を使わない農法のほうれん草・小松菜をORACアッセイキット（コスモ・バイオ株式会社）を利用し、ELISA法（コロナ電気株式会社SH-9000）で分析。
- 試料は、凍結乾燥試料0.05gを、溶媒を利用し、抽出液とした。

③ 本学学園祭（桐華際）にて学生（7人）が、パネルを利用し知識普及と研究発表を行った。

3.成果

① 硝酸態窒素測定について

液体クロマトグラフィーの機器の準備から始まり、市販の硝酸イオン標準液を使用し、測定の信頼性と妥当性の検討を行った上で、試料測定を行った。測定温度48度で、安定して同じ時間に硝酸イオンのピークをとらえることができた。ほうれん草の硝酸態窒素は、1106～3258mg $NO3^-$/kgで値に幅が生じた。小松菜は2563～3682 mg $NO3^-$/kgとほうれん草よりも幅は小さかった。農林水産省（2002-2004年）による平均的ほうれん草は、3070 mg $NO3^-$/kg（208サンプル）であり、小松菜の平均値は、4060 mg $NO3^-$/kg（197サンプル）であった。

② 抗酸化力について

ORACアッセイキットを使用し、L-ORAC（親油性抗酸化能）とH-ORAC（親水性抗酸化能）の測定を行った。その結果、スーパーと直売店のほうれん草（平均53.45μMole TE/L）や小松菜（平均66.32μMole TE/L）のL-ORAC値には差が見られなかったが、窒素肥料不使用農法のほうれん草は、118.94μMole TE/Lで他のほうれん草よりも約2倍の高値を示した。H-ORAC法については、スーパーと直売店のほうれん草（平均112.95μMole TE/L）や小松菜（平均188.91μMole TE/L）、窒素肥料不使用農法のほうれん草は、226.71μMole TE/L、小松菜230.55μMole TE/Lであった。窒素肥料不使用農法の方がやや高値を示した。

③ 桐華祭での研究発表では、多くの方が見にきていただき、表のような感想を残して下さった。

	興味を持った	少し興味を持った	よくわからなった
抗酸化力について	44人	23人	5人
硝酸態窒素について	49人	18人	3人

地域課題解決型研究（学科横断プロジェクト）　№14

研究課題名	学童保育における子どもの安全安心の確保と健全な育成を図るための取り組み
分野	子育て
研究代表者	布施 晴美（人間発達心理学科 教授）
共同研究者	風間 文明（人間発達心理学科 准教授） 加藤 陽子（人間発達心理学科 准教授） 長田 瑞恵（幼児教育学科 准教授） 安田 哲也（人間発達心理学科 助手） 垣見 直哉（新座市学童保育の会事務局長）

1.概要

放課後児童クラブ（学童保育）の平均開設日数は283日、1～3年生は年間1221時間過ごし、学校よりも長い時間を子ども達は過ごしている。学校よりも長い時間を過ごす学童保育という場もまた子どもの健全な発達を考える上で重要な施設であり、学校や家庭との連携も必要とされると考える。こうした現状を鑑み、子どもの健全な発達促進のために、学童保育の側面からの課題を精査し、本学が連携して取り組める課題を検討していきたいと考え、本研究に着手した。27年度は子ども・子育て支援新制度がスタートし、放課後児童クラブ運営指針が策定され、放課後児童支援員認定資格研修も始まり、学童保育領域の大きな変革期であったことから、国が目指す施策を理解し、学童保育従事者との連携や大学の貢献策の手がかりを得るための取り組みをした。

2.取り組み

①新座市の学童保育室の現状に関して情報収集

新座市学童保育の会事務局長および新座市保育室放課後児童支援員から、新座市の学童保育の現状のヒアリングと資料の提供をうけた。学童保育領域の大きな変革期の年であったことから、学童保育関係者向けの公開講座開催に向けて意見交換を実施した。

②学童保育関係者向け公開講座「子ども・子育て支援新制度のなかで学童保育のこれからについて考える～子どもたちの安全安心と健やかや成長のために～」の開催（平成28年2月20日13:00～15:00、9417教室）

放課後児童クラブ運営指針および放課後児童支援員認定資格研修が厚生労働省から示されていたが、その策定に関わってこられた厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課、少子化総合対策室室長補佐の竹中大剛氏の基調講演、および新座市子育て支援課長の鈴木義弘氏を話題提供として講師に招き、公開講座を開催した。

竹中氏・鈴木氏への質疑応答の様子

竹中氏の基調講演の様子

3.成果

公開講座では、51名が参加した。参加者の所属は、新座市の放課後児童支援員が約半数を占め、他に社会福祉協議会職員、市議会議員、学童保育の保護者、本学教員・学生であった。基調講演では、国が目指す学童保育の展望と自治体で推進すべきこと、支援員の処遇改善や質向上に関すること等の話を伺った。話題提供としては、新座市の現状と課題（大規模化と狭隘化、処遇改善等）に対する今後の取り組みが紹介された。参加した支援員からは、国や新座市が学童保育のことをどのように捉え考えているのか直接お話を伺うことで、閉塞気味であった気持ちが明るくなり元気に仕事が取り組めそうだという感想がきかれた。講座内容の評価として4.43（SD 0.56）と概ね高評価であり、学びの多い有意義な時間となった。公開講座を開催したことで新座市内の学童保育室や社会福祉協議会との関係性をつくることもできた。新座市学童保育については、本研究課題に関わる今後の調査研究の協力も得ることができた。

（成果物:公開講座「子ども・子育て支援新制度のなかで学童保育のこれからについて考える～子どもたちの安全安心と健やかや成長のために～」報告書）

地域課題解決型研究（学科横断プロジェクト）　№15

研究課題名	乳幼児を子育て中の保育者が行うピア・サポートとしての子育て支援事業「＋（プラス）ママの子育てサロン」開催と有効性の検討
分野	子育て
研究代表者	上垣内 伸子（幼児教育学科 教授）
共同研究者	金勝 裕子（幼児教育学科 教授）、向井 美穂（同学科 准教授）、鈴木 晴子（同学科 講師）、横井 紘子（同学科 講師）、渡邊 孝枝（同学科 助教） 近藤 有紀子（教職支援課員）、松野 さおり（同課員） 中谷 えりか（十文字女子大附属幼稚園教諭） 協力者:近隣在住の幼児教育学科03年度入学の卒業生7名（古島 繭子・戸塚綾希・高木友子・山口 美弥・松尾 香織・上妻 祥子・内村 沙耶香）

1.概要

乳幼児を持つ親の育児不安傾向や育児力そのものの弱体化が指摘されて久しい。乳幼児の発達や世話の知識・技能の乏しさにより、乳幼児と遊ぶことを楽しんだり、子育てに喜びを感じるという経験が、家庭で親子が向き合うだけの生活の中では得られにくいという現実がある。そのような孤立しがちな親子にとって、高い保育実践力（子どもと遊び子育てを楽しむ力）を持った子育て仲間との交流は、子育てを楽しみ育児力の獲得につながる意義ある体験となる。

本研究では、幼児教育学科卒業生のうち、現在家庭で子育て中の保育経験者が、幼稚園教諭や保育士としてこれまで培ってきた保育実践力（乳幼児と遊んだり適切な世話をしたり、母親の話し相手になったり助言するなど）を活かして行う、新座市とその近隣に住む乳幼児とその親の子育ち・子育て支援事業を構想した。大学が卒業生のキャリアを活用しさらにそのエンパワメントを支えつつ、地域の子育てに貢献する子育て支援事業は、他に例を見ない新しい試みであり、幼児教育学科教職員と卒業生が共同で企画、開催し、その有効性を検討した。

2.取り組み

①平成26年度に試行的に実施したピア・サポート形式の子育て支援事業の結果の分析と課題の整理

②近隣地域の子育て支援センター見学（4回、平成27年6～7月、平成28年1月）

主に環境構成（誘いかけなどの掲示、安全面の配慮など）に焦点を当てて見学を行う。

③「プラスママの子育てサロン」の計画立案と会場の環境設定、地域の子育て親子への参加呼びかけ（会議開催3回、平成28年2月。本学同窓会のサイト／FB掲載）

④「プラスママの子育てサロン」の開催・終了後のカンファレンス（3回、平成28年2～3月）

参加者（1回目:参加親子4組、スタッフ親子5組、子ども総数13人。2回目:参加6組、スタッフ6組、子ども15人。3回目:参加11組、スタッフ5組、子ども19人）

⑤参加者へのインタビュー

サロンでの子どもの動きや他の子どもたちとの関わりを見て気づいたこと、参加中の自分の気づきなどについて、インフォーマルなインタビューを行い、本活動の支援特性について考察

サロン時の様子　2016.3.11

3.成果

子育てサロンは、10:30～15:00の開催で、卒業生スタッフは10:00より準備作業開始、終了後16:00まで片づけと反省会を行った。卒業生支援スタッフは7名（子ども9名）、大学側のスタッフ7名（子ども2名）、3回の子育てサロンへの周辺地域の親子の参加はのべ21組（全回参加2組）であった。保育経験者である卒業生の支援者としての対応には、言葉かけや動き、環境構成などにおいて保育者としての専門性が発揮されており、子育て中の保育経験者による支援の質の高さがあらためて認識された。参加者も、新座、和光、朝霞市在住者の参加など、幼児教育学科卒業生以外への広がりがみられ、地域に対する支援事業としての役割も見え始めた。

今後の課題として、授業期間内に開催することで学生の子育て支援演習としての活用の検討が必要である。

地域課題解決型研究（学科横断プロジェクト）　№16

研究課題名	プレプラ@十文字の森
分野	子育て
研究代表者	星野 敦子（児童教育学科教授）
共同研究者	狩野 浩二（児童教育学科 教授） 坂本 純子（NPO法人新座子育てネットワーク代表） 市来 陽子（新座市本多児童センター 館長代理） 関戸 博樹（プレイワーカー） 柳澤 貞夫（総務部長） 木名瀬 正行（財務部長） 小川 哲男（財務部管財課）

1.概要

ヨーロッパで生まれ、現在わが国でも普及しつつある「冒険遊び場」「プレイパーク」は、自然の中で子どもの外遊びを促し、自主性や判断力、コミュニケーション能力などを育む高い効果が認められている。

新座を拠点に「ソトプレプロジェクト」として、冒険遊び場の普及活動を展開しているNPO法人新座子育てネットワークと連携し、本学フィールドアスレチック跡地において「プレプラ」（十文字でのソトプレ）事業を展開した。今年度は指導にあたる地域・学生スタッフの研修事業を2回、ならびに近隣の幼児、小学生を対象とした「プレプラ」活動を4回実施し、活動のまとめとなる「ソトプレフォーラム」を開催した。

2.取り組み

① プレプラ研修（10/31、11/7）のべ参加者　学生4名　地域の方15名

プレプラの実施に向けて活動概要や注意事項、また遊びの意味を考える研修を実施した。

② プレプラの実施（12/5,12,19,26）計4回

十文字の森を利用して、ソトプレ活動「プレプラ」を開催した。市内の小学校にチラシを配り、参加者を募った。回を重ねるごとに参加者が増加し、4回の活動におけるのべ参加人数は、子ども215人、大人125人（うちボランティア44人、学生20人）となった。子どもたちは竹を切ったり、穴を掘ったり、炭火でマシュマロを焼いたり、木につったターザンロープで遊んだり‥‥と自由に遊びを展開していた。

③ ソトプレフォーラム（2/7）

十文字学園女子大学において近隣地域での実践者を招いて「ソトプレフォーラム」を開催した。学生に対する教育効果についての報告を行い、パネルディスカッションでは各団体の活動の経緯や行政との関係などが紹介された。新座市におけるソトプレ活動の展開に対し、大いに示唆を与える内容となった。

3.成果

- 参加した学生の感想から、コミュニケーション力の向上、子どもとの関わり方の学び、異世代交流の効果による行動力の向上があげられた。
- 参加者アンケートからは、子どもの変化について、遊びの多様化による創造力の育成、ものづくりの楽しさの実感、コミュニケーション力の向上、自然の中での遊び方の会得などがあげられた。
- 「ソトプレフォーラム」において、プレイパークの多様な効果が確認され行政との連携による政策的な展開が重要であることが明らかとなった。
- プレプラの実践は新座における今後のプレイパークの展開において、行政、大学、地域団体等がどのような連携を図るべきかを考えるうえで1つの試金石となったといえるだろう。

地域課題解決型研究（学科横断プロジェクト）　№17

研究課題名	恋する大学改革 partⅡ　～地域貢献＋（プラス）教育改革～
分野	授業
研究代表者	石川 敬史（文芸文化学科 准教授）
共同研究者	落合 真裕（文芸文化学科 准教授） 加藤 亮介（メディアコミュニケーション学科 講師） 荒川 仁志（学長特命課長） 神保 正典（会計課） 内野 真里香（学生募集課）

1.概要

前年度（平成26年度）の本研究では、大学教職員の力量形成の「場」が大学の敷地内に留まらず、大学が位置している地域にも存在することを再発見し、地域貢献を射程に入れた大学改革を教職員協働で取り組む基盤づくりを目的とした。その成果として、持続的に学ぶ「場」の構築（定期的な学習会）、さらには、各構成員における個々の現場の業務を踏まえた本学の地域貢献・大学改革の意義を共に学び合うことができた。

本年度（平成27年度）は、こうした前年度の実績を踏まえながら、本共同研究者個々人の部署や授業科目の課題を尊重し、地域を「場」とした学生の主体的な学びを支援する教育手法（教育プログラム設計、組織的基盤等）の調査を実施し、共同研究者の課題を解決することを目的とした。

2.取り組み

本年度の取り組みは、以下の3点に整理することができる。

⑴「大学生の中退予防の対策について」講演会、山本繁氏（NPO法人NEWNEWVERY理事長）、平成27年9月11日（金）15:30-17:00、参加者17名（教職員）

大学生の中退予防対策について、単なる学生生活指導に矮小化することなく、教育・授業との関連性をはじめ、IRなどの多方面の学生データの活用方法やデータの視角など、大学の教育改革の視点でお話いただいた。

⑵彩の国さいたま芸術劇場の見学（参加者:落合真裕、石川敬史、文芸文化学科1年生14名（後期3限「基礎演習」科目履修学生））、平成27年12月10日（木）彩の国さいたま芸術劇場の施設見学とともに、複数の舞台装置や演劇プログラムの状況、舞台芸術資料室の利用状況や蔵書構成等を見学・調査した。さらには、近年行われているさいたま市内の小中学校等への教育プログラム（芸術教育、ダンス・舞台教育など）の動向を聞くことができた。

⑶追手門学院大学の見学（参加者:安達一寿、落合真裕、加藤亮介、荒川仁志、神保正典、内野真里香、石川敬史）、平成28年2月8日（月）追手門学院大学における①地域貢献活動、②大学教育改革、③教育改革の組織（教育開発機構の活動、AP、GPなどの補助金取得体制等）、④高大接続と入試改革（アサーティブ入試等）、⑤大学経営改革とガバナンスなどについて、聞き取り・施設見学を実施した。見学に先立ち、追手門学院大学の関係記事を収集し、本共同研究者内にて事前に学習会を開催した（平成28年1月7日）。プロジェクト構成個々人の課題を踏まえ、追手門学院大学における大学教育改革の動向を共有し、質問事項を整理した。

3.成果

⑴「大学生の中退予防対策について」山本繁氏講演会

終了後のアンケートより、参加者全員が「大変満足」、「満足」と回答した。記述覧には、「今のポストで何が出来るか考えるきっかけになった」、「教員の対応（授業含め）が中退要因となっていくこと、教員のFDの必要性」、「入学前に入念な準備を開始することが重要」など、本学の教育改革の重要性と課題を共有

⑵彩の国さいたま芸術劇場の見学

彩の国さいたま芸術劇場の見学や教育プログラムの聞き取りから、本学文芸文化学科の完成年度に向けて、舞台・芸術教育プログラム（ゼミ・演習等）の検討に結びつけることができた。同時に、舞台芸術資料室の見学から図書館における地域資料や専門資料の収集や、地域の図書館ネットワーク構築の意義を検討し、正課内外の地域課題を踏まえた教育プログラムの改善（司書課程等）につなぐことができた。

⑶追手門学院大学の見学

職員の教育（SD）・人材育成と連続性のある入試改革（アサーティブ入試等）や、教員の授業支援やFDとの連続性のある共通教育改革、情報システムを活用した教育プログラムなど、「組織」としてどのように大学改革を「実行」するのかについて、本共同研究者の個々人の課題を踏まえてながら、検討することができた。教職員個々人の足元の仕事（業務）が学生支援に連続すると同時に、営利機関ではない高等教育機関に勤務しているという意義を踏まえ、職場（大学）の中で教育への実践的な関わり方を共有することができた。

地域課題解決型研究（学科横断プロジェクト）　№18

研究課題名	地域患者の治療における有用なレシピ開発と食生活調査
分野	健康
研究代表者	和田 安代（食物栄養学科 専任講師）
共同研究者	小林 三智子（食物栄養学科 教授） 布施 晴美（人間発達心理学科 教授） 松本 晃裕（食物栄養学科 教授） 鴨下 澄子（食物栄養学科 助手） 井澤 綾子（第3学年、臨床栄養学研究室） 内田 奈摘美（第3学年、臨床栄養学研究室） 後藤 美紅（第3学年、臨床栄養学研究室） 高瀬 真紀（第3学年、臨床栄養学研究室） 中村 麗奈（第3学年、臨床栄養学研究室） 野口 結真（第3学年、臨床栄養学研究室） 藤原 知美（第3学年、臨床栄養学研究室） 古田 桃子（第3学年、臨床栄養学研究室）

1.概要

炎症性腸疾患は、潰瘍性大腸炎とクローン病に代表される消化管に炎症が起きる難治性疾患である。薬物療法だけでなく食事療法や栄養療法は極めて重要であり、特に栄養療法に関しては本邦で主に行われ、成分栄養剤や消化態栄養剤などの各種栄養剤が用いられる。しかしながら、患者が若年であることで多様な食習慣を好む傾向にあること、さらに栄養剤の服用方法や味などが原因で必ずしもコンプライアンスが良いとはいえない。そこで、炎症性腸疾患患者を対象に、治療に有用な料理開発や栄養剤に関する調査を行い、より有用な治療につなげる。

一方、小児1型糖尿病とはインスリン分泌の絶対枯渇が起因となって発症する疾患であり、小児から青年期での発症が多い。血糖コントロール等の治療を目的に患児を対象にした教育キャンプが毎年行われており、そこで栄養素摂取量および食習慣に関する調査を行い、治療や病態などに関して解析を行う。

こ　れらの結果は貴重なデータベース並びに報告や指導に用いた媒体は資料となるため、埼玉地域の病院や学校などにも有用な情報を提供することが可能であり、積極的に地域へ情報提供し、貢献していきたいと考えている。また、新座市の食育計画の一環として患者やその保護者を対象にセミナーや疾患に対する料理教室などの開催も検討している。

2.取り組み

平成27年5月	講論開始
平成27年5月～8月	レシピ本調査、レシピコンセプト決定、各種手続き、 レシピ開発開始、調査方法検討、各種手続き、調査
平成27年9月～平成28年2月	レシピ開発、調査、データまとめ
平成28年2月～3月	レシピ開発、データまとめ
平成28年4月以降	データまとめ、学会発表、論文発表、書籍化など

3.成果

炎症性腸疾患患者における治療に有用なレシピ開発および栄養剤に関する調査等は、より良い治療を目指す礎となると考えられる。治療に有用な栄養素や形態などを考慮したレシピだけでなく、栄養剤を用いたレシピの開発を続けることで、栄養療法のコンプライアンス向上を目指すことが出来ると考えられる。今回我々は、炎症性腸疾患患者に適するレシピ開発と、特殊食品を用いたより発展的なレシピ開発を行った。炎症性腸疾患における栄養療法は主に日本で行われている上、この疾患での栄養に関する専門家は日本においても非常に少ないため、本研究の発信意義は非常に大きいと考えられる。得られた結果は埼玉地域の病院、あるいは学校などに対して貢献できるものであるため、今後も積極的に地域に貢献していきたいと考えている。

小児1型糖尿病患者を対象とした教育キャンプについても、食事摂取量、栄養素等摂取量調査等を行い、より良い血糖コントロールや病態の安定に寄与するデータとなった。さらに今後は患者各々の病態等との関連を解析していきたい。これらの結果は貴重なデータベースとなり、かつ授業や調理実習などで用いた資料や媒体、さらに提供した食事のレシピなどは当キャンプだけでなく、地域の病院や学校に貢献できるものであると考えるため、資料やアイディア提供など積極的に地域に貢献、また、新座市において、病院や保健所とも連携し、セミナーや料理教室なども開催していきたいと考えている。

地域課題解決型研究（学科横断プロジェクト）　№19

研究課題名	地域アミロイドーシス患者におけるカテキンの治療および予後に対する効果
分野	健康
研究代表者	松本 晃裕（食物栄養学科 教授）
共同研究者	和田 安代（食物栄養学科 専任講師） 後藤 美紅（食物栄養学科 第3学年） 飯塚 聡介（日本赤十字社医療センター血液内科専門医） 鈴木 憲史（日本赤十字社医療センター血液内科部長、副院長）

1.概要

アミロイドーシスは、アミロイドとよばれる不溶性たんぱく質が全身の臓器に沈着する稀な疾患で、日本では難病指定されており予後は不良である。治療法としては、造血幹細胞移植の自己末梢血幹細胞移植などであるが、適用には慎重な判断が必要となる。また、様々な最新治療が試みられている。

一方で、緑茶に含まれるカテキンは、これまで抗酸化作用や抗がん作用などあらゆる機能性が示されてきている。そこで今回、濃縮したカテキンを患者に投与し、予後や治療成績にどのように影響を与えるかを検討した。

共同研究先の病院の血液内科は、アミロイドーシスの患者数、治療成績ともに最大級であり、十分な研究の症例数を確保できると考えられた。また、カテキンカプセルに関しては、企業に依頼し製造した。

これらの結果は稀な疾患であるが故に特に貴重なデータベース並びに報告や指導に用いた媒体は資料となるため、新座市の病院や保健所などにも貢献できる材料となるため、積極的に地域への情報提供などを行っていきたいと考えている。

2.取り組み

本研究は2015年の約5か月の間に日本赤十字社医療センターを受診した57人のAL アミロイドーシスの患者を対象とした。患者を2:1の割合で内服群と観察群にランダムに割り当てた。内服群に割り当てられた患者は、既に先行している治療法に追加する形で、濃縮したカテキンカプセルの投薬を行った。観察期間は介入開始から6か月間に設定した。

全ての患者を対象に、介入前のスクリーニング時、介入後3か月後、6か月後の計3回の評価検査を行った。血液検査、尿検査、心臓超音波検査を施行した。得られた患者生化学検査値の集約、解析、病棟回診や血液内科カンファレンスの参加を行い、論文の作成を行った。

2015年5月～8月　:患者エントリー、介入開始
2015年12月　:介入継続、データ集計、病棟回診、血液内科カンファレンス参加
2016年1月～3月　:介入継続、データ集計、データ解析、論文作成

3.成果

57人のうち、6か月間のフォローアップできた患者は内服群で30人、観察群で18人であった。

内服群のうちの4人は摂取による体調不良のため内服中止となったが、このうち2人は回復したためカテキンの再投与を行い6ヶ月間のフォローアップを終了した。カテキンの内服量を減量したのは2人であり、全員嘔気、下痢、腹痛が理由であった。重篤な肝機能障害を合併した患者はいなかった。

現在、過剰な酸化ストレスが細胞に与えられることで、臓器障害に陥るという仮説が提唱されている。一方でカテキンは抗酸化作用を有し、実験動物にでは酸化ストレスの軽減とともに臓器障害の改善が示唆されている。今回の研究では内服群において、細胞における酸化ストレスには変化を認めなかったが、抗酸化作用は統計学的に有意に減少した。

アミロイドーシス患者におけるカテキンの治療および予後に対する効果について検討を行うことにより、より良い治療を目指す礎となると考えられる。アミロイドーシスは非常にまれな疾患であるため、この疾患に関する研究の発信意義は非常に大きいと考えられる。

本研究結果は、今後、学会発表や論文発表を通じ社会に貢献していく予定である。得られた結果を病院、あるいは地域の学校などに対しても貢献できるものであると考えるため、積極的に新座市の病院や保健所などと連携し貢献していきたいと考えている。

地域課題解決型研究（学科横断プロジェクト）　No.20

研究課題名	子ども元気プロジェクト2015
分野	子育て
研究代表者	鈴木 康弘（幼児教育学科 准教授）
共同研究者	宮野 周（幼児教育学科 准教授） 薮崎 伸一郎（幼児教育学科 講師）

1.概要

社会や家庭の教育力低下が懸念され、幼稚園や保育所が地域の子育て支援における中心的な役割を担うことが期待されるようになって久しい。一方、地域の財政基盤は脆弱となり、教育（子育て支援）への財政的資源投入はますます難しくなることが予想される。このような状況の中、本プロジェクトは、地域の財政的援助に頼らずに、子育てを中心とした豊かな社会システムを構築していくことを目的として計画された。最終的には、本プロジェクトに関わる者すべて（子ども、保護者、学生、幼稚園教諭、保育士、地域住民等）が、それぞれのレベルで生活の質を向上できるためのシステムを考案し、持続可能社会に向けたモデル事業となることを目指している。

本年度は、プロジェクトに関わる保護者や学生についてデータを収集し、保護者や学生の育ちを伴う子育て支援システムのあり方について検討を行った。

2.取り組み

①第1回子ども元気プロジェクト（造形遊び）

2015年9月19日・附属幼稚園で実施　参加者親子50名　参加学生10名

造形遊びプロジェクトでは子どもが土粘土で遊ぶ姿を保護者がそばで見守り声かけをしながら、普段は気がつかない子どもの遊びへの新たな発見・理解につなげていくような活動を行った。

②第2回子ども元気プロジェクト（音楽遊び）

2015年 10月17日・附属幼稚園で実施　参加者親子34名　参加学生 8名

音楽遊びプロジェクトでは、保育の場で用いられている『アブラハムの子』を使った新たな歌あそびの創造を試みた。

③第3回子ども元気プロジェクト（運動遊び）

2015年11月21日・附属幼稚園で実施　参加者親子30名　参加学生14名

第1回運動遊びプロジェクトでは、子どもがイメージを豊かにして主体的に動けるようになる（動いてみたいと感じられる）ための工夫について検討を行った。

④第4回子ども元気プロジェクト（運動遊び）

2015年12月12日・附属幼稚園で実施　参加者親子34名　参加学生15名

第2回運動遊びプロジェクトでは、保護者の性別、運動経験、運動への意識などにより運動遊び場面での子どもへの言葉かけがどのように異なるかについて検討を行った。

3.成果

学生は、「プロジェクト前の様々な準備」、「プロジェクト当日の環境構成と援助」、「プロジェクト実施後の振り返り」を通して、子どもと保護者を対象とした活動に関する実践的な学びを深める機会を得た。保護者の育ちを援助する役割が保育者に期待されている中、学生時代に保護者と子どもの関わり方について実践を通して学んだことは貴重な経験となった。また、プログラム的な子育て支援活動の中で、保護者が子どもにどのように関わる傾向があるのかについて、データを収集し分析を行った。本研究の結果をもとに、保護者の育ちにつながるプロジェクトのあり方について検討を続けていきたい。今回の成果をベースとして、プロジェクトシステムを洗練させるとともに、プロジェクトに関わるステークホルダーを広げ、地域における持続可能な子育て支援システムのあり方を示すことが本プロジェクトの最終的な目標である。

なお、研究成果は下記の通り学会でのポスター発表として公表した。

①「運動遊び場面における保護者の子どもへの言葉かけについて」

日本発育発達学会第14回大会 ポスター発表（神戸大学　2016.3.5）

②「子ども元気プロジェクトの取り組み ～育ち合う関係の構築に向けて～」

日本保育学会第69回大会 ポスター発表（東京学芸大学　2016.5.7）

地域課題解決型研究（若手スタートアップ支援）　No.21

研究課題名	新座市の児童生徒の喫煙開始防止に向けた指導者育成
分野	健康
研究代表者	齋藤 麗子（健康管理センター長）
共同研究者	高橋 洋昭（新座市教育委員会指導課） 今江 寿美代（新座市養護教諭小学校部会） 原田 晴美（新座市養護教諭中学校部会）

1.概要

昨年度は市役所会議室にて小学校養護部会、中学校養護部会合同部会の研修会に講師として申請者が参加し、子どもの周囲のタバコ環境について講義した。児童生徒が視聴するDVDも小中各部会に2部ずつ配布した。DVDの管理は学務課とした。研修会で様々な問題を養護教諭たちと共有できたので、今年度は各学校の自主性、独創性を重視しながらプロジェクトを進めていく。学校保健委員会への参加も計画し、養護教諭のみならず、体育の教師、生徒指導の教師などの経験や質問も聞き、児童生徒が理解しやすい喫煙開始防止授業を作り上げていく。

2.取組み

学校現場では生徒指導に有効な媒体を望んでいたため、「タバコは全身病」という写真が豊富な最新のテキストを新座市内全小中学校に配布した。年度の終わりにこの本の活用について調査したところ、「生徒指導に使用した」は10校、使用していないは11校、その他3校、その時の「生徒の反応有り」は10校すべてであった。今年度も養護教諭の希望があり、実践的研修を予定したが指導課の日程調整で終わってしまった。

昨年市の指導室に寄付した小中学校向けDVDの一年半後の使用状況を尋ねたところ使用実態がゼロで包装もあけられていない状況が明らかとなった。現場の体育の先生方がDVDの存在を知らなかったことがこれで理解できた。学校現場への周知に問題があると思える。

市立第2中学校保健委員会に出席しパワーポイントを使用して生徒代表、保護者、校長、校医、全教員にタバコ問題を提起した。禁煙するのは苦労するので、初めから吸わない重要性を皆が共通認識し、今後各教科で取り組むことが確認された。保健委員が生徒のタバコに関する意識調査を実施してまとめて発表したことで、自分たち自身の問題であることの認識が深まったようであった。

3.成果

児童生徒のタバコに関する正しい知識の獲得と将来吸わない選択をする子どもの増加。その次の薬物や飲酒などの依存製品を避ける子どもの増加。喫煙についての知識が得られることで、教師や保護者の喫煙率の低下による児童・生徒の受動喫煙暴露の低下が望まれる。

以下は学校保健委員会に参加した教員、保護者、生徒の感想の一部抜粋

- ご講演いただいて、より詳しく喫煙の恐ろしさを知ることができました。特に、青少年をたばこ依存にする“タバコトリック”については、子どもたちに是非伝えておかなければならないことばかりで、たばこを1本吸ってしまうことの重みを感じました。喫煙率の低下や喫煙者を減らす対策が多くとられている中で、まだまだ喫煙を開始しやすい環境があるのは事実だと思います。私は、ただ、“喫煙はダメ”と伝えていくのではなく、子どもたちが喫煙をしてしまう心理的背景にも目を向けて、子どもたちをたばこの害から守っていきたいと思いました。（教員）
- やはり親が子供の前ですわない、タバコを辞めるのが一番の教育なのかなと思います。（保護者）
- 今の二中ではタバコをすう人が1人もいないと聞きとても安心しました。（私たちの中学の頃はもっとあれていたかも…）これからも中学校、親、地域と連携して、子供達を守っていきたいです。（保護者）
- タバコぜったいに吸いたくないと思いました。僕は、タバコと覚せい剤、ドラッグは関係ないと思っていました。でも、タバコからそういうものに発展してくのだと聞いてびっくりしました。（生徒）
- けむりから、子供や家族、また、まったく知らない人に、影響してしまうから、1人でも吸う人が減ってほしいと思います。少しずつでも、こういう話が広まってほしいです。吸うと依存して、1回だけでは、やめられなくなると思うので、誘われても、絶対に断り、健康に過ごしたいと思います。（生徒）

参加者への問題提起は図られたが、今後は各学校に広まることを期待する。

地域課題解決型研究（若手スタートアップ支援）　No.22

研究課題名	新座市における地域文化アーカイブズの創造
分野	歴史・文化
研究代表者	小林 実（文芸文化学科 准教授）
共同研究者	安達 一寿（副学長・メディアコミュニケーション学科 教授） 大熊 やすこ（総務部企画評価課）、村石 仁美（総務部会計課）、笠木 貴和子（学生支援部長）、瀬川 美智子（総務部企画評価課課長）、佐藤 吉朗（総務部人事課長）、井頭 かおる（総務部人事課）、乗田 真理子（総務部人事課）

1.概要

新座市に関連する風物を題材とするカルタを制作する。

新座市の歴史、文化財を調査するだけではなく、市民の暮らしに根づいた「風景」も題材にすることで、歴史の継承だけでなく新興住宅地の文化財化を図る。

2.取り組み

新座市には、平林寺をはじめとして観光資源として活用されている施設、遺跡等の名所旧跡が複数存在しており、市の観光事業やPRに利用されている。ただし、それらの特定の名所のみをもって「新座」という街の姿が代表されるわけではなく、旧来からの農地及びその周囲の景観や、新興住宅地の様子も含めることで、より実態に即した「新座」の姿が描き出されるはずである。そうした観点から、新座にくらす人々（住民、勤務者等）の生活感を意識した景観表象の抽出を模索することに取り組んだ。

⑴新座市の地誌的情報の研究（新座市史等資料の精査）

昨年度から収集している資料の検討を継続した。

⑵授業との連携によるフォトエッセイ制作

カルタ制作に向けた景観選定の試み。新座の生活者でもある学生・教職員の目線から、風景の発見と、そこから生み出される文学的創造の実験として、文芸文化学科1年生の授業「基礎演習」と連携。大学周辺及び平林寺の散策、景観撮影、フォトエッセイの作成を行った。

①野火止3丁目付近散策

②平林寺敷地散策撮影

③菅沢2丁目 大学隣の雑木林撮影

3.成果

大学周辺を数か所散策したところ、当然のことながら、地域によって代表されるべき景観に違いがあり、それぞれを丁寧に見ていくべきことで、新たな発見があるだろうということが予想された。

またいわゆる名所旧跡に絞らずとも、日常的な景色に観察者の言葉を付すことで、新たに切り取られたベストスポットとして、新たな「景観」を創出できることも確認された。これらを応用することで、地域住民の目線から「新座」を描き出し、地域PRの可能性が広がることが見込まれる。

（成果物:『フォトエッセイ新座散策～十文字学園女子大学の周辺～』

地域課題解決型研究（若手スタートアップ支援）　No.23

研究課題名	埼玉クイズ王予選会場を誘致し地域を大いに学ぶ
分野	その他（広報）
研究代表者	石野 榮一（メディアコミュニケーション学科 教授）
共同研究者	石川 敬史（文芸文化学科 教授） 名塚 清（地域連携コーディネーター） 福島 聡（プラスキャンパスプロデューサー） 学術情報部、広報部、地域連携推進課 新座市役所市政情報課、経済観光部 埼玉県産業労働部観光課

1.概要

クイズを通して埼玉の魅力を知り、郷土埼玉への愛着度と関心を高めることを目的した「埼玉クイズ王」（主催・埼玉クイズ王決定戦実行委員会）が今年4回目を迎える。同県内3カ所を予定する予選会場の一つを本学に誘致し、予選会盛り上げに一役買う活動を通して、新座市をはじめとした地域との結びつきを強める。併せて新座市近隣の自治体や地域住民を巻き込んで学生を交えた出場グループを組織し、学生が埼玉について学習する機会を確保することで郷土・地域への関心を深める。

2.取り組み

- ライターデザイン同好会が千問近くの過去問についてインターネット、書籍を使い解説を試みた。そのうち約500問を3部門で編集し、冊子「私家版埼玉クイズ王決定戦　過去問解説」を制作した。
- 予選会場に決定したことを受け、学生がデザインしたPR用チラシを作成し、関係先に配布した。
- 記念アリーナを予選会場とし、地域連携推進課、総務課などの協力を得て予定通りの進行ができた。

3.成果

- 過去問解説冊子は300部作成。埼玉県労働商工部長が同好会メンバーに直接感謝の言葉を伝えたほか、大会関係者や新座市などの近隣自治体、参加者から評価の声が届いた。また、マスコミでも取り上げられ、埼玉県内にとどまらず都内や全国から配布希望があり、全員に配布できなかった。
- 予選当日は、新座市をはじめ近隣から300名近くの参加者があり、大学のPRができた。
- 学内からも学生チーム、教職員チームが10組以上参加し、2組が最終ゲームまで進出。惜しくも決勝戦進出は逃したが、予選会場の面目を保つことができた。
- 須田新座市長、横須賀学長にあいさつをいただいた。学内団体（ライターデザイン同好会、J和太鼓部）が参加し、大会盛り上げ、大学PRに取り組んだ。

地域課題解決型研究（若手スタートアップ支援）　No.24

研究課題名	各種団体の広報誌とのコラボレーション
分野	その他（広報）
研究代表者	石野 榮一（メディアコミュニケーション学科 教授）
共同研究者	大西 正行（メディアコミュニケーション学科 教授） 名塚 清（地域連携コーディネーター） 福島 聡（プラスキャンパスプロデューサー）

1.概要

新座市役所発行の「広報にいざ」、新座商工会会報誌「会員のひろば」、新座シルバー人材センター広報誌「ゆうゆう通信」等、新座市内の各種団体が発行する広報誌と本学学生がコラボレーションし、広報誌の一部について編集を担当し、地域を学ぶ機会にするとともに広報（企業、行政）を学ぶ機会とする。

2.取り組み

- 平成27年度後期「広報論」受講学生が広報理論を学んだ。新座市市政情報課職員が実際の広報誌を使いながら工夫している点、苦労している点などを授業で解説した。
- 本学独自の地域を学ぶテキスト「いいね!にいざ」の2016年度版の取材・編集に受講学生が取り組んだ。
- 2016年特集として、「女性耀く　わがまち新座」をテーマに、市内で活動する5名の女性にインタビューを実施。また、須田健治新座市長に新座市の女性政策についてインタビューした。新座市の子育てについて文部科学大臣表彰を取り上げた。新座市が発行した「新座ブランド認定」を取り上げ、紹介した。

3.成果

- 実際の広報誌づくりにかかわることで広報誌の役割を学ぶことができた。同時に新座市の歴史、経済、現代社会、人を通して地域をより深く理解する一助となった。
- 「いいね!にいざ2016年度版」は1500部制作。平成27年度新入生全員と教職員に配布した。また、新座市が職員研修で補助資料に使用するなど評価もされている。

地域課題解決型研究（若手スタートアップ支援）　No.25

研究課題名	「健康と運動」から新座市民ロードレースへ
分野	健康・福祉
研究代表者	平田 智秋（人間発達心理学科 教授）
共同研究者	

1.概要

後期共通科目（十文字学）「健康と運動」においてトレーニングを重ね、科目受講学生や有志学生で2016年1月に開催される第49回新座市民ロードレースに参加する。

新座市民ロードレースは歴史が長く、新座市民が参加・運営する、新座市の名物大会である。大会開催地も本学から近い。この大会に学生が参加すれば、新座市への愛着を深める良い機会となるだろう。

2015年度から新設された共通科目（十文字学）「健康と運動」（後期）は、筋力トレーニングと有酸素運動の理論と実践により、自律的な健康づくりを標榜する科目である。新座市民ロードレースへの参加は、科目内での取り組みの集大成としても、良い材料となる。なお、この大会は距離も10.55kmと手頃である。

2.取り組み

(a)学内外でのトレーニング:2015年度の「健康と運動（後期・平田担当分）」の受講者全員で、9月から学内でのジョギングを積み始め、11月23日からは平林寺や陸上競技場の周辺など,学外でもトレーニングを行った。天候にも阻まれ6回しか学外ランニングはできなかったが（それぞれ5.3km, 5.7km, 7.4km, 5.7km, 8.1km, 6.1km）、同じ曜日・時間に野火止用水沿いのコースを走ったので、近隣のみなさんにも顔を覚えていただいた。

(b)新座市民ロードレース出走:2016年1月31日に開催された第49回新座市民ロードレースに、受講生やTAなど出走者25名全員が10.55kmを完走した。学生がエントリーした一般女子の部の出走者は39名であり、その過半数を本学の学生が占めたことになる。なお、本学学生での最高位は2位で、10位までの入賞者のうち5名が本学学生であった。

レース後の集合写真

3.成果

なによりも全員完走とそれに伴う達成感が最大の成果である。レース後のレポートからは「沿道の応援が本当に心強くて、心の中で『ありがとう』と思いながら、頷きながら走りました」「色んな方からがんばれ!あと少しだよ!など声をかけてくださり、応援されることがこんなに励みになり、がんばる力になることが分かりました。自分との戦い、そして人の温かみに触れあえて今日はすごく楽しかったです。」「結果は遅い方だったけど、地域の人の応援、仲間と一緒に走っているということを感じて走りきりました。途中くじけそうになってすごく辛かったけど今までの努力を思い出して頑張れました」「ロードレースで走っていると,まわりの人が応援してくれたりしていつもより楽しくしかもペースも早く走れました」「走っている途中の街の人の応援がすごく力になりました!」「道で応援してくださった地域の方の声があつたからくじけずに完走できました。」など、地域の方々からの声援を意気に感じた内容がみられた。これを好機とし、新座に深い愛着を持つ学生が増えることを願う。

地域課題解決型研究（若手スタートアップ支援）　№26

研究課題名	新座市「フシギマップ」プロジェクト
分野	歴史・文化
研究代表者	東畑 開人（人間発達心理学科 専任講師）
共同研究者	

1.概要

本プロジェクトは、学生は心理学研究法を学ぶと同時に、地域連携や社会的活動の技能を学ぶことを目標として、加えて地域振興に貢献することを目指したものである。

具体的には、新座市教育委員会生涯学習スポーツ課と協力しながら、市内の伝説や伝承について調査を行い、フィールドワークを行った。その上で、岩手県遠野市などの不思議現象を生かした町おこしプロジェクトを参考にして、新座市の「フシギマップ」を作成し、頒布した。このような取り組みは新聞やテレビ、ラジオなどにも取り上げられ、それを通じて学生たちは社会に参画することの意義と方法を学んだ。

2.取り組み

本年度は学生を主体として、以下のプロセスでプロジェクトは進められた。

⑴地域の伝説・伝承の文献調査

新座市教育委員会生涯学習スポーツ課と連携して、市史を読み込み、妖怪や怪奇現象についての学術的著作をレビューする作業を行った。これは心理学研究法の第1段階である。

⑵フィールドワーク

市史より得た情報から、新座市内のフィールドワークを行った。

⑶マップ作成

遠野市の不思議現象のアピールについての調査を行う中で、本調査結果をどのようなプロダクトにするかを検討し、ポップな形でのマップを作成した。

⑷広報活動

地域貢献のために、市に献呈し、記者会見を行い、新聞やテレビ、ラジオの取材に応じた。それらはメディアを通じ高い関心を得ている。

3.成果

以上の取り組みによって、得られた成果は非常に大きい。それを以下に記す。

⑴学生が心理学研究法を習熟したこと

第1に文献調査から、問題の策定、そして調査と、結果のアウトカムまで、心理学研究法の一連の流れを実践したことによって、本学の教育方針の中核にある心理学研究法に習熟した。

⑵研究を通じた学生の社会人力の向上

次に調査が地域を舞台として行われたことで、学生は様々な社会人と触れ合い、そこで交渉し、話を重ねる体験をすることで、現在高等教育に求められている社会人力を身につけることができた。

⑶ベッドタウン新座のアピール―地域振興

さらにプロジェクトで制作したマップは広い関心を呼んでおり、市外からも多くの問い合わせがあり、その後もイオンなどの大型商業施設で関連したイベントを開催することになっている。東京新聞、埼玉新聞、朝日新聞、テレビ埼玉、NHKラジオなどで取り上げられ、それは地域の郷土愛や、地域への関心を呼び起こすものとして非常に広い影響力を与えることになった。そしてこのような社会との接続によって学生がいかに社会に関わるかということについて、実地で経験を得ることになった。

⑷心理学研究法と地域連携の新しいモデルを構築したこと

このようなプロセスを経て、心理学研究法を用いることで、地域連携を行い、それが地域振興に役立っていき、学生の成長にもつながるモデルを呈示しえたのが大きい。これを今後理論化していくのが課題である。

地域課題解決型研究（若手スタートアップ支援）　№27

研究課題名	地域連携による地域産業情報の発信プロジェクト
分野	教育
研究代表者	加藤 亮介（メディアコミュニケーション学科 講師）
共同研究者	安達 一寿（副学長・メディアコミュニケーション学科 教授） 棚谷 祐一（メディアコミュニケーション学科 准教授）

1.概要

本件は、地域産業情報を発信するPBL（Project Based Learning）型の映像制作・発信プロジェクトである。埼玉県産業労働部とも連携しつつ、学生たちは埼玉県下の地域企業の紹介という目標設定を行い、企画、取材、撮影、編集、公開等の工程を体験学習する。つまり、映像制作・発信を通じ、「地域を学び」「地域に貢献」することを目途とするプロジェクトである。

なお、本プロジェクトの進行過程で、参加学生の意識変容を観察し評価した。また、地域連携によるコンテンツ発信で先進的な取り組みを行う、関西地方の大学にも赴き、調査を行った。

2.取り組み

①映像制作・発信

埼玉県産業労働部の依頼及び企業割り当てにより、「増木工業株式会社」、および「有限会社フジタケ」に関しての企業紹介VTRの制作を行った。増木工業は、2年生主体、フジタケは1年生主体のメンバーにて、企画、取材、撮影、編集、公開の工程を行った。11月と3月にそれぞれ完成し、埼玉県に納品し公開された。

②意識変容分析

本プロジェクトにおける参加学生の意識変容について、本学のルーブリック、質問票及びインタビュー調査を行い、その効果を分析した。

③調査

先進的な取り組みとして行われている、立命館大学の取り組みである、京都地域FMとの連携や、大学所属トップスポーツチームの映像配信プロジェクト等についての調査を行った。

3.成果

制作された動画は、埼玉県によって「彩の国はたらく情報館（http://www.ecity.ne.jp/hataraku/）」に公開され、埼玉県及び企業側からの良好な客観的評価を受けていることから、地域産業に一定程度貢献したと推察される。

また、参加学生の意識変容分析においても概ね良好な変容を示しており、これに関しては2015年8月に日本教育情報学会 年次大会（茨城大学）で一部を報告し、また、日本教育情報学会論文誌「教育情報研究」にも成果を投稿予定である。

そして、立命館大学のプロジェクト調査においては、本学プロジェクトにおける、次年度以降の修正点や反省点等を導くことに至った。

（以下、公開された動画、制作風景の一部を下記に示す）

① 増木工業株式会社動画の一部

② 有限会社フジタケ動画の一部

③ 制作風景の一部

地域課題解決型研究（若手スタートアップ支援）　№28

研究課題名	新座市内の公立保育園と協働した実習体験を基盤に置く保育者養成初期段階のカリキュラム検討（2）
分野	教育
研究代表者	鈴木 晴子（幼児教育学科 講師）
共同研究者	上垣内 伸子（幼児教育学科 教授） 長田 瑞恵（幼児教育学科 准教授） 大宮 明子（幼児教育学科 准教授） 横井 紘子（幼児教育学科 講師） 西脇 二葉（幼児教育学科 助手） 松野 さおり（教職支援課） 近藤 有紀子（教職支援課）

1.概要

幼児教育学科では、平成14年度の四年制保育者養成校への改組時より現在までの13年間、「新座で生まれた子ども達がどこで誰に見守られどのように育っていくのかを知ろう」をねらいとして、初年次1年間をかけて、市内の乳幼児が育つ場に出かけ、実際に親子や保育者/支援者とふれあいながら学んでいく科目「児童学演習」を開設している。昨年度は実習契約を交わしている新座市内の児童福祉施設への調査を実施し、地域で学ぶ特性を生かした授業づくりに向けた課題を明らかにした。今年度は新座市内公立保育園での半日実習に焦点化し地域（新座市公立保育園）と大学が連結した授業づくりの検討、その教育効果の検討として資格免許取得（予定）の学生を対象にしたヒアリングを実施した。

2.取り組み

本年度の取り組みは以下のとおりである。

⑴地域で学ぶ特性を生かした授業作りの構築に関して

①2015年4月　新座市公立保育園園長会に出席:実習受入側である新座市公立保育園から見える本取り組み対する視点と大学の視点の整理を行い、実習のねらい学内の実習配属に向けた事前指導内容の共有を行った。

②2015年5月18日　新座市立公立保育園　園長による特別講義の実施:演題は「子どもの世界の魅力」とし、5月6月の子どもの姿や保育園の様子や講師ご自身の保育実践を通した子どもの面白さ、子どもと共に遊びを味わい楽しむ日常についてお話しをいただいた。

③2015年5月25日から6月22日の間　毎週水曜日に保育現場での実習を実施:学生は一人当たり1回半日の実習に臨む。実習先への移動には、新座市内を通る経路を選択し、子どもの日常に近づくようにした。

④2016年2月　新座市公立保育園園長会に出席:実習時の学生指導内容と学内の学生指導内容のすり合わせを行い、地域で学ぶ特性を生かした授業作りの構築を目指した。

⑵教育効果の検討に関して

資格免許取得を目指す学科3年生3名、学科4年生2名を対象に学生の幼少期の地域とのつながりと児童学演習での実習体験に関するヒアリングを実施した。

3.成果

以上の取り組みから得られた成果を以下に示す。

⑴地域で学ぶ特性を生かした授業作りの構築:地域で学ぶ魅力の1つとして、今ここにあることをリアリティをもって捉えることが挙げられる。大学が実習先の保育とその在り様を理解し、共有し、学生に発信することで、学生自身がリアリティをもって実習に臨むことが可能となる。また、実習受入側と大学が実習生の現状を共有することで、実習受入側も実習の助言指導をしやすくなることも確認され、地域で学ぶ特性を生かした授業作りの構築に向かうことができた。これは、大学の拠点地域という自らと近しい距離にある地域で学べていることも関係していると推察する。その地域で活躍する保育者の実践を伺う機会を通し、保育に携わることへの期待が高められ、専門職としての構えも構築していく様子が講義を受けた学生のリアクションペーパーから窺えた。

⑵教育効果の検討:学生一人一人の幼少期の地域のつながりとして、児童福祉施設や教育現場での思い出が語られていった。また、大学1年時に保育実践の場に足を運んだ当時の心境やそこで学んだことを確認した。①保育者となる自分の将来像を抱き、②保育に携わる者として見られる立場で臨むことが望まれていることを認識し、③子どもたちから「先生」と呼ばれる心地よさと言葉の重みを実感し、④子どもと共に遊ぶ、笑う、考えることの楽しさと自己省察の重要性に気づかされていたことが伺えた。学生一人一人の学びを精査し、学生の学びのステップを整理していくことが今後の課題となった。

地域課題解決型研究（若手スタートアップ支援）　№29

研究課題名	ピアノによる「ふるさと新座館」ホール活性化事業
分野	その他（ホールの活性化）
研究代表者	久保田 葉子（人間福祉学科 講師）
共同研究者	棚谷 祐一（メディアコミュニケーション学科 准教授） 野口 志都代（総務部地域連携推進課 課長代理） 新座市教育委員会教育総務部生涯スポーツ課、ふるさと新座館

1.概要

新座市の文化活動の拠点施設の一つである「ふるさと新座館ホール」には、名器スタインウェイ・ピアノが常備されているが、その活用促進に資するために、本学COC事業の地域貢献活動の一環として、新座市教育委員会との共催（後援:新座市、新座市文化協会）で、ヴァイオリン（上野真理氏）とピアノ（本学講師　久保田葉子）によるクラシック・コンサート「ふるさとにいざ✤オータムコンサート」を開催した。学生がコンサートの企画やポスターの作成に携わるとともに、人間福祉学科保育コースの1年生7名が、この日のために手話ソングに挑戦、当日会場で披露した。これらの活動は、本学の学生と教職員が一丸となって地域の中で実践力を磨き、新座市民の方との文化的な交流の機会を創るものであった。

2.取り組み

【6月】　公演タイトル・企画内容について話し合い開始
プログラムの決定及び練習

【7月】　チラシ・ポスターの作成（デザイン担当はメディアコミュニケーション学科4年原田紗帆）
HP,SNSで公演情報の告知及びチラシ配布
新座市役所、ふるさと新座館、志木駅ほっとぷらざにポスター掲示

【8月】　葉書・メールによる申し込み受付開始

【9月】　「広報にいざ9月号」「東京新聞2015年9月24日」にてコンサート告知
「すまいるエフエム」出演（2015年9月27日放送、出演は人間福祉学科1年生仲島成美・松本瑠莉華、演奏者の上野真理、久保田葉子）

【10月】　「ふるさとにいざ✤オータムコンサート」を開催
手話ソングの出演は人間福祉学科1年生　神田茉凜・仲島成美・林夕璃子・藤岡愛理・松本瑠莉華・圓目亜唯・吉田美紗希

【10・11月】　アンケートの集計、記録映像・写真の整理、企画の振り返り

3.成果

10月3日にふるさと新座館において行われた「ふるさとにいざ✤オータムコンサート」では、ヴァイオリンとピアノの演奏だけでなく、来場者のための楽器体験や、学生と観客の方が一緒に手話ソングを歌うコーナーもあり、ステージに立った本学の人間福祉学科1年生7名と、会場の市民の方の温かい交流が生まれる公演となった。

来場者数は166名。定期的な開催を希望する声を多数頂戴した。

ふるさと新座館のスタインウェイ・ピアノについても紹介し、楽器やホールへの関心を高めることができた。今後も、継続的に「ふるさと新座館ホール」の活性化に積極的に関われるよう、方法などを検討していく。

（成果物:「ふるさとにいざ✤オータムコンサート」ライブ録画）

生の演奏に触れるひととき

学生たちがステージで手話を指導

会場の皆で、手話をつけて「ふるさと」を歌った

地域課題解決型研究（若手スタートアップ支援）　№30

研究課題名	新座駅前における「ふるさと」創生の試み
分野	まちづくり
研究代表者	星野 祐子（文芸文化学科 准教授）
共同研究者	星野 敦子（児童教育学科 教授） 狩野 浩二（児童教育学科 教授） 吉田 勝美（ふるさと新座商店会長） 梶原 淳（新座市商工会） 山本 実（新座市観光推進課）

1.概要

「ふるさと新座商店会」初の独自イベントとして、26年度には「チャリティー餅つき大会」を開催し、25年度に誕生したばかりの「ふるさと新座商店会」の認知度を高め、地域と大学が一体となって支援していく可能性が明らかとなった。27年度は活動の継続性を維持するとともに、商店会との連携活動の進展により、餅つきイベント以外の活動にもその幅を広げることができた。

2.取り組み

①駅前イルミネーション事業における連携

クリスマス前後1か月ほどの期間実施している駅前イルミネーションの設置において、「埼玉の地理・歴史・文化」の受講生14名が参加し、その後イルミネーションの改善策について意見を出し合った。

②餅つきイベントの実施

日時：2月6日（土）10時～13時 場所：新座市野火止ふるさと広場（ふるさと新座館隣）

主催：ふるさと新座商店会　　共催：十文字学園女子大学・地域連携推進機構

後援：新座市 新座市商工会

協力：Forest Jam Niiza、新座農産物直売センター（とれたて畑）

本学からは、ゾウキリンくらぶ、狩野ゼミ、J和太鼓部、授業「地域で学ぶ」受講学生15名が参加し、餅つきの手伝い、手打ちうどんや豚汁の提供、太鼓演奏などを行った。

3.成果

- イルミネーション事業への参加は今年度初めての試みであったが、日頃見逃しがちな地域の事業に直接参加して、その改善策を検討する良い機会となった。授業との連携を図ることができ、さらに地域について考える契機となった。
- 餅つきイベントは2回目ということで狩野ゼミは小川町での活動とも連携し、手打ちうどんの提供を行った。「地域で学ぶ」の受講生の参加によりイベントは大盛況となった。参加者の感想では、接客のむずかしさやイベント運営の改善策の提案、また地域の方たちのために働くことの喜びなどが挙げられた。
- 餅つきイベントの売り上げなどを狩野ゼミとゾウキリンくらぶから、新座市コブシ福祉基金に寄付することができた。

地域連携創造・支援事業　№31

研究課題名	子育て・子育ち支援におけるリスク支援の在り方の検討　～先駆的取り組みをしている団体との情報交流　その2～
分野	子育て
研究代表者	向井 美穂（幼児教育学科 准教授）
共同研究者	上垣内 伸子（幼児教育学科 教授）

1.概要

第1回目の公開研究会（「ずっとそばにいるよ　～妊娠期からの切れ目のない地域子育て支援とは～」2015年3月22日（日）開催）に引き続き、第2回目の公開研究会を開催した。前回の公開研究会では、新座市子育て支援課、保健所保健師、心理相談員、NPO法人として地域の子育て支援に関わる方、十文字学園女子大学学生といった様々な立場の方の参加があり、地域での子育ち・子育て支援及びリスク支援への関心の高さがわかった。そこで、今回の公開研究会では前回の開催時に質問の多かったフィンランドのネウボラについて、面談場面などより実際的取り組みについて話題提供を行った。また、2014年度より妊娠・出産包括支援モデル事業として日本版ネウボラを構想・実施している具体的取組についても、概要紹介と支援担当者からの実践報告を頂いた。

公開研究会を開催する事で、だれもがその必要性を認識している地域での妊娠期からの子育ち・子育て支援及びリスク支援について、様々な立場からより主体的にまた実践的に関わることを考える契機となるような話題提供を行うことを目的とした。また、子育て支援に関わる人々の自治体（地域）の横のつながりをつくる役割となることもねらいの一つとした。

2.取り組み

十文字学園女子大学7号館5階753アクティブラーニング学習室にて3月5日10:00～12:30まで公開研究会を開催した。前半は①フィンランドのネウボラの紹介及びネウボラナースの相談場面（発表者:向井）②利用者の声;母親インタビューから（発表者:常葉大学短期大学部　井上知香講師）③リスク支援の新しい動向（発表者:上垣内）を発表した。後半は和光市のわこう版ネウボラの紹介を中心として①「わこう版ネウボラ」事業概要（発表者:菅野由佳氏 和光市保健福祉部社会福祉課障害者支援担当）②母子保健ケアマネージャーの活動（発表者:水澤幸枝氏 和光市北第二子育て世代包括支援センター）③子育て支援ケアマネージャーの活動ともくれんハウスの活動（発表者:鈴木雅子氏 和光市北第三子育て世代包括支援センター）について発表した。その後、当日、急遽参加くださった東内氏（和光市保健福祉部部長）より和光市の取り組みについて説明及び意見をいただき、フロアの参加者とのディスカッションを行った。様々な立場の参加者より活発な意見が出された。フロア参加者は新座市・和光市・戸田市・川越市・清瀬市・練馬区・板橋区・北区等様々な地域から参加してくださり、地域での子育て支援の実情を交えながら、今後の日本の子育て支援がいかにあるべきか熱心に議論された。（参加者26名:発表者7名含む）

また、在学生2名及び卒業生2名が公開研究会準備及び運営に携わり、積極的に学びを深めた。

開催案内のチラシ

3.成果

地域で展開している子育ち・子育て支援はそれぞれの特性を生かしながら展開しているが、その有効性あるいは情報が他の地域（自治体）で生かすことが難しい点は実践する上での課題の一つである。前回及び今回の公開研究会において、実際の子育ち・子育て支援の取り組みや情報を横のつながりとして他の地域と共有していくことは今後の実践において非常に有用な示唆を提供する事につながったといえる。公開研究会での、ネウボラの取りくみや大学近隣の和光市での先駆的子育ち・子育て支援の取り組みを紹介し、多様な議論がなされたことで自分の地域でどのような取り組み（支援）が展開できるのかについて様々な立場の人々が主体的に考えるきっかけとなった。前回に引き続き、今回の公開研究会開催によって、ボトムアップ型の子育ち・子育て支援の動きを支えるために地域に根ざした大学が情報発信の基地となり、地域の横のつながりを作ることは社会的意義の高いものである。

公開研究会の様子

地域連携創造・支援事業　№32

研究課題名	「NPO法人暮らしネット・えん　えん食卓」食事サービスの改善への取組み
分野	健康・福祉
研究代表者	岡本 節子（食物栄養学科 准教授）
共同研究者	名倉 秀子（食物栄養学科 教授） 金高 有里（食物栄養学科 講師） 小島 美里（NPO法人暮らしネット・えん 代表）

1.概要

「NPO法人暮らしネット・えん」のグループリビング及びグループホームの利用者を対象に食生活の支援を、学生が管理栄養士としての業務に携わることで、施設利用者の食生活の向上と学生の実践的教育を図ることを目的として活動を行った。利用者は60歳～90歳の高齢者であることから、低栄養・生活習慣病の予防のための栄養管理、高齢者の嗜好に合わせた夕食献立を作成し、毎月メールで1ヶ月分の夕食の献立表をえん食卓に提供する。また、施設に訪問して利用者と夕食を共にしながら、献立の感想等を聞きとり交流を図る。夏休み中にはえん食卓厨房内での調理作業、衛生指導も実施した。

2.取り組み

①施設への訪問調査

利用者の状況把握のため施設に訪問し、食事摂取状況、摂食・嚥下機能、食欲等を確認しながら交流を図る。

食生活の支援は夕食のみのため、聞き取り可能な利用者を対象に、朝食、昼食の食事摂取状況と嗜好調査を行う。

②料理の試作・献立作成

高齢者が好み、栄養のバランスの取れた献立を作成するにあたって料理の試作を行った。そして、毎月1ヶ月分の夕食献立をメールでえん食卓の調理スタッフに送付する。

③訪問調査

2～3ヶ月に1回施設に訪問し、グループホーム利用者の喫食状況を確認し、グループリビングの利用者と夕食を共にしながら、料理の感想や要望等を確認する。

④厨房内実習

えん食卓の厨房内で調理作業を手伝い、献立の適合、食事の量と質、料理の出来栄えを評価し、厨房内の調理器具の確認、衛生管理の指導等を実施する。

3.成果

- 嗜好に合わせた献立提供をすることで、利用者の食事に対する満足度が上がっている。
- グループリビング利用者は朝食、昼食を自炊し、グループホーム利用者は介護職員による朝食の提供、昼食は配食弁当によって食事を供給している。特にグループリビングでは、夕食は1日の中で利用者同士の唯一の団欒の場となるため、栄養のバランスの取れた食への期待が高く、行事食への関心も高かった。
- 学生は自身で作成した献立の食事を利用者の夕食となることに喜びと緊張感を感じ、学習意欲を引き出す結果となった。料理の試作をすることで献立のレパートリーを増やす結果ともなった。
- 学生が施設に訪問し、利用者と夕食を一緒に摂り、直接自身の献立の評価を受け、利用者とコミュニケーションを図ることで高齢者施設の環境を知る機会となり、社会貢献の重要性を身近に感じることができた。
- 今後もこのような大学在学中の管理栄養士としての実践的な活動は、「NPO法人暮らしネット・えん」の施設利用者の食事を通して健康を保ち、学生の学習意欲の向上と施設給食の体得につながることが見込まれる。

グループリビングでの夕食風景

えん食卓厨房内での調理作業

地域連携創造・支援事業　№33

研究課題名	地域密着型メディアによる情報発信
分野	その他（地域情報支援）
研究代表者	棚谷 祐一（メディアコミュニケーション学科 准教授）
共同研究者	加藤 亮介（メディアコミュニケーション学科 講師） 美和 さなえ（すまいるエフエム株式会社　統括部長）

1.概要

「大学が発信する地域情報支援」をコンセプトに行うプロジェクト。本学十文字ラジオ研究部の活動をベースに番組制作を行い、朝霞市のコミュニティFM局「すまいるFM」のレギュラー番組として継続的に放送を行った。内容的には学生の個人的な関心事や生活情報等が中心ではあるが、番組内で地域や大学のイベントを紹介するなど、地域密着型メディアであることを意識し、地域に視点をおいた番組づくりを心がけた。また、ラジオパーソナリティを講師に招き、番組制作や話し方について学ぶなど、番組の質的向上に向けて努力をした。番組の運営にあたってはHP作成のほか、FacebookやTwitter等のSNSを活用し、幅広いリスナーの獲得とインタラクティブな番組づくりを目指した。

2.取り組み

①レギュラー番組「JUMONJI☆Campus Tea Party」番組制作と放送

すまいるFMにおいて番組「JUMONJI☆Campus Tea Party」（毎週日曜日22:30～23:00）を放送。2015年7月5日（日）の第1回放送以来、現在（2016年5月10日）までの制作本数は47本を数える。また、2015年10月9日より、放送局の好意によって無償の再放送枠が提供された（毎週金曜日深夜 1:30～2:00）。以来、本放送と再放送を併せて毎週2回の放送を継続的に行っている。番組制作は毎週水曜日と金曜日の放課後（学期中）が充てられ、企画、取材、台本づくり、ナレーション、収録等のプロセスを学生が分担して行っている。エリア放送であるため、受信可能地域は朝霞市、新座市、志木市、和光市に限定されるが、スマートフォンの無料アプリ「リスラジ」等を利用することによってエリアに縛られない全国的な聴取が可能となっている。（参加人数:時期により流動的であるが13～15名、所属学科はメディアコミュニケーション学科、文芸文化学科、人間発達心理学科、食物栄養学科、児童教育学科）

学生の作成したチラシ

②「ふるさとにいざ✤オータムコンサート」告知および宣伝として演奏者の上野真理さん、本学講師久保田葉子先生、その他手話ソング担当の本学人間福祉学科学生2名が番組に出演、インタビューを行った。2015年9月27日放送。（インタビューアーは人間発達心理学科1年、有田美桜）

③番組宣伝のためチラシを作成、2015年12月20日開催の「埼玉クイズ王」にて400枚を配布。チラシデザインは原案:十文字ラジオ研究部員一同、制作:メディアコミュニケーション学科3年の植原諒子と同4年、原田紗帆が担当。

④2015年12月20日、本学で行われた「埼玉クイズ王　予選」に十文字ラジオ研究部員が出演し、イベントの模様を取材。後日番組内で放送。（出演者:人間発達心理学科1年今野優香、メディアコミュニケーション学科1年吉田奈美、文芸文化学科1年鈴木菜沙、取材:メディアコミュニケーション学科2年永泉明日香）

⑤講習会開催

2016年2月26日、番組制作の質的向上を図るため、すまいるFM統括部長であり、ラジオパーソナリティとして長年にわたり活躍されている本共同研究者美和さなえ氏を招き、本学9201教室にて「ラジオ番組制作について～プロフェッショナルの現場から～」というタイトルで講演会を開催した。（参加者:十文字ラジオ研究部員7名）

3.成果

学生が主体となって企画、取材、運営、収録を行うことでメディアリテラシーの向上を図るというのが当初の目的であったが、番組を企画、制作する過程で個人的な関心事のみではなく地域の自然や文化、産業等についても学び、結果として地域への関心や愛着を深めていくことができた。

また、地域や大学のイベントを紹介するなど地域の情報支援ツールとして役割の一端を担うことができたのではないかと感じている。放送局の方から少しずつではあるが固定リスナーが増えていることなど、地域への番組の浸透が徐々に進行していることを実感できる話を伺い、今後は更に地域に密着したメディアとしての意識を高め、長く愛される番組づくりを心がけたいという決意を新たにした。

地域連携創造・支援事業　№34

研究課題名	地域との連携活動を通した地場野菜の有効活用
分野	地域産業
研究代表者	小林 三智子（食物栄養学科 教授）
共同研究者	曽矢 麻理子（食物栄養学科 助手） 尾崎 千恵子（尾崎ファーム） 山野辺 範一（新座市商工会事務局長）

1.概要

本大学の所在する新座市は、農業の盛んな地域で、秋冬にんじんにおいては国の指定物農産物として認定されている。そこで収穫量も多く栄養価の高いにんじんに着目し「にんじんドレッシング」の開発に着手した。近年、地産地消商品がブームとなり、地方発のドレッシングが多く販売されている中、新座市産の「にんじんドレッシング」は地域の特産になると期待される。使用する酢は新座市の井戸水から生成したものを、にんじんは地元農家の協力を仰ぎながら播種・育苗、収穫まで手掛けたものを使用している。またドレッシングと共に地場産の野菜を使用したスイーツの開発も行っている。栄養士を目指す学生が野菜の栽培に携わることは、基盤教育として重要であり、地域の課題に触れ、専門的知識を活用する良い機会であるといえる。本プロジェクトは、新座市の地産地消商品を産官学で開発することで地域振興、活性化することを目的とし実施した。

2.取り組み

①農業体験　（平成27年6月～12月）

市内の農家（尾崎ファーム）にて野菜の栽培を体験。野菜の播種から収穫までを行う。尾崎ファームは地域の学校給食に野菜を納品しているため、現場が直面している課題を聞くことができ、また専門的知識を持って課題を解決することを学ぶ契機にもなっている。（学生5名参加）

②商品開発　（平成27年6月～）

にんじんはβ312という品種を、酢は地場産のものを使用してにんじんドレッシングの開発を行っている。現在は調味料配合の微調整を行いドレッシングの完成を目指している。また、地場産のホウレンソウなどを使用し、子供の食育の一環としてスイーツ（焼ドーナツ）を作り新座市の催事「すぐそこ新座発見ウォーキング」にて販売した。（学生5名参加）

③農協でのプレゼンテーション（平成28年1月22日）

JAあさか野にて農協職員と農協女性部の方を対象ににんじんドレッシングの試食会を行った。その際ドレッシングに着手した経緯をプレゼンテーションした。アンケートでは貴重な意見をいただき開発の参考にしている。（学生5名参加）

尾崎ファームでの農業体験

にんじんドレッシング

プレゼンテーション（JAあさか野）

3.成果

学生は野菜の最盛期に月に一回の割合で尾崎ファームに通い、農業の大変さを身をもって知ることができた。これにより食品を粗雑に扱うことなく、今後栄養士とて社会に出た時にも食育をする立場から有意義な経験をしたといえる。農業体験の後には必ず農家の方の話を伺う機会を設け、地域の課題にも直面し自らが学んでいる専門的知識を生かす場とその必要性を感じる貴重な機会となった。また、農家、市役所、農協など地域の方との接触が多く地域企業にも興味を持つ契機となっている。

にんじんドレッシングは試作を重ね平成28年2月にJAあさか野協力のもとサンプル品第一号ができた。ドレッシングの開発においては細かい調味料の調整など加工食品を開発する大変さを体感した。まだ改良の余地があるため、現在も試作改良中であるが今後は加工、販売に向けて地元企業の協力を仰ぐ予定でいる。

地域連携創造・支援事業　№35

研究課題名	新座市女性職員と女子学生のWin－Winキャリア支援
分野	教育、その他（男女共同参画）
研究代表者	亀田温子（十文字こと・女性と教育研究所教授）
共同研究者	宮城 道子（人間福祉学科 教授）、松永 修一（文芸文化学科 教授）、星野 祐子（文芸文化学科 准教授）、名塚 清（地域連携推進機構） 新座市:江原 達夫（総務部副部長兼人事課長）、田持 由希子（人事課主任）、山口 聡（人権推進課長）

1.課題

新座市においては、職員827人（H25.4.1）の51.6%が女性職員（特に40歳未満では57.1%が女性職員）と過半を占めているが、管理職の女性の割合は20.2%に留まっている。今後10年で管理職の年齢層である40歳以上の職員の女性の割合が大幅に増加する状況が見込まれる。このように、女性の活躍や男女共同参画が進む中で、全国自治体の中でも女性職員比率の高い新座市では、キャリア支援による女性職員の育成が重要な課題となっている。一方大学では、学生の公務員希望や専門就職以外の企業就職などが増加しており、新座市の女性職員と女子学生が交流し地域連携を強めることで、キャリアアップやキャリア形成に向けて、相互にプラスとなる学びや体験の場が成立する。このような趣旨から、本事業を実施した。

2.取り組み

①新座市女性職員による「キャリアしゃべり場」（平成27年7月29日）

新座市職員3名（課長、係長、主事）がキャリアモデルとして、自身のキャリアを振り返り、体験談や今後の目標等を学生に語り、自身を客観的に捉えることにより、女性職員の今後のキャリアアップのステップとするとともに、学生のキャリアデザインの学びの場とする。（全学共通科目「キャリア教育」の選択科目「キャリアサポート」第15回で実施:履修登録学生84名）

②新座市女性職員研修（平成27年11月9日・17日）

担当する仕事の分野を超えた対話により未来思考で社会を変える「フューチャーセッション」形式のワークショップを通して、キャリアアップに向けた気づき・モチベーションを高め、自身に求められている期待と役割を考える契機とする。（新座市女性職員39名参加）

③働く女性のキャリアアップを考えるワークセッション（平成28年2月8日）

前記研修等の成果を踏まえ、研修等に参加した4名の女性職員をパネリストとして、有識者2名をコメンテーターとして迎え、学生が参加する「フィッシュ・ボール」形式のワークセッションを通して、女性職員と学生のキャリア形成に資する。（学生12名参加）

3.成果

新座市女性職員には、キャリアアップに向けた気づき・モチベーションを高め、自身に求められている期待と役割を考える契機となった。また、学生にとっても、キャリア意識形成につながる「学びの場」として貴重な機会となった。働く女性と、今後社会に参加する学生たちとのこうした「Win－Winキャリア支援」の活動を今後も継続することが、女性のキャリア形成、及び新座市の新たな組織運営の発展につながることが見込まれる。（成果物:新座市女性職員と女子学生のWin-Winキャリア支援事業報告書）

地域連携創造・支援事業　№36

研究課題名	産学官連携による地域の食材を使った商品の開発
分野	健康・福祉
研究代表者	金高 有里（食物栄養学科 講師）
共同研究者	名倉 秀子（食物栄養学科 教授） 岡本 節子（食物栄養学科 准教授） 工藤 貴子（食物栄養学科 助手）

1.概要

- 実学教育の一環として、学生にできるだけ早期に社会との関わりを持ち、即戦力を養うことで、将来の管理栄養士としての活躍の可能性を広げることを目的として、食物栄養学科の学生と埼玉の地域に密着した企業/店舗との共同事業により、地域の食材を用いた商品開発を行う。
- 地域の食材を扱い、学生が埼玉の食文化や食材の栄養学・調理学的な観点からも学びを深める。さらに、それを地域の住民に理解していただくための商品化戦略についても学ぶ。
- 商品化され、販売に至った商品について実演販売の経験により、地域に住む消費者からの意見や企業側にたった観点を学び、振り返りを行う。

2.取り組み

①企業・教員・学生による方向性の決定

学生と教員との意見交換を行ったうえで、教員と企業との意見交換を行い、この取組みのコンセプトやお互いにとっての意義を確認した。企業と学生との意見交換（食材・内容の決定）を行った。

②学生による食材の研究と商品化試作

学生を主体として、コンセプトに基づいた商品を何点か試作し、企業への試作結果の報告とプレゼンテーションを行った。会議を繰り返し、企業からの意見、改善点の指導を受けた。

③地域マルシェへの出店

会議において販売化に関して地域のマルシェでの出店について提案を受け、10月4日に行われた朝霞アートマルシェに向けてオリジナルスウィーツの試作を繰り返し行った。スウィーツの決定後、ネーミング、パッケージ、値段、看板、当日のプロモーション等を検討し、販売当日を迎えた。

④保育園での調理実習活動

新座市内にある保育園の園児3～5歳を対象に、園児とともに調理を楽しむことができる調理実習を計画し、内容を検討した。食育として習得して欲しいテーマを決めたのち、試作を繰り返した。当日は、牛乳についての食育紙芝居を行ったあと、園児とともにアイスクリームの調理と試食、交流を行った。

地域住民への開発スウィーツ販売の様子

地域園児と調理実習を行う様子

3.成果

上記①～③は学生にとって、企業の方々との会議を重ねることや、地域の人に向けて販売するものの内容を考え、販売を介して地域の住民の方々と直接関わるということは初めての経験となった。試作に対する意見を戴く過程において、社会における客観的で冷静な評価を受けることができたことは、大きな学びに繋がったと考えられる。

また、企業と大学が手を取り合い、地域にアクションを起こすことで、地域からの大きな反響を受けることができた。このことはお互いが一つの目標をもって地域へ浸透していく過程において、高め合いながら成長できる良い機会となることが実感できた。

上記④は地域の保育園との関わりにおいて、園児にとっての本学の学生の存在は、調理実習体験で得た美味しさと楽しさを通じて大きく心に残ったと考えられる。園児だけでなく、取り組んだ学生にとっても、対象者の気持ちになって企画をする大変さや、地域との結びつきを学び、実学として身についていることがわかった。社会に出るうえで重要な学びを得たと考えられる。

地域連携創造・支援事業　№37

研究課題名	中山間地域の豊かな自然と都市部における人的物的資源との融合による新たな人材育成プランの創造
分野	その他（地域づくり、中山間部と都市部との交流）
研究代表者	狩野 浩二（児童教育学科 教授）
共同研究者	星野 敦子（児童教育学科 教授） 松永 修一（文芸文化学科 教授）

1.概要

本取り組みは、学生が中山間地域の地域づくりに関わる中で身につけた知恵や技などの属身的技術を都市部である埼玉県新座市において披露し、その成果を省察するとともに、今後の地域づくりのあり方について考察することを主眼としている。いわば、学生自身が中山間部と都市部とを往還する中で、相互の長所を学びつつ、将来は、中山間部と都市部とを融合させる組織者となることをめざすものである。本学における教師教育との結合を意識しつつ展開し、将来にわたって持続可能な地域づくりを展開できる人材を育成するためのプランを創造するものである。

2.取り組み

①4月25日比企郡小川町腰越地区の腰上（以下腰上と略記）において、福島由博区長他、腰上地域の住民と今年度の方針を検討する（学生4名参加）。 ②5月10日腰上青年部の杉田氏と打合せ（学生3名参加）。 ③5月17日、腰上において地域美化運動に参加（学生15名参加）。 ④腰上において「ふれあい昼食会」に参加（学生3名参加）。 ⑤7月26日、腰上において福島由博区長宅にて地域の技術の修得について学習（学生3名参加） ⑥9月10日、腰上において前区長田端氏の指導の下、うどんづくりを習う（学生3名参加）。 ⑦10月5日、新座大和田公民館において、うどんづくり（学生4名参加）。 ⑧11月29日、腰上においてソバの収穫（学生3名参加）。 ⑨12月5日、同収穫（学生1名参加）。 ⑩12月23日、腰上において年越蕎麦づくり（学生3名参加）。 ⑪2月5日、腰上前区長田端氏宅において、うどん（87食）づくり（学生4名参加）。 ⑫2月6日、ふるさと新座館において、新座駅前商店会主催チャリティー餅つき大会に参加し、「けんちんうどん」と「腰上ハイキングマップ」及び、うどんづくりのノウハウをまとめた「レシピ」を配付。腰上から青年部杉田氏を招聘し協力いただく（学生4名参加）。 ⑬2月18日、新座市役所において須田市長に対し収益金を「新座こぶし福祉基金」として寄付する（学生2名参加）。

③美化運動

⑥うどんづくり

⑤開花した向日葵

3.成果

新座市においては、中山間地でつくられている“地粉”によるうどんは、大変珍しいとのことであり、比企産の地粉によるうどんは、前日に腰上において製作したにもかかわらず、大好評であった。用意した87食は、約1時間程度で完売した。学生たちは、並行して「腰上ハイキングマップ」の改訂版を作成し、これを“けんちんうどん”とともに配付した。学生が修得した知恵や技は、地域住民との交流による形成的な力が大部分である。結果として製作した“けんちんうどん”は、その成果の一部であり、実際的には、上記①～⑪の通り、年間を通じて、中山間地域（腰上）において地域づくりに関わったことは、学生にとって大きな力となっており、この1年での成長ぶりには、目を見張るものがある。1年生から4年生までが参加し、また、卒業生も参加しており、この活動の成果を生かして、次年度以降も新たな取り組みに挑戦したいと考えている。

⑧、⑨ソバの収穫

⑪うどんづくり

⑫チャリティー餅つき大会

地域連携創造・支援事業　№38

研究課題名	学生と共に考える大学マスコットキャラクターの活用とその展開 ―街に飛び出せ!プラスちゃん―
分野	地域産業
研究代表者	星野 祐子（文芸文化学科 准教授）
共同研究者	安達 一寿（副学長・メディアコミュニケーション学科 教授） 原 一彰（広報課兼募集広報課課長代理） 山形 友美恵（総務課主任）

1.概要

本学マスコットキャラクター「プラスちゃん」の活動を支える組織として、平成26年度に「プラスちゃんくらぶ」が発足。「プラスちゃんくらぶ」の活動は、イベント参加による地域活性化や、地域に愛される大学としてのPR活動等が中心である。平成27年度は、前年度以上の活動を展開するべく、メンバーの補充、学生リーダーの選出、活動フィールドの拡張、プロジェクト型活動の推進に取り組んだ。活動報告は随時Facebookで行う。

各種活動を展開する中で、学生たちは、行政や地域の方々など、立場の異なる方と共にイベントを創り上げることを経験した。また、活動を経ることで、社会人力やコミュニケーション力、遂行力、状況判断力、柔軟性など、社会人として求められる素養を身につけることができた。さらに、大学のシンボルの一つでもある「プラスちゃん」と活動することで、自己肯定感や大学への帰属意識をも醸成することができたといえる。

2.取り組み

■地域連携活動

活動のフィールドは新座市に留まらない。志木市や朝霞市など連携市で開催されるイベントにも多数参加した。「プラスちゃんくらぶ」の活動はメディアにも取り上げられ、本学の知名度向上に貢献することができた。

【活動一覧】春のいろは親水公園まつり（4/5）、ひばり通りクリーン大作戦（5/21）、志木市ガイドブック撮影（5/23）、田子山富士山開き（7/4）、大江戸新座まつり（7/18）、子ども大学しき入学式（7/25）、志木の花火運営補助（7/25）、子ども大学にいざ入学式（9/12）、新座市民まつり産業フェスティバル（10/11）、学園祭（「そうだ埼玉.com」の取材）（10/24～25）、志木駅南口すきっぷたうん商店会チャリティー屋台村（11/1）、志木市民まつり（11/29）、野火止用水ご当地グルメ、ゆるキャラⓇフェスティバル（12/20）、第4回埼玉クイズ王決定戦予選会（12/20）、ふるさと新座商店会主催第2回チャリティーもちつき大会（2/6）、COCシンポジウム（2/27）、さくらまつり黒目川ウォーキング（3/26）

■グッズデザイン・開発

前年度に作成した名刺（2000部）の配布が終了し、デザイン担当の学生が新規に「プラスちゃん名刺」（2000部）を作成した。着ぐるみプラスちゃんの画像やFacebookのQRコードも入れ込み、第一弾よりも情報量が多いものとなった。また、学内で販売しているミニバッグ製作にあたり、学生メンバーが企画段階から関わった。

■本学のPRと地域連携活動の報告を兼ねて「大学自慢コンテスト」に参加

11月7日・8日、第9回大学人サミット“信州まつもとカレッジ2015”大学自慢コンテストに参加。「プラスとなる　人づくり　街づくり」をテーマに、学生とマスコットによる地域活性化や学生育成の取り組みを紹介した。

■プラスちゃんの「プラスレター」発行

1年の活動をまとめた「プラスレター」を発行（1000部）。関係各所に配布した。

3.成果

積極的な地域連携活動やFacebookでの情報発信が評価され、埼玉県のご当地キャラクターが登録し、地域の活性化に取り組む「ゆる玉応援団」に加入。教育機関では初の登録となる（団員番号110番）。また、キャラクターを活用した地域連携活動は、学生側からすれば気負いなく楽しみながらできることから、地域志向型の学生を育てるにあたって効果的であったといえる。今後は、学生プロジェクトのさらなる推進と、地域に根ざす教育活動としての効果的な展開を考えたい。

11/8大学自慢コンテスト

ゆる玉応援団認定書

7/18大江戸新座まつり

10/24学園祭の取材（YouTube掲載）

2/6もちつき大会

地域連携創造・支援事業　№39

研究課題名	ふるさとの緑を育むプロジェクト
分野	自然・環境
研究代表者	星野 敦子（児童教育学科 教授）
共同研究者	星野 祐子（文芸文化学科 准教授） 石野 榮一（メディアコミュニケーション学科 教授） 伊藤 新太郎（HUGネット　副会長）谷合 宜明（雑木の会代表） 小山 元気（新座市みどりと公園課）川畑 隼人（新座市生涯学習スポーツ課）

1.概要

新座市内に残されている雑木林や緑の保全と環境整備、ならびに地域における価値の継承を目的として、主として野火止用水近辺を対象として活動を実施した。26年度にCOC事業の一環として設立された「ふるさとの緑と野火止用水を育む会（通称　HUGネット）」（会長　佐藤弘信）のうち、雑木林保全等を主な活動としている5団体を中心として、市内の雑木林に関する情報を広く発信し、市民の意識を高めるとともに、保全活動を促進するためのより具体的な活動を展開した。

2.取り組み

①樹木プレートの設置

野火止用水沿いの植生調査を実施し、その結果に基づいて、プレートを設置する樹木を選定した。22種類（うち6種類はオリジナル説明文）計32枚の樹木プレートを「憩いの森」から「本多の森」の区間に設置した。

また設置にあたり野火止小学校環境委員会の児童や教員のご協力をいただいた。

②「ふるさとの緑と野火止用水を育む会」（HUGネット）リーフレットの作成

HUGネットの取り組みについて広く発信するためHUGネットの設立趣旨、12団体とHUGネットの主な活動紹介などを掲載したいリーフレットを2000部作成し、行政関係他、市内のイベント、各団体の会合などで配布した。

③行政・各団体との連携活動

HUGネットの組織力を活用し、行政ならびに各団体との連携活動を実施した。

- 西分夏祭りにおける学生ボランティアの派遣
- 野火止用水灯明まつりにおける警備協力、学生ボランティアの派遣
- 野火止用水沿いにおける児童の絵画展示
- 武蔵野野鳥の会による平林寺内の鳥の巣箱清掃・管理など

3.成果

- 木のプレート作成にあたっては経験豊かな団体の実力を十分に発揮し、実地調査に基づいて適切な配置が実現した。設置に際しては野火止小学校の児童とともに、同行で学校インターンシップや教育実習に取り組んでいる学生が指導にあたり、地域の団体・学校・大学の連携の1つの形が実現した。
- リーフレットの周知はこれからの課題であるが、野火止用水や周囲の緑に関する地域社会の意識を高めるのみならず、学生にとっても地域を学ぶよい資料となった。今後より一層HUGネットのネットワークを生かした活動を広く展開していきたい。
- 新座デビューセミナー基調講演「連携でますます楽しく･･･ボランティアから地域連携活動へ」（3/5）
- 「産学官連携ジャーナル」2016年2月号Vol.12 №2『新座市における大学との協働による人材育成－地域に貢献する人材を育てる－』p20-22

地域連携創造・支援事業　No.40	
研究代表者	野火止用水保全プロジェクト
分野	自然・環境
研究代表者	星野 敦子（児童教育学科 教授）
共同研究者	星野 祐子（文芸文化学科 准教授）、赤間 恵都子（文芸文化学科 教授） 樋口 一貴（文芸文化学科 准教授） 石野 榮一（メディアコミュニケーション学科 教授） 佐藤 弘信（HUGネット会長）、神 寛（HUGネット副会長） 金澤 光　（埼玉県環境科学国際センター研究員） 川端 真美（新座市生涯学習スポーツ課） 斯波 治　（新座市生涯学習スポーツ課）

1.概要

安らぎと憩いを求め、野火止用水とその周辺の緑に人が集い、子どもが親しめる空間づくりを目的として、26年度には「ふるさとの緑と野火止用水を育む会（通称　HUGネット）」（会長　佐藤弘信）を設立した。本会は市内12団体、新座市関係6課をメンバーとしており、野火止用水流域とその周辺を活動地域としている野火止用水の保全とそれを生かしたまちづくりを目的として、研修事業ならびに子供向けイベント企画を実施した。

2.取り組み

①三島市源兵衛川における研修事業

野火止用水と雑木林の目指すべき方向性を学ぶための、参考となる事例として、どぶ川から見事に再生した三島市源兵衛川の見学を行った。地元のガイドの会のメンバーによる詳細な説明により、せせらぎを活かした街づくりの神髄を学ぶことができた。また貴重な「梅花藻」の観察も実施した。

②「野火止用水ゆるキャラフェスティバル」における出店

新座市のウォーキング事業と合わせて開催された「野火止用水ゆるキャラフェスティバル」において、さなかの展示、水質等調査結果や活動内容のパネル展示、子供向け工作教室の開催、野火止用水灯明まつりで利用する灯明のお絵かきの実施などを行った。HUGネットのコーナーは飲食コーナーとは離れていたが、の親子連れや、多くのウォーキング参加者により大変な賑わいを見せた。

③『森の四季だより』製本

「雑木の会」が十数年にわたって蓄積してきた、野火止用水近辺の自然観察記録を本としてまとめ製本、印刷を行った。美しい写真とわかりやすい解説、またオリジナリティあふれる記事が高く評価されている。「雑木の会」が関わってきた学校、生涯学習スポーツ課、みどりと公園課、平林寺などへ贈呈している。

3.成果

- 三島市源兵衛川研修では、住民と行政が一体となった川再生への取り組みと源兵衛川を核とするまちづくりの実際を知ることができ、新座にとっても参考となるところが多かった。
- 「野火止用水ゆるキャラフェスティバル」ではHUGネットの参加団体が各々の特長を生かしたうえで、連携して活動する試みであったが、子どもから高齢者まで広く支持を受け、地域に対する十分な情報発信ができた。
- 『森の四季だより』については大変高い評価を得ており、増刷のうえ、市内のすべての学校に配布してほしいという希望も来ている。今後順次対応を急ぎたい。
- 市民総合大学修了式講演会（12/12）「生涯学習とボランティア　ー市民総合大学から展開するボランティア活動ー」
- 地域活性学会第7回研究大会発表（9/6）「大学と行政の連携による 地域人材育成制度の評価」

（5）　地域連携共同研究所

研究分野、組織を超えた連携により、本学及び地域社会の発展に貢献する地域志向研究を深化させるため、地域連携共同研究所の研究課題として、「健康長寿のまちづくり」をテーマに、3件を採択しました。

①　平成27年度研究課題一覧

No.	研究課題名	配分金額
1	食育で育む管理栄養士の専門性	各20万円
2	新座市内介護・福祉・医療の資質向上と連携強化への取り組み	
3	十文字学園女子大学シニア健康教室	

②　平成27年度実績報告

地域連携共同研究所　No.1	
研究代表者	食育で育む管理栄養士の専門性
分野	地域連携共同研究所
研究代表者	長澤 伸江（食物栄養学科・大学院人間生活学研究科 教授）
共同研究者	井上 久美子（食物栄養学科 准教授）、岩本 珠美（食物栄養学科・大学院人間生活学研究科 教授）、木村 靖子（健康栄養学科 教授） 西川和美（新座市保健センター 主査）

1.概要

管理栄養士養成校のカリキュラムでは、「管理栄養士・栄養士として専門的知識や技術を向上させたいと思う態度」、「食をとおして人々の健康と幸せに寄与したいと思う意欲」を養う体験が求められている。そこで、平成27年度COC事業として「食育で育む管理栄養士の専門性」プロジェクトを立ち上げ、新座市の課題解決に向け保健センターが企画した地域住民を対象とする公衆栄養活動に学生を参加させ、管理栄養士の専門性の醸成の一助にすることを試みた。

2.取り組み

管理栄養士をめざす学生が、食育コーディネーターからワークショップやファシリテーションの講義を受けて基礎力を養い、その後、新座市保健センター栄養士からの連携・協働の要望を聞き、保健センターを中心に開催される市民に向けた事業に参画した。

①市民健康まつりではボランティア参加・骨密度測定コーナー開設（10月18日）

②食育の日に展示する食育推進ポスターを作製し、市役所・保健センターにて展示（10月18日）

③学生の感性やアイディアを生かした食育推進計画の普及啓発を目的としたクリアファイルのデザイン考案（平成28年2月24日完成）

④親子DEミニウォーキング&スタンプラリー参加者へ配布するオリジナルストラップを手作りし、スタンプラリーのクイズを出題（11月14日）

その他、平成27年度農林水産省「消費者ニーズ対応型食育活動モデル事業」の一つとして、一般社団法人すこやか食育エコワークが実施主体として開催した地域の若年女性対象「和食文化と日本の心を知ろう!プロの調理人によるセミナーと調理実習」では、学生が参加者のアシスタントを務めた（9月5日、11月8日、12月12日）。

①新座市健康まつり骨密度測定

③食育普及啓発クリアファイル

④親子DEミニウォーキング

3.成果

保健センターと連携した大学COC事業は、学生たちにとって、世代を超えた市民と交流でき、コミュニケーション能力を養う貴重な場となった。また、試行錯誤しながら完成させたポスターやクリアファイル制作は大学で学んでいる知識を整理し、人にわかりやすく伝えることの難しさを味わうと同時に、人々の健康や幸せのために貢献できたという達成感が得られる貴重な体験となった。和食のプロの調理技術や和食文化の魅力にふれる機会は、「専門的知識や技術を向上させたいと思う態度」を養う体験となった。

行政を中心に地域社会と連携・協働した大学COC事業に学生を参画させることは、管理栄養士の専門性の醸成の一助になると考えられる。第4回日本食育学会（平成28年6月4-5日実践女子大学）で報告する。

地域連携共同研究所　№2

研究代表者	新座市内　介護・福祉・医療の資質向上と連携強化への取り組み
分野	地域連携共同研究所
研究代表者	太田 眞智子（人間福祉学科 准教授）
共同研究者	野島 靖子（人間福祉学科 准教授）、山口 由美（人間福祉学科准教授）、富井 友子（人間福祉学科 講師）、新井 幸恵（非常勤講師）、中村 幸子（非常勤講師） NPO法人暮らしネット・えん:加藤 真弓、岡田 博美、小島 美里 （株）かくの木:藤橋 妙子、中澤 俊介 NPO法人太陽:石川 千枝 社会福祉法人隆信会:萩元 真由美

1.概要

「新座市内　介護・福祉・医療の資質向上と連携強化への取り組み」として行っている「新座・地域ケアの集い」は、2006年12月より始まり、新座地域の介護・看護・福祉職らでつくる学びの集まりである。2ヶ月～3ヵ月に一回集まり、講演・事例検討などを通じて、学び や交流に力を入れ、市民とともに新座の福祉・医療を育てる活動を行ってきた。新座市で日々奮闘し福祉実践を行う事業所の方々との学びは貴重である。平成27年度は「新座・地域ケアの集い46回～50回」の研修を行った。内容については、プロジェクトメンバー及び参加者からの希望のテーマを中心とした。

2.取り組み

今年度は研修会を5回実施した。

①第1回　2015年6月19日　「医療から逃げない!」福祉職のための医療連携
介護保険の現状、今後のケアマネジメントのあり方、医療職の役割といった基本的事項、医療連携はなぜ必要なのか等、具体的で実践に即した内容が提示された。参加者51名

②第2・4・5回は同じテーマ「介護予防・日常生活総合支援事業」で研修を実施した。平成27年度より介護保険制度の改正に伴い、平成29年度までに、各市町村は「介護予防・日常生活総合支援事業」に移行することが決まっている。その事業の内容について、詳しく学びたいという要望が多かった。

- 第2回　2015年9月18日　「介護予防・日常生活総合支援事業に移行　訪問介護はどう変わる?!」
  練馬区介護サービス事業連絡会副代表を講師として迎え、訪問介護を中心に練馬区の状況についてお話を伺った。参加者57名
- 第4回　2016年1月20日　「介護予防・日常生活総合支援事業移行」
  利用者の状況を中心に、地域包括支援センターの方にお話を伺った。参加者48名
- 第5回　2016年3月10日　「介護予防・日常生活支援総合事業移行～第3弾～」
  前回様々なアドバイスをいただき、多くの方から再度お話がお聞きしたいという要望があった大学教員による研修会を実施した。参加者41名

③第3回　2015年12月18日　「ACTは今…精神障がい者の地域支援のあり方を考える」
市川市で展開されているACT-Jの活動、精神障がい者が地域に移行し暮らし続けるための支援のあり方について研修会を開催した。具体的な「包括型地域生活支援プログラム」を進める活動、実践内容、訪問支援や超職種チームについて。さらに当事者の思い等について伺った。参加者は学生を含む60名であった。

3.成果

第1回目の「医療連携」に関する研修では「連携の必要性について改めて実感した」「医療職の気持ちが聞けて良かった」「最期はどこで、だれとどのように迎えたいですか、について考えさせられた」「聞いて勇気が持てた」「医師と話す努力をしたい」といった感想が寄せられ、今後の医療連携に繋がる研修となった。

同じテーマで第3弾（2・4・5回）まで開催した「介護予防・日常生活支援総合事業」については、実際に訪問介護事業を展開している事業所にとって、今後の運営にかかわる大きなテーマであり、すでに先行している市の取り組み状況を知ることは重要である。制度の内容や実際の状況を学び、市と共に介護保険を利用される方の生活を支えていきたい、という事業所の方たちの熱意に応える研修となったと考える。今後も引き続き学んでいきたいという声をいただいている。

第3回目のテーマは精神障がい者の地域支援を実践している相談支援事業所と介護事業所の方の研修では、新座市としても課題である精神障がい者への支援、そして「入院中心モデル」から「地域生活モデル」へというテーマは、今後の実践に向けて急務の研修であった。当事者家族の参加も得られた。

全体に参加者は40名～60名前後であり、新座で介護・福祉・医療を展開している方々の学びたいという関心の高さが伺え、その姿勢に応える場となっていると考える。学生にとっても実践から学ぶ貴重な機会となっている。

地域連携共同研究所　№3

研究代表者	十文字学園女子大学シニア健康教室
分野	地域連携共同研究所
研究代表者	髙橋 正人（健康栄養学科 教授）
共同研究者	池川 繁樹（健康栄養学科 教授）、長尾 昭彦（健康栄養学科 教授）、木村 靖子（健康栄養学科 教授）、高橋 京子（健康栄養学科 教授）飯田 路佳（健康栄養学科 教授）、徳野 裕子（健康栄養学科 准教授）、石山 隆之（健康栄養学科 准教授）、佐々木 菜穂（健康栄養学科 講師）

1.概要

2015年11月23日・12月14日・1月18日・2月8日:いずれも月曜日14:00～16:00

①計測・健康チェック:血圧、体重、体脂肪率等を計測し体調を確認、本人の希望により運動強度を判断する。

②ミニ講義:栄養、健康、運動の分野で実生活に役立てられる研究成果を参加者に伝える。

③ストレッチ・チェアエクササイズ:運動強度を選択できるよう複数の方法を提示して実施する。

④ダンスムーブメント:音楽のリズムやイメージと融合したナチュラルで心地よい動きを楽しむ。

2.取り組み

第1回目　測定と相談および軽い運動 ミニ講義:今こそ健幸華齢（髙橋　正人）
体力測定、ストレッチ、チェアエクササイズ（飯田　路佳）

第2回目　健康に関する講話と運動　ミニ講義:今こそ運動を考える（髙橋　京子）
ストレッチ、チェアエクササイズ、ダンスムーブメント（飯田　路佳）

第3回目　健康に関する講話と運動　ミニ講義:今こそ食生活を考える（木村　靖子）
ストレッチ、チェアエクササイズ、ダンスムーブメント（飯田　路佳）

第4回目　再び測定と運動　ミニ講義:今こそ生活習慣を考える（徳野　裕子）
体力測定、ストレッチ、チェアエクササイズ（飯田　路佳）

実施に当たっては、安全管理を徹底するため、計測・健康チェック確実に行うため、健康栄養学科の教員・助手がつき、SAを指導し、実施した。これらのデータは、髙橋 正人教授が目を通し、特に配慮のいる方を確認するなどして、体制を整え、運動の指導にあたった。体力測定の結果は、最初の結果は2回目に、最後の結果は郵送で参加者に知らせ、成果を確認できるようにした。健康栄養学科の学生もSAとして参加することで、高齢者と運動を考える良い機会となり、大学での学修に生かせる貴重な経験となった。

3.成果

63名から申し込みがあり、実際に参加されたのは54名であった。男女比は、圧倒的に女性が多かった。

参加人数は平均28名で、定員の30名を超える回もあった。3回目は雪のため、12名の参加であった。全員に連絡を取ることができず、緊急時の連絡方法は、今後検討が必要である。

参加者の平均年齢は68.1歳で、最年少が55歳、最年長が80歳であった。

参加者の住まいは、所沢市が最も多く29名、次いで新座市の20名であった。飯田先生の関係で連絡を流していただいたこと、市の広報での呼びかけたことにより参加いただいたものと思われる。

参加回数は、平均2.1回。雪の日もあったが、6名の方が皆出席であった。月1回というペースの健康教室であっても、継続して参加いただける可能性が高いことが分かった。

以下参加者の声を参考にあげる。

- 1回より2回と良くなっているところがあり嬉しく思っています。100歳まで頑張りたいです。体操した後、家に帰ってから体が軽くなります。ありがとうございました。
- 4回参加しました。どの回も分かりやすく説明してもらい、脳にも刺激がありました。日々の暮らし方もだらだらせず、背筋を伸ばしていきたいと思います。
- 最初はもっと動きを学びたいと思いましたが、ミニ講義も毎回興味深いお話でプラスになりました。先生方が、明るくあたたかい雰囲気を作ってくださるので、楽しく運動することができました。

大学教員の専門性の高いミニ講義と計運動を組み合わせることを、多くの参加者は高く評価している。健康栄養学科として取り組める社会貢献として来年度以降の継続も検討していきたい。

4 事業評価

（1） 評価体制

事業の着実な実施に向けた評価体制として自己点検評価を行なった結果を次年度の事業推進に活かしていくために設置する「十文字学園女子大学COC事業自己点検・評価委員会」とCOC事業の着実な実行を促す外部評価体制として設置する「十文字学園女子大学COC事業外部評価委員会」の2つの委員会によって、本事業の評価体制を組織しています。

自己点検・評価は、①目標設定の妥当性、②事業計画の妥当性、③事業の適切性、④事業の成果目標の達成状況の基準に沿って実施し、「自己点検・評価報告書」としてまとめ、第三者による外部評価を経て、印刷物及び大学ホームページで公表するとともに次年度の事業計画に反映させるPDCAサイクルを構築しています。

また、外部評価については、自己点検・評価項目に基づき評価を行うとともに、改善意見等を付記し、評価結果は「自己点検・評価報告書」と併せて印刷物及び大学ホームページにて公表します。

（2） 平成27年度COC事業の評価結果

委員会名	評価実施日
自己点検・評価委員会	平成28年5月23日（月）
外部評価委員会	平成28年6月24日（金）

① 自己点検・評価委員会による評価結果（第1期中期目標・中期計画）

（注）◎:完了（100%）、○:ほぼ完了（80%）、△:引き続き実行が必要（50%以下）

区分	中期目標	中期計画	平成27年度計画	自己評価	
研　究	本学の特色を生かした研究を推進し、研究成果の社会への還元を図る。	研究成果を広く社会に公開し、企業や地域との連携による共同研究を推進する。	COC事業に関する研究体制の充実と重点化を図る。	◎	COC事業に関連する研究に関しては、地域志向教育研究費（補助金）による研究を推進させるための「地域実践研究部門」に加えて、地域志向教育研究費により得られた研究成果を全学規模に発展させた研究を実施する「地域連携共同研究所」を設置した。さらに、地域のニーズと大学のシーズをマッチングさせるために「産官民学連携コーディネーター」を配置するなど、研究体制の充実と重点化を図った。
			ホームページを利用し、教員の研究情報を研究者、企業、地域に発信し共同研究に結び付ける。	△	大学ホームページに研究支援課のページを作成し、教員の研究実績、競争的資金の獲得状況、研究所などの情報発信を行うための準備を進めた。本学の個々の教員の専門領域と研究実績を集約した資料は概ね完成している、今後は、専門領域等をわかりやすく整理をしたうえで、ホームページに掲載するなどして企業や地域とのマッチングに役立てるものを公開していく予定である。

区分	中期目標	中期計画	平成27年度計画	自己評価	
地域を志向した教育研究	地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究を推進する。	「地域のための大学」として、全学的な教育カリキュラムの改革を行い、学生の地域に関する知識・理解を深めるとともに、地域の課題（ニーズ）と大学の資源（シーズ）の効果的なマッチングによる地域の課題解決支援、更には地域社会と大学が協働して課題を共有し、それを踏まえた地域振興を担える人材育成に向けた取り組みを進める。	「pro-act型学生」を育てるための教育内容・方法を構築するとともに、地域志向教育研究を推進する。	○	「pro-act型学生」育成のため、「地域を学ぶ、地域で学ぶ、地域に活かす」の視点に対応するカリキュラムを充実させた。あわせて、地域の特徴や課題を理解した人材のデータベースを構築し、外部講師の招聘に活用した。今後は、地域課題解決に貢献できる学生の育成に資するため、さらなる地域志向教育研究の推進に努める。
社会との連携や社会貢献	地域に開かれた大学として、地域社会の発展のために、産官民学連携を強化し、積極的に貢献する。	地域連携推進機構の機能・活動を充実させ、地域社会の課題解決に資するとともに、研修会等の開催により、地域の人材育成に貢献する。	プラスキャンパス連絡会議、地域連絡協議会を開催するとともに、課題解決を取り入れたFD/SD活動の企画・実施を行う。行政やNPO等の団体と連携した組織的でモデルとなる社会貢献活動を推進する。	◎	プラスキャンパス会議を3回、地域連絡協議会を2回（うち、1回は新座市長との意見交換会）開催するとともに、FD/SD活動として、5月に学習評価研修、11月にアクティブラーニング研修を行った。また、社会貢献活動として、地域の子どもたちのために、本学教職員、学生、地域住民、市教育委員会、NPOが連携し、本学敷地内の雑木林を活用し、外遊びを通じて地域を元気にすることを目的とした「プレプラ事業」をスタートさせた。さらに、本学教職員、学生が12の地域団体、行政と連携した「HUGネット（ふるさとの緑と野火止用水を育む会）」が発足し、野火止用水と周辺の雑木林の維持、保全活動を推進するための講演会や会議を開催した。
	幅広い学修ニーズに対応するため、生涯学習の機能を強化する。	社会のニーズに対応した多様な学習機会を提供し、生涯学習活動を支援強化する。	公開講座の夜間開催・有料化等の検討、履修証明プログラム・職業実践力育成プログラム等、社会人の受け入れ体制を検討、推進する。	△	COCセンター地域創造・支援部門において、受講者を対象として、公開講座の夜間開催や有料化、履修証明プログラム等に関するアンケートを実施した。アンケートの結果をもとに平成28年度中の実施に向けて鋭意検討を進めている。
	大学の重要なパートナーであるステークホルダーとの連携を強化することによって大学運営の改善を図る。	在校生、卒業生、保護者、地域住民等に対して、大学の活動への理解を深める取り組みを進め、連携を強化する。	同窓会、武蔵野会の体制整備を行うとともに、連携を強化する取り組みを推進する。	○	平成27年4月に校友連携課を新たに設置した。同窓会運営のサポートならびに武蔵野会（保護者会）の事務局として業務を推進、連携を強化することにより、武蔵野会からの十文字基金への寄附や、学生地域活動支援費（学生が地域活動を行う際に発生する交通費等の経費を支出）の補助を受けることができた。

② 外部評価委員会による評価結果

（外部評価委員会名簿）50音順

氏名	所属等
内海　房子	独立行政法人 国立女性教育会館 理事長
金子　廣志	新座市教育委員会教育長
川島　啓二	九州大学基幹教育院 教授 国立教育政策研究所 総括客員研究員
木村　眞琴	株式会社ニコン 代表取締役会長
小谷野　茂美	青梅市適応指導教室長 元昭島市立清泉中学校長
佐々木　正峰	公益財団法人 文化財建造物保存技術協会理事長 国立科学博物館顧問、元文化庁長官、本学園顧問
渋谷　治美	放送大学 特任教授（埼玉学習センター所長） 埼玉大学名誉教授、元埼玉大学副学長
住吉　廣行	松本大学 学長
山名　美和子	歴史作家

（主な意見等）

（○：外部評価委員、△：本学）

▶第一部　議題5:COC事業に関する平成27年度事業報告及び自己点検・評価報告、平成28年度事業計画について（報告）

○地域連携共同研究所は具体的にどのような活動を行っているのか。地域の産業界や自治体等とのメンバーと協働で研究を行っているのか、あるいは大学内で決めたテーマに対する研究を行っているのか。

△現在のところは学内での研究を中心に、各学科や研究所員のもつ専門性と地域のニーズ、大学と学生の求めるところを探りながら、地域と連携して取り組んでいる。

○COC事業は市にとって欠くことのできない事業となっている。平成28年2月に行われたシンポジウムは、非常に好評であり定期的に行って欲しいとの声が多く寄せられた。市民のための講座だけではなく、子どもたちを含めた事業も展開しており、「プレプラ」では、外遊びの中でのコミュニケーション能力、自然の中での発見や創造といった楽しさを育むことができた。その他にも、様々な事業が今後へと繋がる「種火」であり、拡大されていくであろうと感じている。さらに充実していただくことを望む。

▶第二部　議題6:大学の将来に向けての協議（協議）

○地道な地域連携・社会貢献への取り組みは大変ありがたく受け止めているが、これらが学生の誇りに結びついているのか。十文字学園としてのカリスマ性のようなもの、憧れられる存在となれる魅力を大学がしっかりと作り、受験生を含め存在生と保護者に対しても発信していく努力が大事である。

○松本大学では、地域連携の一環として、5年程度の契約で市のいろいろな部署にインターンシップ的に在学生を雇用していただいている。この活動の中で、学生たちを地域の次世代を担う人材として判断してもらうことができ、広報紙にも掲載された。1年半の活動終了後はプレゼンを実施し、市長から高評価を得た。新座市での評価が高まっているのであれば、十文字でも取り入れてみてはどうか。

○課外活動ばかりだと、専門性が乏しくなってしまう。学部学科が専門とする領域にも関わるとは思うが、どのようにしたら学生の専門性を豊かにすることができるかを考慮した上で、専門性を生かし、研究的要素を持たせた地域貢献・地域活動を学生育成に取り入れていくとよいのではないか。

○地域の問題と国際的な問題には相互に結び付きがある。COC事業の中で国際化を考えていくテーマを積極的に取り上げていただきたい。

○研究者各人がそれぞれに活動し、いろいろな研究が乱立している状態になっている。俯瞰して体系的に整理することで、実質的な地域貢献に繋がる研究になりうるのではないか。

5 平成28年度事業計画

（1）スケジュール

第2期中期目標（平成28～33年度）
（地域志向教育研究の全学的推進）
「地（知）の拠点整備（COC）事業」を始め地域を志向した教育・研究を全学的に推進し、
「地域の知の拠点」としての機能を高めて地域社会のさらなる活性化に貢献する。

区分	部門	中期計画	平成28年度COC事業計画
1 教育	地域教育開発部門	（COC事業等を通じた地域志向教育） 1.地域課題解決を担う学生を育成するため、地域志向科目の拡充など、地域社会への関心と理解を深める取組みを全学的に実施する。	1－1 地域コアカリキュラム（地域志向科目）の実施 • 地域志向科目（共通・専門）の充実
			1－2 pro-act型学生育成ためのリテラシー/コンピテンシーの完成
			1－3 ルーブリック評価システムの運用
			1－4 eポートフォリオシステム運用
			1－5 「FD改革プロジェクト」における学習評価研修、アクティブラーニング研修の実施
			1－6 「地域志向教育研究推進費」の公募、選考、採択、実施及び成果報告
			1－7 学生の地域貢献活動に必要な知識・技術等の講習会の開催（ボランティアセンター）
2 研究	地域実践研究部門	（COC事業等を通じた地域課題研究等） 2.地域の課題解決のための研究や現職教員等の資質向上のための取り組みを、自治体や教育委員会等との連携により全学的に推進する。	2－1 地域連携共同研究所を中心とした地域の課題解決に向けた共同研究の推進
			2－2 地域活性化に関する講演会、ワークショップ等の開催
			2－3 子どもの能力育成支援に関する講座の開催 （体力・読書力・表現力の向上）
			2－4 女性・高齢者のための講座 （情報処理、税務・会計、人権問題）
			2－5 「地域課題解決型研究推進費」の公募、選考、採択、実施及び成果報告
			2－6 地域との協働による地域課題解決型研究の全学的展開と、その成果を学生に還元する仕組みづくり（研究と教育の往還づくり） 1 学生が「地域で学ぶ」ための指針や観点、研究方法を検討 2 教育（学修）と研究の往還、研究に関する指導内容・方法を研究開発 3 学生が研究で得た知見や体験知を活かした社会貢献の研究開発・展開
3 社会貢献	地域連携創造・支援部門	（COC事業等を通じた社会貢献活動） 3.学生や教職員の社会貢献活動を全学的に支援する。	3－1 「地域連携創造・支援事業費」の公募、選考、採択及び成果報告
			3－2 平成26年度から平成28年度の事業の検証・中間報告 • 部門員を中心としたプロジェクトチームによる検証
			3－3 ボランティアセンターによる学生の地域貢献活動への支援推進
			3－4 地域との連携による社会貢献活動の促進（学内外における公開講座等の実施） 1 リカレント教育 2 公開講座 3 子ども大学（にいざ、しき） 4 市民総合大学 5 新座市内大学公開講座 6 教員NAVIの作成・配布 7 新座市との連携事業（産業フェスティバル） 8 緑のバトン運動支援活動

区分	部門	中期計画	平成28年度COC事業計画
4 全体	改革室・機構	（地域連携推進機構の強化） 4.地域連携コーディネーター等を継続して配置し、地域連携推進機構の企画、運営、コーディネート、広報機能を強化し、共同研究や自治体等との共同事業等を企画、実施する。	4−1 中間評価に基づく事業・組織の見直し
			4−2 教育・研究成果、地域貢献活動の学内外への積極的な情報発信の推進 1 ニュースレター等の発行による広報 2 HPによる広報 3 COC事業活動報告会（学内向け）の開催 4 COC事業成果報告シンポジウム（学内外向け）の開催 5 実績報告書の作成・広報
			4−3 地域のニーズの的確な把握による更なる実践教育の領域拡大 1 「＋（プラス）キャンパス連絡会議」の開催 2 「地域連絡協議会」の開催 3 学生へのCOC事業の説明会の開催
			4−4 学内の研究資源（シーズ）情報の集積・公表の推進 • 学内の地域貢献研究成果集積の仕組みづくり
			4−5 社会に貢献する人材育成のための高大連携の推進
			4−6 中期目標・中期計画・年次計画の実践 • 「大学改革室」にて教育体制及びガバナンスの強化・推進にあたり、中期目標・中期計画・年次計画の実施
			4−7 地域志向を含めた大学改革に関する基本方針の実践 • 第2次教育体制改革を進めるに当たり、教育を支える研究により、地域貢献をさらに効果的に往還できるシステムを含めた教育体制作りを目途とした大学改革における基本方針の実践
			4−8 地域連携に関する情報の収集、調査分析等のIR活動の実施 • 新座市の課題解決を取り入れた地域連携に関するIR活動の実施 • FD/SD活動の企画・実施
5 事業評価・事業推進	委員会	5-1.COC事業自己点検・評価委員会とCOC事業外部評価委員会において、事業評価を行い、事業の着実な実施を図る。	5−1 事業の着実な実施に向けて「COC事業自己点検・評価委員会」による自己点検・評価を実施
			5−2 事業の着実な実行を促すため「COC事業外部評価委員会」による外部評価を実施
	事務局	5-2.円滑なCOC事業の推進を図るための支援を行う。	5−3 地域教育開発部門、地域実践研究部門、地域連携創造・支援部門、事業評価部門への事業推進支援
			5−4 文部科学省提出書類、伝票処理、支出簿記載、会計処理

（2） 平成28年度地域志向教育研究費

教員の地域を志向した教育・研究等を推進するため、文部科学省の補助金を活用して「地域志向教育研究費」700万円を計上し、公募のうえ、応募のあった申請から26件を採択しました。

（支給限度額:1件につき50万円）

研究助成種目	細　目	
地域志向教育推進費	目的	授業を契機として学生による自主的な学びを支援し、活動を活性化する。
	概要	全学的、組織的な取組を推進するため、教員の創意工夫と自主性、自立性、及び参画意識を醸成する教育研究を支援する。
地域課題解決型研究推進費	目的	地域課題を解決するために、自治体等の担当者、複数学科の教職員を構成員として、実効性のあるプロジェクト研究を推進する。
	概要	地域における活動実績がある、もしくは研究実績のある教員がリーダーとなって地域課題解決に取り組む。
地域連携創造・支援事業費	目的	学生が地域自治体等とともに地域課題解決に取り組む活動を支援する。
	概要	新座市、市内NPO、ボランティアグループ等との連携による地域課題解決型教育・研究活動を行う。

（地域志向教育研究費の研究課題）

区分	分野	No.	研究課題名
地域志向教育推進費	教育	1	小学校現職教員における授業力向上研修プログラムの確立と教員養成カリキュラムの融合
	健康・福祉	2	新座市内の介護保険施設の利用者への傾聴ボランティア体験学習
	地域志向科目	3	地域志向教育実施のためのプログラム開発
	地域志向科目	4	地域志向教育での教育課程・教育内容・教育方法開発の研究
	地域情報支援	5	地域密着型メディアによる情報発信
	子育て	6	親子支援プロジェクト
	子育て	7	地域における子育て支援の中核的な役割を担う現職保育者育成に繋がる発達相談モデルの構築
	人間形成力、自然・歴史・文化、次世代育成	8	中山間地域と都市部における人間形成力を活用した次世代地域づくり組織者の育成と学士課程教育の創造
	まちづくり	9	子ども元気プロジェクト2016
	次世代育成	10	次世代地域人材育成プロジェクト
地域課題解決型研究推進費	地域産業	11	シャッター街で考える心理学的地域振興
	芸術・文化	12	ピアノによる「ふるさと新座館」ホール活性化事業
	子育て	13	学童保育における子どもの安全安心の確保と健全な育成を図るための取り組み
	人材育成	14	「産官地学」協働に依るPro-act型人材の育成機能強化策に係る実学的研究
	広報・地域学習	15	各種団体の広報誌と連携し、「いいね!にいざ2017年度版」を作成
	子育て	16	乳幼児を子育て中の保育者が行うピア・サポートとしての子育て支援事業「＋（プラス）ママの子育てサロン」開催と有効性の検討
	まちづくり	17	学生と共に考える大学キャラクターの活用とその展開―プラスちゃんがつなぐ地域の輪―
	子育て	18	子育て講座「はらっぱ」の開催による地域へ向けての子育て支援事業
	地域産業	19	サトイモの親芋活用プロジェクト
地域連携創造・支援事業費	キャリア支援	20	新座市女性職員と女子学生のWin−Winキャリア支援
	男女共同参画		
	健康・福祉	21	地域との連携活動を通した地場野菜の有効活用
	健康・福祉	22	「NPO法人暮らしネット・えん　えん食卓」食事サービス向上への取組み
	自然環境	23	ふるさとの緑と野火止用水を育むプロジェクト
	健康・福祉	24	産学官連携による地域の食材を使った商品の開発
	地域活性化	25	地域活性化事業・団体へのデザイン支援 ～「デザインリソース」機能および実践の「場」の提供～
	子育て	26	プレプラ@十文字の森

（3） 地域連携共同研究所の平成28年度研究課題

No.	区分	研究課題名（予算額:260万円、支給限度額:1件につき50万円）
1	継続	食育で育む管理栄養士の専門性
2	継続	新座市内介護・福祉・医療の資質向上と連携強化への取り組み
3	継続	十文字学園女子大学シニア健康教室
4	新規	ワークショップによる合意形成の手法とまちづくりサポートのスキーム構築に関する研究
5	新規	新座市地域住民の全身持久力の測定と運動指導と食事指導
6	新規	小児における食物アレルギーに関する意識調査と実態調査
7	新規	地域との連携によるオレンジカフェ実践への取り組み

（1）COC事業に係る文部科学省のアンケート結果

◆教育活動の状況

① 地域志向科目の設置状況

現在開設している科目数	78科目
うち、平成27年度新規に開設した科目数	74科目

② 地域志向科目にアクティブラーニングを導入している科目数

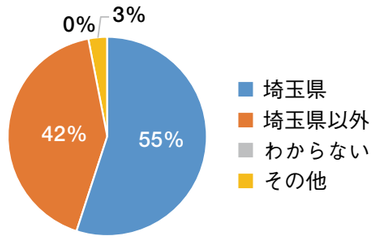
アクティブラーニングの科目数	17科目
当該科目の履修者数（実数）①	2739人
当該科目の履修者数の全学生に対する割合 （当該科目の履修者数①／全学生数）	92%

◆全学生を対象としたアンケート調査

全学生数	2982
有効回答数	2706
割合	90.70%

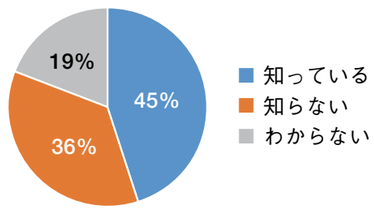
① 出身地

	人数	割合
埼玉県	1488	55%
埼玉県以外	1123	42%
分からない	5	0%
その他	88	3%
無回答	2	



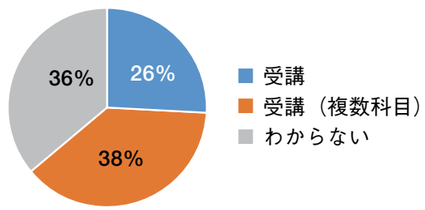
② 本学の地域に関する教育・研究・社会貢献活動の認知度

	人数	割合
知っている	1210	45%
知らない	974	36%
わからない	519	19%
無回答	3	



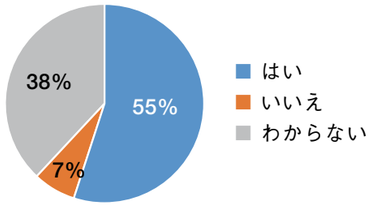
③ 地域志向科目等の受講の有無

	人数	割合
受講	687	26%
受講（複数科目）	1030	38%
わからない	980	36%
無回答	9	



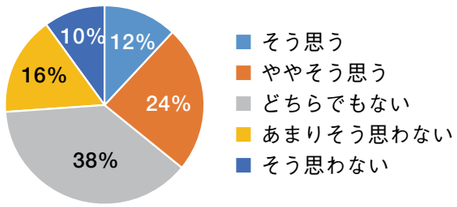
④　③の受講の結果、課題を含めた地域の現状の把握と、
地域の課題解決に役立つ知識・理解・能力は深まったか。

	人数	割合
はい	939	55%
いいえ	120	7%
わからない	650	38%
無回答	8	



⑤　③の受講の結果、県内の企業や自治体等に就職しようとするきっかけになったか。

	人数	割合
そう思う	190	12%
ややそう思う	393	24%
どちらでもない	622	38%
あまりそう思わない	256	16%
そう思わない	165	10%
無回答	91	

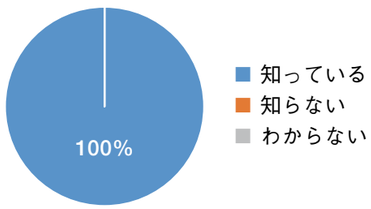


◆全教員を対象としたアンケート調査

全教員	147
有効回答数	78
割合	53.10%

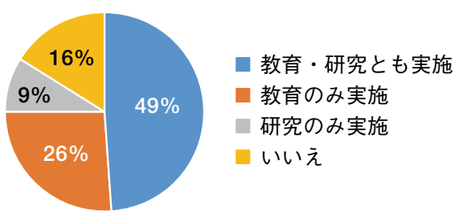
①　本学の地域に関する教育・研究・社会貢献活動の認知度

	人数	割合
知っている	61	100%
知らない	0	0%
わからない	0	0%
無回答	17	



②　「地域のための大学」として、地域を志向した教育・研究に参加しているか。

	人数	割合
教育・研究とも実施	38	49%
教育のみ実施	20	26%
研究のみ実施	7	9%
いいえ	12	16%
無回答	1	

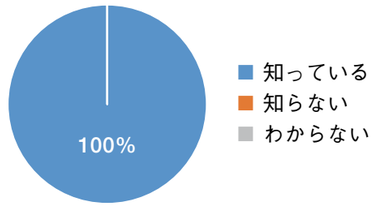


◆全職員を対象としたアンケート調査

全職員	74
有効回答数	74
割合	100%

①　本学の地域に関する教育・研究・社会貢献活動の認知度

	人数	割合
知っている	74	100%
知らない	0	0%
わからない	0	0%



◆連携自治体（新座市）の評価

問	答	理　由
1.本学の取り組みが文部科学省に副申した事業計画どおりに進捗していると思うか。	はい	本市との連携事業に積極的な姿勢で取り組んでくださっている。平成27年度においても「地域志向」を取り入れた教育・研究・社会貢献活動を行っていただき、本市のまちづくりに貢献することが盛り込まれた当初の事業計画どおりに進められている。
2.本学の取り組みが円滑な連携のもとに実施されていると思うか。	はい	大学側の連携担当者からの情報提供（学内COC事業に関するパンフレットなど）や、定期的な会議の開催など、連絡を密に取り、情報共有の場も十分に設けられている。
3.本学の取り組みは「地域のための大学」として満足するものか。	はい	COC事業の取組は本市が推進する「連帯と協働によるまちづくり」に直結するものであり、学生や教職員が率先して地域に出向き、連携を深める姿勢はまさに「地域のための大学」としての役割を十分に果たしているものと考えている。

（2） COCニュースレター

十文字学園女子大学
JUMONJI UNIVERSITY

文部科学省 地(知)の拠点

COCニュースレター

新座市をキャンパスに！＋（プラス）となる人づくり、街づくり

<NO. 4> 平成27年8月25日発行
十文字学園女子大学地域連携推進機構
（COCセンター）

COC事業のさらなる展開に期待

地域連絡協議会・＋（プラス）キャンパス連絡会議 合同会議を開催

各分野の代表者が直接意見を交わした合同会議

地域の代表者と本学教職員が地域連携について話し合う「地域連絡協議会」と「＋（プラス）キャンパス連絡会議」の合同会議が7月29日、7号館6階会議室で開催されました。地域からは新座市、朝霞市、志木市、和光市、清瀬市の各行政・教育の担当者、新座市内の警察署、商工会、社会福祉協議会、ＰＴＡ保護者会連合会、ＮＰＯの各代表者17人、本学からは地域連携推進機構長の横須賀薫学長をはじめＣＯＣ事業に関係する教職員15人が出席しました。

横須賀学長は開会のあいさつで「ＣＯＣ事業は順調に推移していると思うが、そろそろ次の展開を期すべき時期。本日はいろいろとお話を聞かせていただき、次の発展を期待したい」と述べました。

会議では、ＣＯＣ事業の概要と活動状況の説明の後、地域連携推進機構副機構長の星野敦子教授が、事例報告として、野火止用水保全・活用に関わるボランティア団体と行政のプラットフォーム機能を持つ「ふるさとの緑と野火止用水を育む会」（ＨＵＧネット）の活動や、ＮＰＯ法人新座子育てネットワークと連携して大学内に子どもの外遊び体験施設を設ける「プレプラ@十文字の森」事業などについて話しました。

その後、意見交換が行われ、出席者からは、「ここ数年で十文字との連携は深まっている。大学の作成した地域学習テキスト『いいね！にいざ』は、市職員の研修でも活用したい」、「唯一、東京都からの参加となったが、清瀬も濃厚な地元だと思っている。こんなに多くのチャンネルがあるのだと再認識した。今後、さらに強い関係を築かせていただきたい」、「大学の知が地域に解放されることはとても大きな意味があると思っている」などの発言がありました。

26年度の成果を発表　学生ホールでポスターセッション

同日、平成26年度の地域志向教育研究費採択課題（ＣＯＣ採択テーマ）の成果報告会（写真右）が、学生ホールで開かれました。ポスターセッション形式の発表会では、用意したポスターや資料の前で、担当の教員や学生が訪れた方に説明をし、質問に答えました。見学した地域の方からは「大学でどんな研究をしているのか、直接聞けてよかった。こうした機会は今後も設けてほしい」などの声が聞かれました。

地域連携活動 TOPICS

大江戸新座祭り開会式に出演したプラスちゃん

- 5/21　平林寺見学ツアー（新入生を中心に参加者約50名）
- 5/23　志木市観光ガイドブック作成に協力（写真モデル）
- 6/14　新座市議会の休日議会議場コンサートに出演（吹奏楽部）
- 6/27～28　西分夏まつり、ホタル観賞会、灯明まつりに協力
- 7/3　七夕 Eve Fes（浴衣イベントで地域の方と交流）
- 7/18　大江戸新座祭りにプラスちゃんが登場
- 7/24　ＣＯＣ事業平成26年度実績報告書を発行
- 7/29　地域連絡協議会・＋（プラス）キャンパス連絡会議合同会議
- 8/1～2　朝霞市民まつり「彩夏祭」に協力（よさこいフェスタの司会など）

２７年度のＣＯＣ採択研究テーマ（40件）です！

採択区分	代表者	課題名
地域志向教育推進費	松永　修一	自主社会活動の開発（ワークショップを用いた地域の課題解決と人材育成の手法に関する研究）
	風間　文明	新座市「を／で」心理学する―地域に展開するコミュニティ心理学研究の基礎づくり
	池間　里代子	新座歴史探訪Ⅱ
	佐藤　陽	地域福祉活動（知的障害者余暇活動支援ボランティア）体験学習
	大山　博幸	新座市内の介護保険施設の利用者への傾聴ボランティア体験学習
	山口　由美	志木市おやこ支援プロジェクト（通称：ビタミン愛プロジェクト）
	山本　悟	小学校現職教員における授業力向上研修プログラムの確立と教員養成カリキュラムの融合
	綿井　雅康	地域と連携した実践の教育的効果を高めるための方策の検証
	安達　一寿	地域志向教育での教育課程・教育内容・教育方法開発の研究
	安達　一寿	地域志向教育実施のためのプログラム開発
地域課題解決型研究推進費（学科横断プロジェクト）	池川　繁樹	新座市地域住民の全身持久力の測定と運動指導と食事指導
	大宮　明子	人材育成方針「Ｊモデル」開発及び実施のための基礎的研究
	徳野　裕子	新座市とその周辺地域における農産物の栄養学的側面からの課題解決
	布施　晴美	学童保育における子どもの安全安心の確保と健全な育成を図るための取り組み
	上堀内　伸子	乳幼児を子育て中の保育者が行うピア・サポートとしての子育て支援事業「＋（プラス）ママの子育てサロン」開催と有効性の検討
	星野　敦子	プレプラ@十文字の森
	石川　敬史	恋する大学改革 ｐａｒｔⅡ　～地域貢献＋（プラス）教育改革～
	和田　安代	地域患者の治療における有用なレシピ開発と食生活調査
	松本　晃裕	地域アミロイドーシス患者におけるカテキンの治療および予後に対する効果
	鈴木　康弘	子ども元気プロジェクト２０１５
地域課題解決型研究推進費（若手スタートアップ支援）	齋藤　麗子	新座市の児童生徒の喫煙開始防止に向けた指導者養成
	小林　実	新座市における地域文化アーカイブズの創造
	石野　榮一	埼玉クイズ王予選会場を誘致し地域を大いに学ぶ
	大西　正行	各種団体の広報誌とのコラボレーション
	平田　智秋	「健康と運動」から新座市民ロードレースへ
	東畑　開人	新座市「フシギマップ」プロジェクト
	加藤　亮介	地域連携による地域産業情報の発信プロジェクト
	鈴木　晴子	新座市内の公立保育園と協働した実習体験を基盤に置く保育者養成初期段階のカリキュラム検討（２）
	久保田　潔子	ピアノによる「ふるさと新座館」ホール活性化事業
	星野　祐子	新座駅前における「ふるさと」創生の試み
地域連携創造・支援事業	向井　美穂	子育て・子育ち支援におけるリスク支援の在り方の検討 ～先駆的取り組みをしている団体との情報交流　その２～
	岡本　節子	「ＮＰＯ法人　暮らしネット・えん　えん食卓」食事サービスの改善への取組み
	棚谷　祐一	地域密着型メディアによる情報発信
	小林　三智子	地域との連携活動を通した地場野菜の有効活用
	亀田　温子	新座市女性職員と女子学生の　Ｗｉｎ－Ｗｉｎ　キャリア支援
	金高　有星	産学官連携による地域の食材を使った商品の開発
	狩野　浩二	中山間地域の豊かな自然と都市部における人的物的資源との融合による新たな人材育成プランの創造
	星野　祐子	学生と共に考える大学キャラクターの活用とその展開　―街に飛び出せ！プラスちゃん―
	星野　敦子	ふるさとの緑を育むプロジェクト
	星野　敦子	野火止用水保全プロジェクト

【今後のＣＯＣおよび地域連携事業】

- 9/18（金）　秋の全国交通安全運動出発式（志木駅南口）の街頭啓発に本学の学生とプラスちゃんが参加
- 9/30（水）　第２回「＋（プラス）キャンパス連絡会議」（13：30～、７号館６階会議室）
- 10/3（土）　ピアノによる“ふるさと新座館”ホール活性化事業「ふるさとにいざ❖オータムコンサート」（14：00～）
- 10/4（日）　新座市民体育祭に健康栄養学科学生がダンスパフォーマンスで出演
- 10/10（土）～11（日）　新座市民まつり産業フェスティバルに“ソウキリンくらぶ”と“いもプロ”が出店
  ★10/11（日）は、パレードに健康栄養学科学生がダンスパフォーマンスで出演
- 10/17（土）　新座市内大学公開講座（第１回）「絵画と文学にみる時代感覚」（13：30～）
  ★10/31（土）（第２回）「琳派と文学」（13：30～）、11/7（土）（第３回）「浮世絵と文学」（13：30～）
- 10/29（水）　本学ＣＯＣ事業に係る新座市との意見交換会（13：30～、７号館６階会議室）

本学のCOC事業もいよいよ２年目に入りました。より地域の皆さんと連携した取り組みを進めていきたいと思います。８号館１階COCセンターの前に、掲示板とパンフレットスタンドを設置しましたので、そちらでも情報を発信していきます。また、ニュースレターに掲載する情報がございましたらお寄せ下さい。今後ともCOC事業へのご協力をよろしくお願い致します。（編集部）

十文字学園女子大学
JUMONJI UNIVERSITY

文部科学省 地(知)の拠点

COCニュースレター

新座市をキャンパスに！✤（プラス）となる人づくり、街づくり

<NO. 5>平成27年11月18日発行
十文字学園女子大学地域連携推進機構
（COCセンター）

本学で開催！

第４回埼玉クイズ王決定戦　参加者大募集！

クイズを通して埼玉の魅力を発見する「第４回埼玉クイズ王決定戦」の予選が、本学で開催されます。新座市をはじめとする地域との結びつきを深め、郷土を学ぶチャンスです！「埼玉県内で行われる『たたら祭り』といえば、開催されるのはどこの市町村？」などといった、埼玉の歴史や文化、観光など幅広いジャンルからクイズが出題されます。優勝チームには台湾旅行、参加者全員に素敵な参加賞のプレゼントがあります。

◇予選日時・会場：12月20日（日）13：00～15：30　十文字学園女子大学
◇参加資格：１チーム（中学生以上の方を含む３人）　※メンバーは学内外問いません！　参加費無料

参加者を募集中です。12月８日までに下記へご連絡ください。

★応募申込・問い合わせ：地域連携推進課（内線270）
TEL:048-477-0958（直通）※土・日・祝日を除く９：00～17：00 / Mail：coc@jumonji-u.ac.jp

「プレプラ」がいよいよスタート！ ～12月から十文字の森で～

本学内に子ども達の外遊びの場を設ける「プレプラ」事業が、12月５日、十文字の森でスタートします。
「プレプラ」とは「ソトプレ」と十文字の「プラス」を組み合わせた名称。NPO法人新座子育てネットワークが進めていた自然の中で子どもの外遊びを通して自主性や判断力を育む取り組み「ソトプレ」を、本学と連携して行います。
12月は毎週土曜日に開催します。子ども達の笑顔と成長が楽しみですね。

音楽で地域とつながる　ふるさと新座館でコンサート

10月３日、「ふるさとにいざ✤オータムコンサート」を開催しました。ふるさと新座館にあるスタインウェイピアノを活用しホールを活性化しようと、本学と新座市教育委員会との共催で実施しました。人間福祉学科の久保田葉子講師とヴァイオリニストの上野真理さんによる演奏のほか、同科の学生７人が手話ソングを披露。コンサートの題名にちなんで童謡「ふるさと」を手話付きで歌い、会場にも呼びかけて観客全員で合唱。会場は大きな拍手に包まれました。
動画が本学HPに載っています。ぜひご覧ください。

十文字の学生も大活躍　新座市産業フェスティバル

10月10日～11日にかけて開催された新座市民まつり産業フェスティバル。本学の学生も様々な活動に参加しました。“ゾウキリンくらぶ”と“いもプロ”のブース出店、商工会青年部との合同企画「新座クイズ王決定戦」の運営や司会を行いました。他にも健康栄養学科の学生によるダンスパフォーマンスの披露、ゴミ拾いタイムの手伝い等、地域と協力してお祭りを盛り上げました。

地域連携活動 TOPICS

新座駅前で街頭募金活動を行う学生たち

9/16	ひまわりプロジェクトに教職員と学生が参加
9/27	新座市栄四丁目商店会「さんま祭り」に参加
9/30	第２回「＋（プラス）キャンパス連絡会議」開催
10/1・6	新座駅前で赤い羽根街頭募金活動
10/3	「ふるさとにいざ✤オータムコンサート」開催
10/4	新座市民総合体育祭に出演（ダンスパフォーマンス）
10/10～11	新座市民まつり産業フェスティバルに参加
10/29	「ＣＯＣ事業に係る新座市との意見交換会」開催
11/1	すきっぷたうん商店会青年部“チャリティ屋台村”に参加
11/7～8	新座市収穫祭に“いもプロ”が出店
11/8	新座市国際交流デーに吹奏楽部が出演

ＣＯＣ事業で新座市との意見交換会を開催

会議で発言する須田健治市長

新座市と本学教職員がＣＯＣ事業について話し合う意見交換会が、10月29日、７号館６階会議室で開催されました。新座市からは須田市長、金子教育委員会教育長をはじめ行政・教育の担当者９人、本学からは地域連携推進機構長の横須賀学長をはじめＣＯＣ事業に関係する教職員17人が出席しました。
会議では、現在の新座市との主な連携事業を本学が説明し、特に市民の健康づくり事業に対して今後どのような貢献ができるかを述べました。新座市からは、現在活動中のものから、今後想定される市と本学の連携事業について幅広い視点から提案がありました。
その後、全体協議が行われ、出席者からは、「多くの学生がココフレンド（子どもの放課後居場所づくり事業）にスタッフとして来てくれるとありがたい」「市が開催するイベントなどで、市民と学生が触れ合う機会を作っていきたい」「防災は街を知るうえで良い切り口なので、今後は市の防災活動に大学も関わっていきたい」などの発言がありました。

ＣＯＣ研究プロジェクト pick up　地域志向教育研究の取り組みを紹介します

新座市「フシギマップ」プロジェクト

◇代表者：東畑開人（人間発達心理学科 講師）
◇プロジェクト構成員：渡辺哲也氏（新座市）、東畑ゼミ９名

新座の“むかし”と“いま”を不思議でつなぐ

新座市にはどんな不思議があるのか？東畑ゼミでは新座市の学芸員の協力を得て、新座に語り継がれている昔話や伝説を調べてその場所へ出向き、昔話と現代の風景をつなぐ活動をしています。
「普段暮らしているこの地に、そんな伝説があったのか」という検証にはじまり、学生の感性を生かしながら「こんな妖怪がいたんじゃないか？」と現代人にとっての妖怪の姿を想像し、考える。それらの成果を桐華祭で発表しました。現在「新座市ふしぎMAP」を作成中です。
学生は市の職員とディスカッションをしたり、団地の高齢者や寺の住職、タクシー運転手などに現代の怖い話・不思議な話についてインタビューをしました。このような交流を通じて学生の交渉力・人間力も鍛えられました。また新座の歴史や文化を再発見することで地域を見る目が変わり、理解も深まりました。
今後は、作成したMAPを観光案内所などで活用してもらいたいと考えています。

産学官連携による地域の食材を使った商品の開発

◇代表者：金高有里（食物栄養学科 講師）
◇プロジェクト構成員：名倉秀子（食物栄養学科 教授）、岡本節子（食物栄養学科 准教授）、工藤貴子（食物栄養学科 助手）

地域の企業と連携して商品開発を目指す

金高ゼミの学生は、志木駅近くにあるコミュニティスペース“私ivian（アンドリブラン）”と連携し、地域の食材を使った商品の開発を目指しています。企業側からの意見を元に改良を重ね、メニューの試作・提案を続けています。
消費者のニーズに応える食品を作る意識に加え、コストパフォーマンス、食材管理、栄養価など、多くの視点から考えて試行錯誤しています。10/4には「朝霞アートマルシェ 2015」で私ivianと共同出店し、「キャロコロ」という新座産のにんじんを使ったスイーツを販売しました。企業との打ち合わせ、プレゼン、試作、調理などの工程は、学生が主体となって行っています。さらに、新座市内のダチョウ牧場、“並木屋”との商品開発も進んでいるようです。

保育園で食育活動

８月に新座市の保育園で、園児と一緒にアイスクリームの調理を行いました。自分達が食べているものはどのようなものから作られているのか？園児が分かりやすく、楽しく作れるように工夫しました。

「大学自慢コンテスト」にプラスちゃんと参加

10月８日、松本大学（長野県松本市）で開催された「大学自慢コンテスト」に本学が参加しました。学生と教職員、さらにプラスちゃんも登場し、地域連携の取り組みなどについてプレゼンテーションを行いました。入賞はなりませんでしたが、地域活動に学生が参加している点を評価されました。

【今後のＣＯＣおよび地域連携事業】

11/22（日）・29（日）	市役所本庁舎前市民広場のオープンカフェで“いもプロ”が出店
12/20（日）10:00～15:00	野火止用水ご当地グルメ・ゆるキャラフェスティバルに“HANネット”“プラスちゃんくらぶ”“いもプロ”が参加
12/20（日）13:00～15:30	本学で埼玉クイズ王決定戦予選を開催

9:30の「第２回プラスキャンパス連絡会議」と10:29の「COC事業に係る新座市との意見交換会」では、地域の方の意見を伺える貴重な場となりました。これからも地域の声を聞いて、大学とつなげていきたいと思います。ニュースレターに掲載する情報も、引き続きお待ちしております。（編集部）

十文字学園女子大学
JUMONJI UNIVERSITY

文部科学省 地(知)の拠点

COCニュースレター

新座市をキャンパスに！✤(プラス) となる人づくり、街づくり

<No. 6>平成28年2月19日発行
十文字学園女子大学地域連携推進機構
（COCセンター）

平成27年度COC事業シンポジウム　2月27日(土) 開催

「超高齢社会に向けた健康長寿のまちづくり」

昨年4月に、地域連携共同研究所を設置し、本学の知見を活かした取り組みを新座市と連携して進めています。このたび、その取り組みのひとつである運動や食育など、健康をテーマにしたシンポジウムを開催します。
地域の方と一緒に、健康長寿のまちづくりについて考えてみませんか？

♪ プログラム ♪

◆開会挨拶
学長/地域連携推進機構長　横須賀 薫

◆基調講演「健康長寿社会を実現する Smart Wellness City」
筑波大学大学院 教授　久野 譜也氏

◆エクササイズタイム
健康栄養学科 教授　飯田 路佳

◆パネルディスカッション
新座市長　須田 健治氏
筑波大学大学院 教授　久野 譜也氏
前新座市教育委員会委員長　伊藤 延世氏
食物栄養学科 教授　長澤 伸江
コーディネーター
地域連携推進機構 副機構長 星野 敦子

参加費は無料です！みなさまのご参加、お待ちしています♪

♪日時・会場：2月27日（土）13：30～16：00　ふるさと新座館ホール
♪申込・問い合わせ：十文字学園女子大学 地域連携推進課（内線270）
TEL:048-477-0958（直通）※土・日・祝日を除く9：00～17：00
♪COCホームページ（http://www.jumonji-u.ac.jp/coc/）の専用メールフォームからも申込可能

埼玉クイズ王決定戦で本学チームが大活躍！

12月20日（日）、本学記念ホールで県が主催する「第4回埼玉クイズ王決定戦」の予選会が開催されました。大人から子どもまで200名を超える参加者が県内各地から集まり、熱戦を繰り広げました。

本学からは学生や教職員による12チーム（3人1組）が参加。石野教授率いる学生チームと学生支援課チームが○×、三択の1・2回戦を勝ち抜き、最終予選の早押しクイズまで進みました。当日はライターデザイン同好会が作成した過去問解説集も配布し、大好評でした。

昨年の1回戦敗退から大躍進の石野榮一教授と学生チーム

いつまでも若々しく、元気に！シニア健康教室

昨年11月から2月まで、毎月1回、シニア健康教室を本学記念ホールで開催しました。近隣住民の方々の健康増進を目的に、健康栄養学科が地域連携事業として実施。血圧や体脂肪率の測定、ミニ講義、音楽に合わせたエクササイズなどを行いました。

参加者からは「いい運動になるし、とても楽しい。また参加したい」などの感想が聞かれました。

飯田路佳教授によるタオルを使ったエクササイズ

地域連携活動 TOPICS

11/22・29　市役所本庁舎前のオープンカフェでいもプロが出店
11/23～2/8　「シニア健康教室」を開催（4回開催）
12/5～12/26　「プレプラ＠十文字の森」開催（4回開催）
12/12　「和食文化と日本の心を知ろう！プロの調理人によるセミナーと調理実習（第3回）」に食物栄養学科の学生が参加
12/20　「野火止用水ご当地グルメ・ゆるキャラフェスティバル」にNPOネット、プラスちゃんくらぶ、いもプロ、ゾウキリンくらぶ、「地域で学ぶ」の受講学生が参加（こどものクラフト教室、NPOネットを所等）
本学記念ホールで「埼玉クイズ王決定戦予選会」を開催
1/8　「110番の日」キャンペーンに児童教育学科の学生が参加
1/14　第3回「＋（プラス）キャンパス連絡会議」開催
2/6　「チャリティーもちつき大会」にゾウキリンくらぶ、狩野ゼミ、J和太鼓部、「地域で学ぶ」受講学生が参加
2/7　「ソトプレフォーラム」開催
2/8　「働く女性のキャリアアップを考えるワークセッション」開催
2/18　ゾウキリンくらぶ、狩野ゼミが「チャリティーもちつき大会」の収益を“新座市こぶし福祉基金”に寄付

COC事業と新座市で地域の健康づくりを　第3回＋(プラス)キャンパス連絡会議を開催

健康に関する活動や課題について意見交換

新座市と本学教職員がCOC事業について話し合う「＋（プラス）キャンパス連絡会議」が、1月14日（木）、7号館6階会議室で開催されました。新座市からは行政・教育の担当者、保健センター、警察署、商工会、社会福祉協議会、農産物直売センター、PTA保護者会連合会の各代表者12人、本学からは地域連携推進機構長の横須賀学長をはじめCOC事業に関係する教職員19人が出席しました。

会議では、市民の健康づくりのために市が行っている活動の紹介とともに、本学COC事業への期待などが示されました。市のイベント等に学生が参加し地域との交流が増えることが、学習の場としても有効であるとの話がありました。

その後の意見交換では、「健康事業のイベントを学生たちとつくりながら、若い世代を育てていきたい」「大学内でオレンジカフェ（認知症カフェ）の設置を検討していただけるとありがたい」「市民が自らできることについて、市と大学が協力して考えていきたい」などの発言がありました。

COC研究プロジェクト pick up　地域志向教育研究の取り組みを紹介します

地域密着型メディアによる情報発信

◇代表者：梶谷祐一（メディアコミュニケーション学科 准教授）
◇プロジェクト構成員：加藤亮介（メディアコミュニケーション学科講師）、美和さなえ（すまいるエフエム株式会社）

学生が制作！地域に向けたラジオ番組

ラジオ研究部の活動をベースに、新座市のコミュニティFM局「すまいるFM」が放送する30分間のラジオ番組「JUMONJI☆Campus Tea Party」を制作しています。

学生が主体となって企画、台本作り、収録を行い、女子大生の目線によるエンターテインメント情報の提供、最近気になっていることについてのトーク、本学のイベントの告知などを行っています。昨年7月に始まって以来、現在までに30回以上を放送。外部へ発信することを通じて、学生は「情報リテラシー」を学び、また番組制作を楽しみながら社会人基礎力を養います。リスナーの反応も徐々に増え、地域とのつながりを実感。コンクールに出場することを目標にして、プロのパーソナリティのレクチャーを受けるなど、質の向上にも勤んでいます。

今後は、地元の方へのインタビューを実施し、地域との関わりを増やしたいと考えています。また学内のイベント等で紹介したいものがあれば番組内で告知もできますので、ぜひ活用してください！

♪エリア外でも、PCでは「サイマルラジオ」、スマートフォンでは無料アプリ「リスラジ」で聴くことができます。

♪番組は 毎週日曜22:30～23:00に放送中！
再放送は 毎週金曜日深夜1:30～2:00♪

おやこ支援プロジェクト

◇代表者：山口由美（人間福祉学科 准教授）
◇プロジェクト構成員：小笠原順子、塩沢夕起子、島中由美子、北澤恭子、橋部子、平光里恵、小林美里（NPO法人志木子育てネットワークひろがる輪）、山下美香、金子里佳（志木市西原子育て支援センター）

楽しいイベントで地域の親子を支援

“カプラブロック”、それは建物や乗り物、子どもが入るやぐらまで造れる変幻自在の木製ブロック。このブロックを使った父子のためのワークショップを、地域の子育て機関と連携して志木市ふれあいプラザで開催しました。普段子どもとの時間がとれない父親が、一緒に遊ぶことで子育てに積極的に関わることを目指したイベントです。当日は子育て相談コーナーも設置。200名を超える参加者があり、大盛況でした。

学生も当日の準備、受付、ブロック組立作業のアシスト、片付け等で参加。子どもたちと実際に触れ合うことで、刺激を受けていました。今後は地域と協力して、学内での開催や、イベント支援ができる学生の育成も考えていきます。

子育ての悩みを共有

子育てに悩む地域の母親を対象に、子育て支援講座を開催しています。開催中は教員と学生がお子さんを預かり、お母さん同士でじっくりと悩みを相談。学生たちは泣きだす子ども達に奮闘しながらも、よい勉強になっています。次回は3月1日（火）に開催予定。

【今後のCOCおよび地域連携事業】

2/21（日）　神川町で、新座市と神川町の農業女性と学生による料理交流会（ふるさと支援隊）
2/22（月）　東畑ゼミの学生が「新座ふしぎマップ」を発刊
2/27（土）　ふるさと新座館ホールでCOC事業シンポジウム
3/5（土）　ふるさと新座館での新座市デビューセミナーに“ゾウキリンくらぶ”が出店
3/26（土）　桜まつり黒目川ウォーキングに参加

健康栄養学科のシニア健康教室に編集部も参加してみました。音楽に合わせて動くエクササイズはなかなかハードで、普段の運動不足を痛感しました。運動後に聞いた飯田先生の「音楽があると楽しくなる。エクササイズを上手にやりきることが自分の自信となり、それが笑顔につながっていく」というメッセージが印象的でした。（編集部）

（3） COCセンターニュース（学内広報:掲示用）

十文字学園女子大学 COCセンターニュース №1

新座市議会の休日議会
議場コンサートに本学の吹奏楽部が出演
観客を魅了 「ありがとうー」の声も

6月 14 日午前、新座市役所２階の議場を軽やかな、そして力強い音色が包んだ。演奏終了後には満場の拍手、傍聴席の市民からは「ありがとうー」との声も掛かった。

14日に開催された新座市議会６月定例会の休日市議会。一般質問の合間を利用した議場コンサートが企画され、本学から吹奏楽部が初めて参加した。日頃の練習を披露することが目的だが、地域連携活動（本学ＣＯＣ）の一環として学生が地域との結びつきを深める狙いも込めて企画された。

コンサートには石井英部長（メディコミ３年）をはじめ 24 名の学生が参加し、指揮は音楽家・西田裕氏が務めた。須田健治市長、平野茂議長ら市職員、市議会議員や傍聴席の市民を前に、「サウンド・オブ・ミュージック・メドレー」など５曲を演奏。会場からの声援に応えアンコール曲も追加演奏した。

力強い音色、軽やかなリズムなど学生は日頃の練習成果を存分に発揮し、演奏終了後には満場の拍手が送ら、学生は充実した表情を浮かべていた。

練習を指導する指揮者の西田氏は「指導を始めて８年だが年々力を付けてきている。地域の人たちに演奏を聴いてもらうことは学生の成長には大事な機会だと思う」と話した。また、石井部長は「初めての議場コンサートで緊張したが、新座市の方々の温かい応援で部員も力を発揮できた。これからも福祉施設での演奏など地域との関わる中で活動していきたい」と地域と結びついた活動に意欲を示していた。

（取材・記事：メディアコミュニケーション学科 石野 栄一教授）

写真：演奏終了後、満場の拍手が送られた

十文字学園女子大学
COC センターニュースNo.2

～ピアノによる"ふるさと新座館"活性化事業～

ふるさとにいざ✧オータムコンサートを開催

10 月 3 日（土）ふるさと新座館ホールで、"ふるさとにいざ✧オータムコンサート"を開催しました。

本コンサートは、本学が新座市教育委員会と連携して"ふるさと新座館ホール"の活性化を図ることを目的に COC 事業として実施したもので、学生が企画段階から参画し、公演のチラシはメディアコミュニケーション学科の４年生、原田紗帆さんがデザインしました。

プロのピアニストでもある人間福祉学科の久保田栄子先生がバイオリニスト上野貴理さんと協演し、「こうもり序曲やカルメン・ファンタジーなど、芸術の秋にふさわしい各種らしい演奏を披露しました。

また、人間福祉学科の学生 7 名が手話ソングチームを結成し、この日のために練習を積み、会場の皆さんと一緒に「ふるさと」を歌いました。

手話ソングチーム
人間福祉学科 保育コース１年生

十文字学園女子大学
COC センターニュースNo.5

留学生が即席の合唱団
新座市老人福祉センターを訪問、歌で交流

メディアコミュニケーション学科３年に在学している留学生９名が 10 月 21 日、新座市立第二老人福祉センター「元気の屋」を訪問し、日本語や中国語で歌を披露して、同センターに集う高齢者の皆さんと交流を行いました。

演習（ゼミ）を受講する留学生は、全員中国出身で、桐華祭での発表に向けて即席の合唱団「虚美人」を結成しましたが、"手作演習を兼ねて"（ゼミ長のリテイギュウさん）、地域の人たちに歌を聞いてもらおうと交流を企画したものです。

当日は同センターの全面協力もあり、地域サークルの皆さんがフラダンスで学生を迎えてくれました。学生は、「大きな古時計」「赤とんぼ」を日本語で、中国の恋愛歌を中国語に手話を付けて披露し、最後は、「赤とんぼ」を会場の人たちと合唱で締めくくりました。約 50 人の方々が集まった会場からは、「素晴らしい歌声」「また来てください」といった声援も飛び、学生たちは緊張の中にも充実した表情を浮かべていました。

（取材・記事：メディアコミュニケーション学科 石野 栄一教授）

十文字学園女子大学
COC センターニュースNo.3

新座市民体育祭に 健康栄養学科
ダンスパフォーマンスチームが出演

10 月 4 日（日）に新座市の総合運動公園陸上競技場で開催された新座市民体育祭（来場者約 7,300 人）に健康栄養学科のダンスパフォーマンスチーム（自主社会活動、指導：飯田路佳教授）の学生 17 人が出演し、元気いっぱいの素晴らしい演技を披露しました。

開会式で須田新座市長から、「十文字学園女子大学は地域貢献活動に積極的に取り組まれ、本日も体育祭のお手伝いやダンスパフォーマンスを披露していただく」との紹介がありました。ソウキリンの応援もあり、演技終了後は、会場からの温かい拍手に包まれました。

10 月 11 日の新座市民まつり産業フェスティバルのパレードにも参加して、ダンスパフォーマンスを披露する予定です。

地(知)の拠点

十文字学園女子大学
COC センターニュース№4

新座市民まつり産業フェスティバルに本学の学生が参加

10月10日（土）・11日（日）の2日間にわたり新座市役所・新座市商工会館周辺で開催された新座市民まつり産業フェスティバルに、チャリティ募金のブース出店や「商工会青年部・十文字コラボ「新座クイズ王決定戦」、ダンスパフォーマンスなどで、本学の学生約50名が参加しました。

◆チャリティー出店

「ソウキリンくらぶ」と「さつまいもプロジェクト（いもプロ）」が2日間にわたりチャリティー募金のブースに出店しました。

ソウキリンくらぶは、ネパールの紅茶などを販売し、ネパール地震被災地募金に協力していただいた方に現地のカレンダーなどをプレゼントしました。

いもプロはサツマイモを使った手作りお菓子「スノーボール」を販売しました。売上金は東日本大震災の義援金として寄付します。

◆商工会青年部・十文字コラボ"新座クイズ王決定戦"

11日午後1時からは、アトラクションとして特設舞台で、新座市商工会青年部・本学学生とのコラボによる「新座クイズ王決定戦」が開催されました。企画から運営、司会まで学生が参加し、出場者の募集も手分けをして行いました。プラスちゃんとソウキリンが見守る特設ステージでは、小学生を中心とした10チームがソウキリンやプラスちゃん、鉄剤アトムなどの地元クイズに挑戦し、会場を盛り上がっていました。

◆ダンスパフォーマンス

11日午後1時30分からは、新座市役所から商工会館の間の歩行者天国で、健康栄養学科の学生によるダンスパフォーマンスが行われました。講技を披露したのは、この夏から活動を開始した同学科のダンスパフォーマンスチーム15名で、学外での活動は先週の市民体育祭に次いで2回目となりました。おそろいのユニフォームで元気のいいダンスを披露すると、沿道の観客から大きな拍手が送られていました。

十文字学園女子大学
COC センターニュース№6

志木駅南口 すきっぷたうん商店会青年部「チャリティ屋台村」に 本学の学生が参加

11月1日（日）志木駅南口近くの三軒屋公園で、すきっぷたうん商店会青年部による第10回「チャリティ屋台村」が開催されました。地域に住む子供達にすきっぷたうん商店会を身近に感じてもらい、郷土愛を育むことができればと、地域の小学生や園児を対象に、わたあめ・とんけ・掲そばなどを全て100円で提供し、収益は新座市に寄贈するもので、大勢の親子がご来場しました。

本学からは、「プラスちゃんくらぶ」や「さつまいもプロジェクト」、「健康栄養学科ダンスパフォーマンスチーム」、「ネイルサロン」など、学生23名が参加しました。

◆さつまいもプロジェクト

「さつまいもプロジェクト」は、サツマイモを使った手作りお菓子、さつまタルトやカップケーキを販売しました。売上金は東日本大震災の義援金として寄付します。

◆プラスちゃんがコバトン、ソウキリンと共演（プラスちゃんくらぶ）

◆ダンスパフォーマンス

健康栄養学科ダンスパフォーマンスチームは、「ドレミの歌」に合わせて幼児と一緒に踊ったり、「ジョイフルジョイフル（賛美歌）」でダンスパフォーマンスを披露しました。

◆ネイルアート

後期授業の総合科目「ヒュウマンライフを学ぶ～ネイルアートで社会問題にチャレンジしよう～」は、社会問題を解決するソーシャル・ビジネスの観点からネイルアートの技術・企画・経営について学び、市のイベント等に学生がネイルサロンで出店し、その売上を人権団体に寄付するするプロジェクト学習です。この科目を履修する学生12名がネイルサロンを出店し、たくさんの親子が来店しました。

地(知)の拠点

十文字学園女子大学
COC センターニュース№7

大学人サミット「大学自慢コンテスト」に出演

第9回大学人サミット"信州まつもとカレッジ2015"が11月7日・8日の2日間にわたり松本大学（長野県松本市）で開催されました。「大学人サミット」は、全国の国公私立の枠を越え、共に集い、強い大学、個性あふれる大学づくりを語り合う参加型シンポジウムとして、2007年から全国の大学で開催されているものです。

11月8日に行われた「大学自慢コンテスト」は、自由なテーマや方法で、自分の大学を自慢するもので、本学を含む9大学がエントリーしましたが、女子大学からの参加は、本学が初めてのことです。メディアコミュニケーション学科4年の鴻巣麗奈さんと原田郁帆さんが「プラスとなる 人づくり 街づくり」をテーマに、学生とプラスちゃんによる地域活性化や学生の育成の取組を紹介するプレゼンテーション用の資料を作成しました。

当日は、全体のプレゼンテーションを馬場さんが、プラスちゃんの紹介を交流文化学科の星野祐子先生が行い、プラスちゃんも特別出演して好評を博しました。

入賞は逃したものの、コメンテーターからは「大学発のイベント、地域イベントへの学生の参加は大学と地域を結び付ける大きな要素となる。プラスちゃんを活用した地域イベントの活性化の取り組みの紹介は非常によかった。」との評価をいただきました。

H27.11.10 信濃毎日新聞

私の大学 自慢はここ

松本大で9大学参加のコンテスト

地域に溶け込んだ活動 キャラ使った商品開発…

地元のゆるキャラの絵づくりをアピールしたり、学生が参加した大学人サミットの様子

長野県の学生が集まって、地域の活性化などを考える「大学自慢コンテスト」が8日、松本市の松本大学であった。自慢の大学を紹介するプレゼンテーションや、地元のゆるキャラの絵づくりなどを通じて、学生が地域に溶け込んだ活動や、商品開発などを通じて、地域の活性化などを考え、意見交換した。

参加したのは、長野県内の大学と、関東地方の大学などの9大学。学生が、自慢の大学を紹介するプレゼンテーションを行ったり、地元の人や、来場者に、自慢の大学のPRをしたりした。

また、小布施町（千曲市）の特産品のクルミを使ったキャンパスクッキーなどを販売したり、地元のゆるキャラの絵づくりなどを通じて、地域の活性化などを考え、意見交換した。

長野大（上田市）の代表として、長野県ゆるキャラ「アルクくん」の絵づくりに参加した、長野大の学生は「地元の人たちと、楽しくコミュニケーションをとることができて、楽しかった」と話していた。

地(知)の拠点

十文字学園女子大学
COC センターニュース№12

地域連携共同研究所　プロジェクト研究
「食育で育む管理栄養士の専門性」特別企画

新座市「親子DEミニウォーキング&スタンプラリー」に健康栄養学科の学生がボランティア参加！

平成27年11月14日（土）、新座市保健センター主催の「親子DEミニウォーキング&スタンプラリー」のイベントに健康栄養学科1年生10人がボランティア参加しました。

イベントでは準備として、健康運動指導士の中村真帆子先生が運動指導を行いましたが、この貴重な経験は健康栄養学科の学生にとって大変貴重な体験となりました。

参加賞の新座オリジナルソウキリンキーストラップを手作り、スタンプラリーのクイズを担当し、大活躍!!

学生たちは事前準備として、スタンプラリーのクイズを考え、参加賞の新座オリジナルソウキリンキーストラップ（プラパン）を手作りしました。このストラップはプラパンにソウキリンの絵を描き、オーブントースターで焼くと、みるみる縮んで写真のような大きさになります。焼く前の大きさはこの程度で、40枚作るにはソウキリンの色塗りに苦労しました。少ない授業の空き時間に皆でがんばりました。

イベント当日は、朝からお天気は雨予報！この日を楽しみに集まった"ちびっこ"たちは、カッパを着て、傘を片手に持って皆であしゃべりしながら歩いたり、川に近びに来ているカモに話しかけたり、日頃仲しいお父さんと学校のお話しながら歩いたり一。後半は体育館でゲーム&ウォーク大会！クイズは新座に関する問題が多かったのですが、これが意外と難問！親子で顔を見合わせて、うーん。クイズに間違えると罰ゲーム！親子一緒にスクワットやペアストレッチなど。でも、子供たちはとても楽しくやっていました。

屋外ウォーキングと体育館での両方のプログラムを楽しむことができ、充実した時間はあっという間に過ぎました。最後に、学生が自然に触れてつくった花束で参加者をお見送りしました。手作りのストラップも「かわいい！！」と参加者に大好評でした。

ボランティアを務めた健康栄養学科の学生は、「参加者がとても笑顔で楽しく運動しているのに大満足。楽しく運動しながら汗をかくほどの運動量が確保できる運動メニューを作成できるのはすばらしい」と健康栄養学科の学生らしい感想を残してくれました。

（プロジェクトメンバー：食物栄養学科 長澤、岩本、井上、健康栄養学科 木村）

地(知)の拠点

十文字学園女子大学
COC センターニュースNo.8

平成 27 年度 COC 地域志向教育研究
新座市女性職員と女子学生のWi n-Wi nキャリア支援事業

“女性が輝く新座市”の実現に向け 新座市女性職員 キャリアアップ研修を実施

新座市役所においては、職員 827 人（H25.4.1）の 51.6%が女性職員（特に 40 歳未満では 57.1%が女性職員）と過半を占めていますが、管理職に占める女性職員の比率は 20.2%に留まっています。今後 10 年で管理職の年齢層である 40 歳以上の職員に占める女性職員の割合が大幅に増加する状況が見込まれますが、女性職員は出産や子育て等のライフイベントも激変し、能力が発揮しきれていない状況もあり、女性職員のさらなる活躍推進に向けた取組が求められています。

そこで、女性職員の登用促進に向けた人材育成や意識改革の観点から、女子大である本学の知見を活かし、新座市と連携して、新座市役所の女性職員を対象としたキャリアアップ研修を実施しました。

研修は、本学で、11 月 9 日(月)と 11 月 17 日(火)の 2 日間行い、それぞれ 20 人の女性職員が参加しました。今回の研修では、普通解のない複雑な問題を解決するために、組織内の部署や専門分野の壁など、立場の違いを超えた対話により、協調アクションを生み出し、未来思考で社会を変えるフューチャーセッションという新しいスタイルのワークショップが行われました。

「女性が活躍できる環境づくり ～その先にあるキャリア・ステージに向けて～」というテーマで、㈱インフォメーショングランニング代表で男女共同参画に造詣の深い越城美恵子氏（新座市在住）によるインスピレーショントーク（基調講義）が行われた後、本学文芸文化学科の松永教授がイノベーション・ファシリテーター（変革を起こすための道筋を描く役割）となり、10 年後の新座市の未来として、女性が活き活きと働け、一般企業からも視察に訪れるような日本一ユニークな施策「新座モデル」を考えるというテーマでブレインストーミングを行いました。その後、「新座モデル」が内閣府に表彰されたという想定で、新聞記事にまとめ、各グループがプレゼンテーションを行いました。

セッションのクロージングとして参加者の感想やアクションを伝える一言宣言では、「市役所では一方通行の研修が多いが、自由な雰囲気の中でのセッションを通して豊かな発想が生まれた」「部署が異なり普段話したことのない職員と意見交換できてよかった」「気づきの場になった」「職場でも展開したいなどの声が聞かれ、「女性が輝く新座市」の実現に向け貴重な研修の機会となりました。

協力教員：十文字こと・女性と教育研究所亀田教授、人間福祉学科田嶋教授、文芸文化学科藤野准教授

地(知)の拠点

十文字学園女子大学
COC センターニュースNo.9

“野火止用水ご当地グルメ・ゆるキャラフェスティバル®”に プラスちゃんが出演しました

12 月 20 日にふるさと新座館の野火止ふるさと広場で、“野火止用水ご当地グルメ・ゆるキャラ®フェスティバル”が開催されました。当日は、野火止用水流域の 5 市（清瀬市、東久留米市、新座市、志木市、朝霞市）のご当地キャラクターやご当地グルメが大集合しましたが、本学からプラスちゃんと、サポーターとして“プラスちゃんくらぶ”の学生も特別参加し、イベントを盛り上げました。

野火止用水流域の 9 市（立川市、東大和市、小平市、東村山市、清瀬市、東久留米市、新座市、志木市、朝霞市）で組織する「野火止用水ネットワーク会議」が主催し、流域自治体や市民相互の交流を深めるために、開催されたものです。会場に設けられた特設ステージでは、ゆるキャラ®たちが地域の魅力をＰＲしましたが、プラスちゃんと一緒に、“プラスちゃんくらぶ”の金子部長と本木副部長が本学キャンパス内のイルミネーション公開などを紹介しました。

また、学生のボランティアサークルの“さつまいもプロジェクト”と“ゾウキリンくらぶ”も参加しました。

◆さつまいもプロジェクト

“さつまいもプロジェクト”は、新座産のサツマイモを使った手作りお菓子（スノーボールやさつまいもタルト、カップケーキ）を販売しました。売上金は東日本大震災の義援金として寄付されます。

◆ゾウキリンくらぶ

“ゾウキリンくらぶ”は、野火止用水、雑木林の種時・保全活動に取り組む行政やボランティア団体のネットワークである“ふるさとの緑と野火止用水を育む会（ＨＵＧネット）”の活動のパネル展示や松ぼっくりなどを使った子供たちのクラフト教室のお手伝いをしました。

地(知)の拠点

十文字学園女子大学
COC センターニュースNo.10

地域連携共同研究所 プロジェクト研究
「食育で育む管理栄養士の専門性」

“新座市健康まつり”に 食物栄養学科３年生がボランティア参加

平成 27 年 10 月 18 日（日）に新座市保健センターで開催された“新座市健康まつり”で食物栄養学科 3 年生 20 名がボランティア参加しました。

◇骨密度測定コーナーを開設

参加した学生のレポート（その１）

岩本ゼミ、井上ゼミの 12 人は、会場の設営等を手伝いました。長澤ゼミは骨密度測定コーナーを担当し、160 人の市民の骨密度を測定しました。骨強度測定では、学生が測定の結果とリーフレットを使って骨強度を保つための食事や運動について説明しました。

市民の方と接し、改めて媒体を用いた栄養教育が大切なことを実感しました。毎年骨密度の測定を楽しみにしている方が多く、嬉しかったです。骨密度は 20 代までの生活が大きく影響するので、若い人にもっと来てほしいと思います。

新座市健康まつりには、予想以上に多くの方が来場し、市民の方の健康に対する意識が高いことに驚きました。健康まつりでは、新座の特産野菜を使った料理（黒米ごはん、野菜たっぷりけんちん汁、ポパイかん、にんじん白玉シロップがけ）が無料で配布され、試食させていただきました。地域の方々と触れ合う貴重な体験をすることができ、すごく充実した一日でした。市民にとっても、自分の健康を見つめ直す機会となり、美味しい料理が食べられる楽しい活動だと感じました。

◇食育推進ポスターを作製・展示

新座市から食育推進ポスターを作成してほしいとの依頼を受け、食物栄養学科３年生（岩本ゼミ、井上ゼミ、長澤ゼミ合同）が 2 班に分かれ、それぞれのテーマでポスターを作成し、新座市役所（食育活動紹介）と新座市健康まつりで展示しました。

参加した学生のレポート（その２）

★A班

新座市健康まつりでポスター展示するということでしたので、テーマは、地産地消と絡めて新座市の特産品を紹介することにしました。また、ポスターに新座市のマスコットキャラクターであるゾウキリンと本学のプラスちゃんを取り入れたことで、子どもたちの目にとまり、ポスターを読むきっかけになったら良いと考えました。身近な特産品を紹介することで、子どもたちに興味を持ってもらえたと思います。字を見やすく大きめに書いたり、ふりがなをふったり、見る人の立場にたって絵や字の大きさ、また、文章を考えることがとても大事だということを学びました。実際に保健センターで親さんに見てもらうことができて、とてもやりがいや達成感を感じました。ひとつのポスターを作成し、地域の食育に携われるということで、大変貴重な経験をすることができました。

★B班

新座市から食育推進ポスターを作成してほしいとの依頼を受け、ポスターを作成にあたり、3 つのゼミ生がどのようなポスター作製をするか、KJ 法を学び、印象のない意見を発表し合えるよう、ブレーンストーミングの原則①批判禁、②自由奔放、③質より量、④連想と結合をもとに意見を集約し、何について食育推進啓発を行うかを決めました。結果にできるように思いましたが、夏休み中に何回か集まりポスターの内容が数回変わり、非常に大変でした。結果的に若い女性の健康問題として重要となっている便秘を取り上げることにしました。テーマが決まると図でわかりやすく表現するなど、早い段階でポスターが完成しました。ポスター作成はとても楽しく、テーマに沿って深く学び便秘の理解が深まりました。

（プロジェクトメンバー：食物栄養学科 岩本、井上、長澤、健康栄養学科 木村）

地(知)の拠点

十文字学園女子大学
COC センターニュースNo.11

平成 27 年度 COC 地域志向教育研究
「食育で育む管理栄養士の専門性」特別企画

食物栄養学科４年生が 「食文化セミナーと調理実習」のアシスタントに

平成 27 年度農林水産省「消費者ニーズ対応型食育活動モデル事業」の一環として、一般社団法人「すこやか食育工ブラック」主催（本学共催）の**「和食文化と日本の心を知ろう！プロの調理人によるセミナーと調理実習」**が 9 月 5 日（土）、11 月 8 日（日）、12 月 12 日（土）の 3 回にわたり、本学で開催されました。

本学の調理室を会場に開催し、食物栄養学科の 4 年生がアシスタントに入り、セミナーおよび調理実習の体験をしました。

◆和食文化と日本の心を知ろう！プロの調理人によるセミナーと調理実習◆

○目的：家庭を持ち、子育てをする未婚女性を対象に、和食の魅力と調理技術を講習する調理教室

○講師：東京農業短期大学調理長 鈴木 直登 先生

2009 年 東京都優秀技能者（東京マイスター）受賞

2013 年 厚生労働省「中堅技能者（現代の名工）」表彰

2014 年度 文化庁長官表彰

○プログラム

・和食の歴史や料理の由来、箸の使い方をはじめとしたマナーや所作に関する講演

・プロによる切り下ごしらえから盛の使い方などの実演

・プロによる実演指導のもと、和食の調理実習と試食

ご飯を“魚料”という理由など食べものの由来や和食ならではの盛り付けの工夫をはじめ、季節の野菜を使った和食の調理実習とその試食など、盛りだくさんの内容でした。

献立は、祭物（七宝菜市・地鶏土佐煮）、秋刀魚蒲焼と故郷大根、卯の花、秋野菜のみそ汁、黒米飯。鈴木先生がお料理のデモを行い、その後参加者がグループに分かれて、調理して盛り付けました。

お料理はどれも優しくやわらかな味。「和食」の基本の考え方、食材や料理をすることの基本を学んだ体験となりました。

参加した学生の感想

「現代の名工」である鈴木先生のお話が聞け、その調理技術を間近で見ることができ、自分にとって大変良い刺激となりました。和食の調理法の一つ一つに意味があり、古くから受け継がれている調理法が今でも使われていることが改めて凄いことなのだと感じました。華麗な包丁技術、調理技術を見せていただき、手間をかけることが大切で、目で見て楽しく、食べて美味しい日本食の奥深さを実感し、日本食の奥深さ、楽しさ、食の面白さを学びました。

また、和食は四季と深く関わっており、1 年を通して様々な食材を食べることが出来る、私たち日本人は幸せであると思いました。受講生の女性たちが、鈴木先生の話を熱心に聞く様子や、楽しそうに調理している姿を見ることが出来ました。食について学びたいと人がこんなにも多いなと思い、嬉しかったです。このセミナーにアシスタントとして参加し、地域の人を招いて教室を運営することの大変さや役割点などを見つけることが出来ました。

管理栄養士として働くまでの食文化の知識や調理技術を学ぶだけでなく、コミュニケーション能力を培う機会となりました。これからもっと食材や料理のことを勉強しなければならないと思いました。とても貴重な経験ができたことを本当に嬉しく思います。

参加者の感想

料理に対する心構えや姿勢など、料理教室や料理教室で教わることが出来ないことを沢山知ることが出来ました。単なる料理の仕方だけではなく、まな板の使い方、日本の歴史的な背景などの話もあり、知らなかったことを色々と知ることが出来、興味が沢山ありました。健康、文化、環境などの側面からも食事に関する考え方が深まりました。

目の前でプロの方に、一通り料理していただくだけではなく、食にまつわるいろんな話を聞けて勉強になりました。きちんと丁寧に作ることは手間もかかるし、道具も沢山使って大変だなと思いました。自分の身体のためにも周りの人のためにも少しずつ取り入れたいと思います。切り方で味が変わること、衛生面にすぐに取り入れることは難しいかもしれませんが、まずは知ること、勉強することが貴重だと感じました。日本人として和食をこれからも大切にしていきたいです。和食や日本食への知識がないことを感じ、日本の食についてもっと学びたいと感じました。

（プロジェクトメンバー：食物栄養学科 長澤、鈴木、井上、健康栄養学科 木村）

地(知)の拠点　十文字学園女子大学 COCセンターニュース№13

「110番の日」キャンペーンで児童教育学科3年生が活躍！ 関根さんが一日警察署長に!!

「110番の日」（1月10日）にちなんで、平成26年1月8日（金）、新座市役所正面玄関前のイベント広場で、新座警察署による「110番の日」キャンペーンが行われました。110番通報の正しい利用を呼びかける広報活動として実施されたもので、本学から、児童教育学科3年の関根沙美さん、鶴見華美さん、鈴木彩佳さん、正木元みさん、岡平名奈枕さんの5名が警察官の制服を着て参加し、代表して、関根さんが一日警察署長をつとめました。また、プラスちゃんもソウキリンと一緒に応援に駆けつけました。

110番は、事件・事故などに遭った時や目撃した時などに利用する緊急通報の専用電話で、埼玉県内からの通報はすべて埼玉県警察本部の警令室につながります。平成26年度の県内の110番通報は約65万件、48秒に1件の頻度で、そのうち約2割が間違いやいたずら、緊急ではなかったということで、県警では緊急性の低い相談や問合せを受け付ける「けいさつ総合相談センター（プッシュ回線#9110または048-822-9110）」の活用など、適切な110番通報の利用を呼びかけています。

最初に、110番通報の経験がある鶴見さんが署員からインタビューを受けた後、110番通報のポイントとして、「①事件ですか？事故ですか？②いつのことですか？③場所はどこですか？④犯人の特徴、現場の状況⑤あなた（通報者）の住所、氏名、電話番号」などを指令室の警察官から質問されるので、落ち着いてはっきり話すことが大切との説明がありました。

続いて、関根さん、正木さん、岡平名さんが110番通報の模擬訓練を体験しました。事故や路上人倒れ、振り込め詐欺などの場面を想定して、110番通報を行うもので、新座警察署員が当事者にふんする臨場感のある緊迫した雰囲気の中での訓練でした。

路上人倒れ 110番通報模擬訓練

また、本学のPRとして、学生たちがパネルを使って"きつまいもプロジェクト"の活動内容やFIFA公認サッカーグラウンドを活用した未来のなでしこジャパン"育成の取組などを紹介した後、会場の参加者に粗品を配布しました。

厳寒に負けず頑張った5名の学生たちの活躍で、「正しい110番通報の利用キャンペーン」に貢献することができました。

（協力：児童教育学科細田ゼミ、学生支援部）

地(知)の拠点　十文字学園女子大学 COCセンターニュース№14

地域連携共同研究所　プロジェクト研究
「十文字学園女子大学シニア健康教室」

いつまでも若々しく、元気に！ シニア健康教室を開催 学生が補助スタッフとして活躍

健康栄養学科では、栄養士の資格をもとに、健康・運動・教育のそれぞれの分野で活躍できる人材育成に取り組んでいますが、本学科の特性を活かしたCOC事業の地域貢献活動の一環として、1月18日（月）に本学記念ホールでシニア健康教室を開催しました。

超高齢社会を迎え、医療費の負担を抑制することは、各自治体にとっての喫緊の課題であり、本事業は地域のシニア層の食と運動への意識を高め、健康長寿のまちづくりに貢献するため実施したものです。本学の学生が学びの実践の場として、補助スタッフとして活躍しました。

健康チェック

当日は、大雪の悪天候にも関わらず、12名のシニア世代の皆さんが参加し、学生スタッフが中心に行った体脂肪率測定などの健康チェックの後、健康栄養学科の木村晴子先生の「食生活を考える」ミニ講義や飯田路佳先生のチェアエクササイズ、ダンスムーブメントの指導を楽しみながら受講していました。

◆◆◆十文字学園女子大学シニア健康教室の概要◆◆◆
- ○日　時　平成27年11月23日、12月14日、平成28年1月18日、2月8日 いずれも14:00～16:00
- ○会　場　本学記念ホール1階
- ○対　象　新座市、清瀬市のシニア世代の方（定員30名）
- ○内　容
  - ①　計測・健康チェック：血圧、体重、体脂肪率等を計測し、体調を確認して無理のない運動強度を判断する。
  - ②　ミニ講義：栄養、健康、運動への理解を深め、健康への意識を高める。
  - ③　ストレッチ・チェアエクササイズ：手軽に楽しく続けられる運動の仕方を提案する。
  - ④　ダンスムーブメント：音楽のリズムとイメージを融合したナチュラルで心地よい動きを楽しむ。

木村先生の「食生活を考える」ミニ講義

布を使った「ブー・チュキ・バー」体操

チェアエクササイズ

タオルを使ったダンスムーブメント

（プロジェクトメンバー）健康栄養学科　高橋正人、池川雅樹、長澤裕彦、木村晴子、高橋弥子、飯田路佳、樋野裕子、佐々木常雄、石山隆之

地(知)の拠点　十文字学園女子大学 COCセンターニュース№15

ふるさと新座商店会
「第2回チャリティーもちつき大会」に参加！

ふるさと新座商店会主催の「第2回チャリティーもちつき大会」が2月6日（土）、野火止ふるさと広場（ふるさと新座館となり）で開催されました。本学の学生たちがつきたての餅をあんこ餅、きなこ餅、からみ餅にして、600食をチャリティー販売（新座市コブシ福祉基金への寄付）しました。本イベントは本学の地域連携推進機構が共催し、COC事業の一環として、「ソウキリンくらぶ」の学生を中心に企画段階から関わり、ポスターも学生が制作しました。

当日は本学の1粒大豆部が力強い演奏を披露し、「プラスちゃんくらぶ」のアテンドでプラスちゃんがソウキリンと一緒に参加し、イベントを盛り上げました。

また、「ソウキリンくらぶ」が原料を、狭野ゼミの「文化継承プロジェクト」が小川町の地元からつくった手打ち「けんちんうどん」を販売しました。売上金は、新座市コブシ福祉基金等に寄附されました。

厳寒に負けず頑張った学生たちの活躍で、地元商店会による触れ合いの輪を広げる地域活性化の取り組みに貢献することができました。

ふるさと新座商店会・新座駅前を盛り上げていくため平成27年に結成された、駅周辺の24店舗・事業所などで構成する商店会

通行者に餅つき

プラスちゃんとソウキリンが餅つきを応援

3粒大豆部の力強い演奏

600食のあんこ餅、きなこ餅、からみ餅づくりに奮闘する"ソウキリンくらぶ"の学生

つきたての餅をチャリティー販売

"プラスちゃんくらぶ"の学生がアテンド

子どもたちに大人気のプラスちゃん

"ソウキリンくらぶ"が飾りをチャリティー販売

狭野ゼミが"けんちんうどん"をチャリティー販売

地(知)の拠点　十文字学園女子大学 COCセンターニュース№16

HUGネットが代表者会議を開催 活動報告や課題など、活発に議論

「ふるさとの緑と野火止用水を育む会」（通称：HUGネット）の第4回代表者会議が、2月17日（水）に本学で開催されました。

HUGネットは、野火止用水とその周辺の緑木林の維持・保全活動を行うために、本学の呼びかけにより、昨年3月に発足した12の市民団体、新座市の関係6課、本学（児童教育学科狭野敦子教授、ソウキリンくらぶ）で組織するネットワークです。昨年11月には緑木のネームプレートを作成し、野火止用水沿いの緑木に取り付ける活動を行いました。

会議では、平成27年度のHUGネット活動や各団体の活動状況、平成28年度のHUGネット活動計画について報告を行い、意見交換を行いました。特に、野火止用水沿いの緑木に取り付けたネームプレートの維持管理や、植物の剪定・草刈などの環境整備のありかたなどについて活発な議論が行われました。

また、経済産業省エネルギー庁の「夢の根左衛活動」として委託を受けて本学が取り組んでいる「石巻プロジェクト」、「エネカフェ」の活動について、学生や地域団体の皆さんが報告を行いました。

今後もHUGネットを核に、構成メンバーが連携・協力して、野火止用水と周辺の緑木林の維持・保全活動を推進していくことを確認して、会議を終了しました。

「石巻プロジェクト」の活動報告を行うソウキリンくらぶの学生

地(知)の拠点　十文字学園女子大学 COCセンターニュース№17

本学2団体が新座市コブシ福祉基金へ寄付 広がる温かい支援の輪

2月18日、本学児童教育学科の狭野敦子教授が取り組む埼玉県「竹山高ふるさと支援隊」の学生と、ボランティアサークル「ソウキリンくらぶ」の学生が新座市役所に表彰状を送付、活動で得た収益金を新座市コブシ福祉基金に寄付した。

寄付金は、昨年2月7日と、本年2月6日にふるさと新座駅前の野火止ふるさと広場で行われた「ふるさと新座商店会チャリティーもちつき大会」でのチャリティー収益。

須田市長との面談には、新座市のイメージキャラクター・ソウキリンと本学のマスコットキャラクター・プラスちゃんも駆けつけ、熱意した表彰状の学生を応援した。寄付金を受け取った須田市長は、「お疲れさまでした。福祉にしっかり役立てます」と話し、学生一人一人に声をかけながら談笑。学生らは活動の様子を報告した。

狭野ゼミは、埼玉県比企郡小川町竹沢地区が県上で地域おこしの活動に取り組んでおり、2月6日のもちつき大会で、県上の食文化と言われる「うどんづくり」を新座市に紹介するために「けんちんうどん」の販売を行った。うどんは、県上の住民にうどん作りの技術指導を受け、学生たちが比企郡内の材料を使用して作った。「料理も同じ工程を作るので、固くなったり、柔らかくなってしまったりして大変でした」と思考錯誤しながら作った76食分の「けんちんうどん」は、もちつき大会当日、あっという間に完売した。

記事：常盤ひとみ（ソウキリンくらぶ顧問・ライターデザイン研究会）、写真：石原（COCセンター）

ソウキリンくらぶ

狭野ゼミ「竹山高ふるさと支援隊」

地(知)の拠点

十文字学園女子大学
COC センターニュース№18

「ふしぎマップ」で新座の PR を本学学生が制作、新座市長に贈呈

大学のある新座市の PR に活用してもらおうと、人間発達心理学科とメディアコミュニケーション学科の学生が「～女子大生と行く～新座ふしぎマップを作成。2 月 22 日には学生らが新座市役所を訪れ、浜田健司市長にマップを贈呈した。

マップは、心理学科 3 年の丸山詩織さんら東野晋人先生のゼミ生 9 名が、新座市内に古くから伝わる民話や伝説に登場する 13 か所の神様や妖怪などを訪ねあるいて紹介文を作成。それをもとに、メディアコミュニケーション学科 4 年の原田紗帆さんら 2 名の学生が同学科の加藤晃介先生の指導を受けながら、「女子大生らしい華やかなイメージ」のデザインに仕上げた。

マップを受け取った浜田市長は、「新座にはいろいろな伝説があります。それをどう市民に広く知らせ、後世に残していくかが今後の課題です。こういった取り組みは非常にありがたい」と感謝の言葉を述べた。

市長への贈呈後、学生たちは新聞社 3 社とテレビ局 1 社から取材を受け、「実際に制作して新座の魅力は変わったか」という記者の質問に、学生は「新座市に関する本を読んだり実際に現地まで足を運んだりして、何もない場所にも新しい魅力を発見できました」などと答えた。また、マップの第 2 弾の予定を聞かれると、「今回は私たちだけで取り組みましたが、後輩たちがこれを見て触発されれば」と可能性を語った。贈呈の様子は、当日夕方のテレビ埼玉の「イブニングニュース」で放送され、大きな反響があった。

マップは、フルカラー A 4 版、三つ折りで 5,000 部を発行した。13 種類の神様や妖怪の伝説や民話の地図に加え、拙いながらも女子大生らしい視点が随所にみられる紹介文で構成されている。漫画家・新井淳治さんのイラストも楽しい。

記事：植原詩子（メディアコミュニケーション科）、写真：東園ひとみ（法学科）／デザイン：原野晋

新聞各社が取材

テレビのインタビューを受ける学生

2016.2.27 東京新聞

新座の伝説 歩こう

13ヵ所イラスト付きで紹介

2016.3.4 埼玉新聞

妖怪伝説 巡り歩いて

十文字学園女子大学 新座「ふしぎマップ」発行

2016.3.1 朝日新聞

世にも奇妙な新座の地図…

十文字学園女子大生の「市内の伝説たどり作成」

市に贈呈 魅力発信 役立てて」…

地(知)の拠点

十文字学園女子大学
COC センターニュース№19

「超高齢社会に向けた健康長寿のまちづくり」をテーマに十文字学園女子大学 COC シンポジウムを開催

平成 28 年 2 月 27 日（土）にふるさと新座総市ールで本学 COC シンポジウムを開催しました。「超高齢社会に向けた健康長寿のまちづくり」をテーマに、講演及びパネルディスカッションを実施し、約 180 名の方にご来場いただきました。

基調講演には、筑波大学大学院人間総合科学研究科教授の久野譜也氏を迎え、「健康長寿社会を実現する Smart Wellness City」と題して、ご講演いただきました。講演では、2025 年に団塊の世代が 75 歳以上の後期高齢者となる超高齢社会に向けて、車に依存しないで歩くことが生活習慣病の予防、医療費の抑制に効果的であり、そのためには都市の集約化、歩行空間と公共交通の整備、街のにぎわいの創出など、"歩いて暮らせるまちづくり"を進めることが健康都市の方向性であるとのお話しがありました。

その後のエクササイズタイムでは、本学健康栄養学科の飯田静佳教授の指導で、椅子に座った状態で身体を動かすダンスムーブメントを会場の皆さんが体験しました。

パネルディスカッションでは、パネリストとして、講演をいただいた久野教授、浜田健治新座市長、新座市市教育委員会委員長の伊藤延世氏、本学健康栄養学科の長澤伸江教授の 4 人が登壇し、本学児童教育学科、COC 副機構長の星野敦子教授がコーディネーターを務め、市民の健康づくりの取り組みの紹介や課題、今後の取り組みへの期待などについて、意見を交換しました。まとめとして、久野教授から、自治体が取り組む市民の健康づくりの施策を科学的に検証し、その検証結果を施策にフィードバックする取り組みが必要であることや、本学の学生の地域貢献活動の取り組みについて触れ、学生のフィールドワークを通した学びが大切であるとのコメントをいただきました。

基調講演でドイツ・フライブルグ市の歩いて暮らせるまちづくりを紹介

飯田静佳教授によるエクササイズタイム

パネルディスカッションのコーディネーターを務める星野敦子教授

新座市の取り組みを発表する浜田新座市長

市民レベルの取り組みを発表する伊藤延世氏

本学の取り組みを発表する長澤伸江教授

伊藤延世氏から寄せたお母様のワンポイントレッスン

地(知)の拠点

十文字学園女子大学
COC センターニュース№20

「草の根 NPO 等活動支援・成果報告会」で"ソウキリンくらぶ"の学生が「石巻プロジェクト」の成果を報告

平成 28 年 2 月 29 日（月）に、地域ボランティアサークル"ソウキリンくらぶ"の学生 4 名が経済産業省の補助事業である平成 27 年度「草の根 NPO 等活動支援・成果報告会」で、「石巻プロジェクト」の成果報告を行いました。

この成果報告会は、一般財団法人日本立地センターがエネルギーや放射線の理解促進活動を行う団体のコミュニケーション紙として発行する「わかばレター VOL.4」で、紹介されました。また、「エネルギーを考える未来塾（六ヶ所村）」企画にも本学の教員・学生が参加しています。

■石巻プロジェクト

□概要：本学の地域連携ボランティアサークル「ソウキリンくらぶ」（指導：児童教育学科星野敦子教授）が経済産業省資源エネルギー庁の「草の根支援活動」の補助金を受けて実施する"地域社会に広く届ける『水産物の安全性と放射線のはなし』"プロジェクト

□目的：大学、商工会、地域の環境団体等が連携して、環境問題を考えるとともに、魚の安全性について学び、地域商店会の復興を図る。

□主な活動：

①石巻魚市場の見学会と勉強会（石巻研修会）

②エネカフェ in Niigata

・石巻における活動状況・成果、エネルギー問題のパネル展示など

③情報発信のためのイベント

・平四丁目商店会「さんさ祭り」、新魚市場東フェスティバル、平四丁目商店会「鮮つき大会」等

■エネルギーを考える未来塾（六ヶ所村）

□概要：新市場の女子大生（本学）と地元の学生（八戸学院短期大学、北海道教育大学函館校）、準備・下北の女性が集い、エネルギー事情を共に学ぶプロジェクト

□主な活動：核燃料サイクル施設の視察、エネルギー事情を学ぶ講演会、テーブルトーク、交流会

□本学の参加者

・学生：幼児教育学科 3 年梅澤はや、児童教育学科 3 年佐藤優奈・佐山恵菜・中川万緒、同学科 2 年木村詩織、食物栄養学科 2 年玉利美咲希、生活情報学科 2 年東園ひとみ

・教員：児童教育学科 星野敦子教授、松岡聡特別教授

地(知)の拠点

十文字学園女子大学
COC センターニュース№21

本学主催の「さくらまつり 黒目川ウォーキング」に"ソウキリンくらぶ"と"プラスちゃんくらぶ"の学生が参加

平成 28 年 3 月 26 日（土）に、本学地域連携推進機構の主催による「さくらまつり 黒目川ウォーキング」が開催され、"ソウキリンくらぶ"と"プラスちゃんくらぶ"の学生がボランティア参加しました。

本イベントは、平四丁目商店会が毎年行っている「さくらまつり」に合わせて、商店会の活性化と新座市東部地域の観光資源の開発を目的に、同商店会と連携して昨年度に続き実施したものです。今年度は埼玉県の「黒目川まるごと再生プロジェクト」による黒目川防災調整池整備事業の完成イベントを兼ねており、埼玉県朝霞県土整備事務所をはじめ、朝霞市、新座市、ならびに関係団体の全面的なご協力を得て実施されました。参加者数は、120 名と前回の 34 名よりも大幅に増加しました。

ウォーキングスタート地点の朝霞台駅北口広場では、プラスちゃんと朝霞市民まつりのシンボルキャラクター"彩夏ちゃん"が参加者を出迎え、"プラスちゃんくらぶ"の学生が参加受付を行いました。黒目川沿いのウォーキングコースには、「ひざおり水車広場」、「柳中黒目川公園」、「妙音沢のハタザクラ」、「栄東公所」の 4 つのチェックポイントが設けられ、"ソウキリンくらぶ"の学生が地域の皆さんと協力して、参加者の案内を行いました。

実施後の「さくらまつり」会場に設けられたゴールでは、完歩者に子ユの福焼きや特製コースター、ソウキリンキャンディーなどの特典品をプレゼントしました。ゴールテント前に設置したプラスちゃん・ソウキリン・彩夏ちゃん・コバトンの通り抜コーナーではたくさんの子どもたちが楽しんでいました。

また、「さくらまつり」のオープニングセレモニーにプラスちゃんとソウキリン、彩夏ちゃんが参加して会場を盛り上げ、特設ステージで行われた音楽イベントで本学の吹奏楽部と 2 和太鼓部が楽隊らしい演奏を披露しました。

・本事業の担当教員：児童教育学科 星野敦子教授
・ソウキリンくらぶ：学生 6 名（指導教員：星野敦子教授）
・プラスちゃんくらぶ：学生 3 名（指導教員：天野天文学科 星野敦子教授）
・協力：日本薬科大学ボランティアサークルボランティアワーク（大内先生）学生 1 名
・実施団体：埼玉県朝霞土整備事務所、朝霞市、新座市、埼玉東部消防組合朝霞消防署、柳瀬川に親しむ会、ミュウキンゲン（ホタルを育てる会）、新座第二小の地域住民、柳中小の生徒会

地(知)の拠点

十文字学園女子大学
COC センターニュース No.23

地域連携共同研究所　COCプロジェクト
「食育で育む管理栄養士の専門性」

食物栄養学科の３年生が新座市食育推進啓発クリアファイルをデザイン

新座市では、第２次いきいき新座21プラン（第２次新座市健康づくり行動計画・新座市食育推進計画・新座市歯科口腔保健推進計画）を平成27年３月に策定し、平成27年度から平成36年度までの10年間を計画期間として、健康づくりを進めています。

この新座市食育推進計画が策定されたことを記念して、食育推進計画の行動目標の１つ、「朝食を毎日食べる人の増加」を目指し、小中学生を対象に「朝ごはん」をテーマとしたクリアファイルを作成することになりました。そのクリアファイルのデザインを学生の視点で考えてほしいと依頼されました。

COC 事業「食育で育む管理栄養士の専門性」プロジェクトの学生がデザインを考え、新座市保健センターの主査栄養士の西川さん、学校栄養教諭や学校栄養職員等にご意見をいただき完成させました。

クリアファイルは、市内小中学校 23 校に在籍する小学５年生及び中学１年生全員に配布されます。ファイルの裏面は、毎日朝ごはんを食べたか、朝ごはんの内容は「主食・主菜・副菜がそろったバランスのよいものか、よくかんで食べたか、家族と一緒に共食できたか」が、子どもたち自身でも毎日チェックできる内容となっています。

学生の感想

「朝ごはん」をテーマとした小中学生向けクリアファイルのデザインを考えてと依頼され、すぐにデザインの方向性は「かっこいい」に決まり、下書きは比較的簡単にできました。しかし、それを実際にパソコンで描くのがとても難しかったです。「かっこいい」フォントがどれか、フォントや背景の色は何色が好ましいか、食事の内容はどういったものにするかなど、「かっこいい」を表現することは容易ではありませんでした。食事内容は限られたフリーイラストを組み合わせて考え、子供の食事量を考慮してイラストの食品の量を明るといったことも行い、できるだけ理想の献立が伝わるように工夫しました。また背景の色については、数パターンを作成し、どれが一番好ましいか考えました。背景やフォントの色は、新座市のキャラクターであるジウキリンをイメージしました。

朝ごはん食べた？のチェックシートの項目も学生が考えました。どのような朝ごはんを食べてほしいのか、10 項目を提案しました。この漢字は読めるかしら？など、子どもが理解できる言葉使いや表現を見極めることがむずかしく、苦労しました。最終的に、子どもの食事指導の経験が豊富な保健センターの西川先生に、アドバイスをしていただきました。クリアファイルの作成をとおして、食生活改善をめざした食育において、人にわかりやすく伝えるための媒体づくりの難しさを体験することができました。完成したクリアファイルを手にした時は大感激でした。

学生がデザインした食育推進計画啓発クリアファイル

（表）　（裏）

（プロジェクトメンバー：食物栄養学科 井上久美子、松本珠美、高橋祥江、健康栄養学科 木村麗子）

（4）　COC事業のチラシ等

■地域志向教育研究費（地域課題解決型研究／若手スタートアップ）

ピアノによる「ふるさと新座館」ホール活性化事業:ふるさとにいざ✤オータムコンサートのチラシ

地(知)の拠点

Meet the music

にいざ
✤
十文字

音楽でつながろう

ピアノ
久保田葉子

ヴァイオリン
上野真理

ふるさとにいざ✤オータムコンサート

Program

2015.10.3（土）
開場　13:30　開演　14:00
会場　ふるさと新座館ホール

料金　無料
対象　小学生以上
申し込み方法
「往復はがき」または「メール」のどちらかでお申し込みください。
※詳しくは裏面をご覧ください。

お問い合わせ
十文字学園女子大学 地域連携推進課
048-477-0958（直通）9:00～17:00（土・日・祝除く）

主催　十文字学園女子大学、新座市教育委員会
後援　新座市、新座市文化協会

■地域志向教育研究費（地域連携創造・支援事業）

ふるさとの緑を育むプロジェクト・野火止用水保全プロジェクト:ふるさとの緑と野火止用水を育む会（HUGネット）リーフレット

■地域志向教育研究費（地域課題解決型研究／若手スタートアップ）

新座市「フシギマップ」プロジェクト:女子大生と行く“新座ふしぎマップ”

■地域志向教育研究費（地域課題解決型研究／学科横断プロジェクト）

プレプラ@十文字の森:プレプラのチラシ

■地域連携共同研究所

食育で育む管理栄養士の専門性:学生がデザインした新座市食育推進計画啓発クリアファイル

■COC事業シンポジウムのチラシ

文部科学省 地(知)の拠点

十文字学園女子大学 JUMONJI UNIVERSITY

十文字学園女子大学COC事業シンポジウム

超高齢社会に向けた

健康長寿のまちづくり

十文字学園女子大学では、平成27年4月に地域連携共同研究所を設置し、本学の専門的知見を活かした身体運動や食育など、市民の介護予防・健康増進に資する取り組みを新座市と連携して推進しています。本シンポジウムを通じて、超高齢社会に向けた健康長寿のまちづくりをあらためて考えるきっかけにしたいと考えています。

▶開会挨拶

学長／地域連携推進機構 機構長 横須賀 薫

▶基調講演

「健康長寿社会を実現するSmart Wellness City」

筑波大学大学院 人間総合科学研究科 教授 久野 譜也 氏

筑波大学大学院 人間総合科学研究科 教授 久野 譜也 氏

筑波大学大学院博士課程医学研究科修了。医学博士。
(株)つくばウエルネスリサーチ代表取締役社長兼任。
専門分野:スポーツ医学、健康教育、ヘルスプロモーション。
Smart Wellness City首長研究会事務局長。
内閣官房「IT戦略本部・新戦略推進専門調査会 医療・健康分科会」委員など多くの公職を務める。
主な著書「朝トレをする人が10年後、20年後になっても老けない46の理由」毎日新聞出版など。

▶Smart Wellness City … 住民が健康で元気に幸せに暮らせる「ウエルネス(健幸)」をまちづくりの中核に位置付け、地域の担い手である住民が「健康」を通じて主体的に健康維持・社会参加する取組(「歩いてしまう、歩き続けてしまう」まちづくり)

▶エクササイズタイム

「ダンスムーブメント」

健康栄養学科 教授 飯田 路佳

▶パネルディスカッション

「超高齢社会に向けた健康長寿のまちづくり」

パネリスト:新座市長 須田 健治 氏、筑波大学大学院教授 久野 譜也 氏、新座市教育委員会委員長 伊藤 延世 氏、食物栄養学科教授 長澤 伸江

コーディネーター:地域連携推進機構 副機構長 星野 敦子

平成28年2月27日[土] 13:30-16:00 (受付開始 13:00)

ふるさと新座館ホール 参加費無料

【会場地図】 ふるさと新座館

新座市野火止6-1-48
TEL:048-478-4523
JR武蔵野線「新座駅」下車、徒歩10分

[主催:十文字学園女子大学 後援:新座市]

申込方法 参加ご希望の方は、電話もしくはホームページから事前にお申し込みください

TEL 048-477-0958 (直通)

ホームページ http://www.jumonji-u.ac.jp/coc/

問い合わせ:十文字学園女子大学 地域連携推進課
〒352-8510 埼玉県新座市菅沢2-1-28

■さくらまつり"黒目川ウォーキング"のチラシ

文部科学省 地(知)の拠点

さくらまつり

黒目川ウォーキング

朝霞台ー妙音沢ー栄緑道コース

START (朝霞台駅北口)

北朝霞駅

朝霞台駅北口

朝霞市産業文化センター

朝霞県土整備事務所

朝霞市立朝霞第三中

朝霞市立朝霞第十小

朝霞市立朝霞第一小

朝霞市立朝霞第四小

朝霞駅南口

青葉台公園

埼玉県立朝霞西高校

朝霞警察署

朝霞中央公園野球場

埼玉県立朝霞高校

GOAL (栄緑道)

栄緑道

さくらまつり会場

埼玉県立新座総合技術高校

新座市立第四小

黒目川

東武東上線

東武野線

チェックポイント1 ひざおり水車広場

遊歩道の完成を記念して新しく作られた広場で「黒目川まるごと再生プロジェクト」の紹介をしています。パネルの見学をして資料を受け取ってください。

チェックポイント2 畑中黒目川公園 (畑中ホタル公園)

畑中ホタル愛好会が中心となって蛍の飼育をしています。スタッフの指示にしたがって、ホタル飼育室の様子を見学してください。

チェックポイント3 妙音沢のハタザクラ

2014年に発見された新種の桜で、おしべが花弁のように変化してできる「蕚弁(きべん)」が5枚ついているのが特徴。新座市が「ミョウオンサワハタザクラ」と命名した、美しく珍しい花をご覧ください。

チェックポイント4 栄集会所

新座葉っぱの社美術館(館長 石山昭)の特別展示を行っています。作品をお楽しみください。ゴールでは特製コースターをプレゼントしています。

開催日時 平成28年 3月26日(土) 10:00〜13:00 歩行距離 約6km (約1.5時間程度)

スタート地点 東武東上線 朝霞台駅 北口 10:00〜11:00受付 のぼりを持った学生が目印です。

ゴール地点 さくらまつり会場 受付(栄緑道)

参加無料 FAXまたは、電話、メールでお申し込みください。

小雨決行です(荒天の場合中止)。ゴール地点の栄緑道で開催しているさくらまつりには出店があります。
休憩スペースや飲食スペース、アユの塩焼きほか、参加者特典を多数ご用意しています。皆様奮ってご参加ください。

地(知)の拠点 十文字学園女子大学COC事業の取り組み

「地(知)の拠点整備事業(COC事業)」とは

本学COC事業の概要

新座市をキャンパスに！＋(プラス)となる人づくり、街づくり

十文字学園女子大学 学生育成方針 ～Jモデル・プラス～

若桐会会報

研究活動による地域貢献

人にプラス ＋ 街にプラス

学生による地域貢献（社会人力の育成）

私の大学 自慢はここ

松本大で9大学参加のコンテスト

東日本各地の大学について所属する学生や教職員が紹介する「大学自慢コンテスト」が8日、松本市の松本大であった。同日まで2日間、同大で大学の学びや特徴を紹介して交流した「大学入サミット」の一環。松本大をはじめ、弘前大や岩手県立大など東北、関東、信越地方の国公私立計9大学が参加し、それぞれの特色をユーモアたっぷりに伝えた。

大学のゆるキャラの着ぐるみも登場してアピールした十文字学園女子大の学生

地域に溶け込んだ活動

キャラ使った商品開発…

各大学の学生らは、持ち時間の9分間で、写真や映像を使って自慢のエピソードや特色を紹介。最初に発表した松本大は「地域まるごとワンキャンパス」をテーマに地域社会に溶け込んで活動する学生活動を伝えた。小型無人機「ドローン」で撮影したキャンパス周辺の映像も紹介した。

東日本国際大（福島県）の学生3人は、キャンパスに留学生が多いことや食堂のおばちゃんの人柄を自慢し、会場の笑いを誘った。十文字学園女子大（埼玉県）の発表には同大のゆるキャラ「プラスちゃん」の着ぐるみが登場し、学生がプラスちゃんを使って商品開発をしていることなどを紹介した。

長岡大（新潟県）の代表として、長岡藩ゆかりの酒造「十分杯」の普及活動について発表した2年の片桐勇太さん（20）は「他大学の面白い取り組みを知ることができて楽しかった」と話していた。

2015.11.10
信濃毎日新聞

新座で十文字女子大生が一日署長

いたずら通報ダメ!!

警察官の制服姿で110番の適正利用を呼び掛けた（左から）鈴木彩桂さん、鶴巻名真帆さん、一日署長の関根沙美さん、正木えみさん、鶴見茉美さん＝13日午前、新座市役所前

あす1月10日は「110番の日」

1月10日の「110番の日」を前に、新座署（高橋政宏署長）は8日、新座市内の十文字学園女子大学の大学生を一日警察署長に委嘱し、新座市役所前で通報の適正な利用を呼び掛けた。

制服姿で登場したのは、同大学人間生活学部児童教育学科3年の関根沙美さん、鈴木彩桂さん、鶴巻名真帆さん、正木えみさん、鶴見茉美さんの5人。代表で関根さんが一日署長を務めた。

5人は110番通報を模擬体験。倒れている人の発見、たばこを吸った少年らのたむろなど不通報し、現場の様子や住所などを丁寧に伝えた。体験者は「警察が質問してくれるので簡単だった」「住所の目印が道路の電柱に表示されていることを知った」などと感想を口にした。同署によると、県警への110番は年間約60万件で、48秒に1件のペース。しかし約2割はいたずらや緊急性のない通報が占めている。

日頃は市内小学校で子どもたちと触れ合っている5人。「110番の日」は小学校で耳にしていたそうだ。関根さんは「いたずらの110番も多いと知ったので、警察官が早く本当の現場に駆け付けられるよう、適切な利用を大学でも伝えたい」と話した。（江田憲）

2016.1.9
埼玉新聞

新座の伝説 歩こう

十文字学園女子大生がマップ製作

❶伝説をイラストで紹介した新座ふしぎマップ
❷マップを作った学生たち＝新座市で

新座市の十文字学園女子大の学生が、市内に残る伝説とその舞台を紹介する「女子大生と行く 新座ふしぎマップ」を製作した。五千部作り、さらに千部を市に寄贈した。市観光プラザなどで無料で配られる。

マップはA4判の三つ折り、枝分かれ状に南なる道中で力尽きたがいも主人公説をはじめ、池に入って消えた少女のかわりにコイが現れたという「蛭ヶ池」など十三の伝説をイラスト付きで紹介。裏面の地図に各伝説にまつわる場所を記した。

同大の人間発達学部人間発達心理学科に所属する学生八人が中心となり、同学部メディアコミュニケーション学科の学生二人の協力を得て完成させた。学生たちは市史などで伝説を学び、各スポットに足を運んで住民らの聞き取りもした。

人間発達心理学科三年の丸山詩織さん（二一）は「住宅地や公園など何げない場所でも伝説を感じることを感じ、マップを手に歩いてみてほしい」と話している。

（柴田崇和）

13ヵ所イラスト付きで紹介

2016.2.27
東京新聞

世にも奇妙な新座の地図…

十文字学園女子大生ら、市内の伝説たどり作製

市に贈呈「魅力発信 役立てて」…

2016.3.1
朝日新聞

妖怪伝説 巡り歩いて

地域の妖怪や聖霊にまつわる伝説などを紹介した「新座市ふしぎマップ」を、同市菅沢の十文字学園女子大学の学生10人がまとめた。マップを同市に寄贈した女子学生たちは「伝説の地を訪れてほしい」と話している。

新座市内の13の伝説を紹介した「ふしぎマップ」を手にする十文字学園女子大生ら＝新座市役所

十文字女子大生 新座「ふしぎマップ」発行

マップを作成したのは、人間発達心理学科の8人とメディアコミュニケーション学科の2人。

「昔から人々の心にある妖怪の歴史を知ることは、人の心理を知ることに通じる」と、日々通学している新座の不思議な伝説に着目。市内の伝説の地を訪れ歩いて取材を重ね、妖怪のオリジナルキャラクターも考案。半年がかりで完成させた。

掲載した伝説の地は13カ所。旧川越街道の大和田・勝瀬の坂に伝わる名馬「鬼聖毛（おにかけ）」の話は、足を負傷し、息絶えても主人のために江戸を駆け抜けた馬の話。そのほか、弁財天が祭られている「妙音沼」や、近づいた子どもを飲み込んでしまう「小畑が淵」など興味深い地名がいっぱい。

マップはA4判カラーで三つ折り。現代風のイラストと簡潔な説明で、言い伝えが残る現在の地名も併記している。

人間発達心理学科3年の丸山詩織さん（21）は「伝説の地も、今は住宅や公園になっている場所が多い。マップを手に現地を訪れ、物語に思いを巡らせてほしい」と強調。

マップは5千部を発行し、新座市にも寄贈。多くの活用に期待を寄せていた。須田健治市長は「さっそく観光プラザなどで配布する。子どもたちにも配りたい」と話していた。

（江田隆）

2016.3.4
埼玉新聞

超高齢社会に向けた健康長寿のまちづくり

▲（市民カメラマン・佐瀬智さん撮影）

2月27日(土)、ふるさと新座館において、市内にある十文字学園女子大学主催の「十文字学園女子大学COC事業シンポジウム」が開催されました。この催しでは、須田健治新座市長が「新座市が進める健康長寿のまちづくり」をテーマに講演を行い、市の取組を参加者の皆さんにお話ししました。

▶十文字学園女子大学人間発達心理学科の東畑ゼミから、市へ「～女子大生と行く～新座ふしぎマップ」(3,000部)を寄贈

広報にいざ
2016.4月号

地（知）の拠点整備事業
平成27年度実績報告書
新座市をキャンパスに！＋（プラス）となる人づくり、街づくり

発行日　平成28年7月
発　行　十文字学園女子大学　地域連携推進機構
〒352-8510 埼玉県新座市菅沢2-1-28
TEL 048-477-0555（代表）　　FAX 048-478-9367